

---

# 例えば仮の魔王様

零月零日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

例えば仮の魔王様

### 【Zコード】

Z8607V

### 【作者名】

零月零日

### 【あらすじ】

故郷の村を追い出され、大切な者を奪われた少年は帝国に復讐を誓つた。これは、魔を極めた、一人の生き残った男の子の復讐の物語——のはず。とりあえず……この修羅場をどうにかしなさい！英雄色を好むといっても、あなたは『魔王』でしょう？ 9／25、序章プロローグと二章を変更致しました。

## プロローグ

「ごめんなさい父さん、母さん。僕はあなたの息子じゃないんです。化け物なんです。前世の記憶がある僕は、二人の息子になれません。

「あなたは化け物なんかじゃありません。掛け替えのない私の可愛い息子です」

「お前が自分の事をどう思つていようが、お前は俺の自慢の息子だ」

友達のために喧嘩して泣いて、雪だるまが溶けちゃったのに泣いて、家族でご飯を食べても泣いちゃうお前は、私達の可愛い息子だよ。

二人の言葉に、僕は涙を零した。僕は泣き虫だ。

屋敷に幽閉されていた貴族の娘である母さんと、それを助け出した執事の父さん。二人の愛は前途多難だったが、話を聞かされた僕にすれば、最高の結ばれ方をしたと思う。

そんな一人に愛されて、僕は嬉しかった。そして申し訳なかつた。こんなにも愛してくれていたのに、僕はそれを拒否して来た事になるのだから。だからこれからは一人に愛された分、僕も一人を愛そうと思った。

けど、するんじゃなかつた。

僕は間違つっていた。

何が愛されたから愛すだ。

『魔王が復活した』、と。

ソウルサー<sup>チヤー</sup>

魂の探索者と呼ばれる、予言者もどきの魔法使いが言った。

黒髪の魔法使い、生まれてまだそれほど経っていない。

彼の者を今すぐ殺さなければ、のちに世界は大きな変革を迎える  
？？といつは言った。

それにより、未だ魔王が世界征服をしようとしている、といつ姫  
言を信じていた帝国は、帝国中の黒髪の子供を虐殺し始めた。

帝国は元々黒髪の人間が少ない国だ。

だから、僕もすぐにその対象となつた。

「逃げる。ここは俺達がなんとかするから」

「でも父さんや母さんが？？」

「いいから行きなさい！」

駆け出す僕と親友。

執事の前は剣士をやつしていた父さんと、魔術師として名を馳せた  
母さん。

一人なら、なんとかなる。

けれど、立ち止まって振り返った僕が見たのは。

剣。

一本の長剣が、僕を庇つた母さんを？？その母さんを庇つた父さ  
んを？？一人そろつて突き刺した。

僕が立ち止まって、投げられた剣に刺されそうだったから。

僕は理解した。

僕はなんとも罪深い存在だったのだと。

力ある者が怠惰に過ぎる事は許されなかつたのだと。

必死に逃げているのに、決して助かりそうな気はしなかった。  
どれだけ必死に走つても、森に逃げ込んでも、足音が止まない。  
草木が深く生い茂る森の中に少しだけ開けた場所があつた。そこでふと親友が歩みを止める。  
そして……。

「もしもお前が魔王だつたら？？、世界征服をした魔王だつたら、あつとこんな事にはならなかつたよな」

僕の前にいるのは、僕だ。僕が僕の声で僕に語りかけてくる。目の前にいるのはどこからどう見ても、僕でしかない。頭のてっぺんからつま先まで見ても、やはり僕だ。頭の中身を覗いたとしても、DNAや指紋を検査した所でも僕だわ。

けれど、僕は知つている。

これは僕じやなくて、彼だと言ひつ事を。

不意に、身体が鉄になつたよつにまるで動けなくなつた。  
魔法。

彼も、魔法を使えたのだ。

そのまま僕は抱えられ、木の影に隠される。  
そして、彼は僕の笑顔を浮かべた。

「じゃあな、親友。これは俺が勝手にやつた事だ。お前が気に病む  
必要なんてない」

巫山戯るなよ。

なんでだよ。どうして僕を庇つんだよ。

なんだって、『勇者』のお前が『魔王』の僕に化けて、代わりに死ななきや駄目なんだよ。

彼は人当たりが良く、誰にでも優しく、だが怒るとときは怒る、出来た奴だった。前世の記憶の有る、転生者である僕にも優しくしてくれた、同じ村に住む僕の親友。  
それは、僕が異能の力を持ち、魔王と呼ばれても、差し出さなければ村を焼くと言われても、変わらなかつた。  
結果、村は帝国に攻められた。

村は焼かれ、なんとか逃げ出した僕ら家族と親友は、けれど追っ手に追われ続けていた。

三日前に両親は足止めをするため、僕らと別れた。

その次の日、追っ手は変わらず追つて来た。

鉄のよじに身体が動かぬ僕には、手も足も知恵も出せない。

でも、目から涙は出ていた。

いや……それは、ただ降り始めた雨が、僕の額に当たつて滴り落ちただけだった。

「いつかで良い。お前が本当に魔王で、王国なんて作つたらさ、俺をそこに住ませてくれよ。お前が作る国だからあんまり期待してないけど、でも……」

そう言つて、僕である彼は涙？？ではなく笑顔を見せた。僕ならば、泣いていたのに、彼は泣かなかつた。

「お前の国は、愛に溢れてるだろ？？な。出来たらそれを、少しでも俺にわけてくれよ」

それが、孤児である彼が、僕に向けた最後の言葉だつた。

「黒髪……、貴様魔王だな！」

「やつてくれたな人間ども！ 皆殺しにしてくれるー！」

僕は身体を動かせない。

だけど、意識はある。目は見えるし、耳も聞こえるのだ。

僕は、僕の声で魔王らしく語る、勇者の彼の声を聞いた。

「大人しく死ね！ 魔王！」

「人間風情が調子に乗るな！」

それから、幾度と無く剣が混じり合いつ音を聞いた。

呻き声、断末魔が何度も聞こえる。

その度に、帝国の騎士を煽る僕の声が聞こえた。

けれど、その言葉も次第に小さく、苦しそうになつていき……。

遂に。

「やつたぞ！ 魔王を殺したぞ！」

聞こえなくなつた。

夜の闇程に暗い雲が雨を降らせていた。土砂降りだ。歩くたびにぐじゅぐじゅと音を立てる森で、僕は立ち渴んでいた。

身体が動けるようになったのは、あれから半日後の事だった。

そこに転がっているのは、まぎれもなく僕の身体だ。

首から上が無くなつた、僕の死体。

「……やはり、彼も駄目でしたか」

僕に掛かっていた魔法を解いたおっさんがそつぎつた。  
銀縁眼鏡が光っているのは、月の光が原因だらう。断じて、おっ  
さんの涙であるはずがない。

僕が泣いていないのに、こんなおっさんが泣いているはずはない  
のだ。

「『魔法使い』は皆、死ぬ運命にあるのやも知れませんね」

魔法使いと魔術師。

似ているようでもあるで違ひ、一つの異能力者。

「巫山戯るな！ 何が魔王だ！ 何が化け物だ！」

魔王の僕が死んだ事は、国中に知れ渡つた。  
当時六歳、まだ純粋な子供だった僕の首を曝すと、國民から反感  
を買つと判断したのか、僕の顔は魔王として曝される事はなかつた。  
記録上、僕は死んだ。

だが、僕は生きている。その顔を隠す事も無く生きられた。

僕の身代わりがいたから。

もういいや、もういいよ、もう止めだ。一度目の人生、達觀して  
悟つて偽善者ぶつて生きようかと思つていたが、それに何の意味が  
ある？

僕の幸せを奪うなよ。やつと掴みかけた幸せを？？、家族を、友  
達を奪うなよ。

オーケー、理解した。僕がこの世界に生まれたのは、このためなんだな？

こんな腐った世界、滅ぼしてやるよ。

これは、魔法、『魔の法則』を極めた転生者、魔王の物語。僕こと、生き残った男の子の復讐の??、

「好きです、一緒にいさせてください」寄り添われた。

復讐??

「好きになっちゃったんだからしようがないじゃない、この馬鹿ー。」後ろから抱きつかれた。

ふ、ふくしゅ??

「私はあなたに愛されたいのです」抱きしめられて、見つめられた。

復讐の物語??、かもしだれない。

おじさんでした。

「初めまして、レイと申します。ランクはGですので、この度は雑用として護衛に同行させていただきます。不束者ですが、よろしくお願いします」

「……」  
こういう言い方は失礼でしょうが、おじさんです。やけに物腰が柔らかい、無駄に丁寧な言葉を喋る男の人でした。

無精髭に優しげな顔立ちの、銀縁眼鏡をかけた中年の方です。毛嫌いするようなタイプの人ではないのですが、どことなく胡散臭いのは何故でしょう。

だからおじさんと言つよりは、おっさんと呼ぶ方が正しいような……、そんな人でした。

「おいおっさん、来る場所間違えてんじゃねーか？」

「おっさんは酷いですね。僕はまだ……三十代ですよ」

「十分おっさんじゃねーかよ。つーか、僕ってなんだよ、良い年しあつさんがきもいぞー！」

「一人称ですか？」

「そういうんじゃないよー……くそー、おっさん本当に役に立つか？」

あまり言いたくありませんが、実は私も心配です。

まあ、こつして少しでも人が集まってくれたのはありがたいのですが……。

高額の報酬が得られる依頼を探していた僕に、顔なじみの受付嬢、二ナが教えてくれたのが事の発端だ。

---

「首無し磔貴族の護衛任務ですか？」

「しーつ！ そんな大きな声で言わないでください！」

おいおい二ナ、今の君の声の方が大きかったぞ。僕は目立ちたくないんだ、なるべく静かに頼むよ。

二ナは短めの茶髪で、お転婆気質の女の子だ。

ギルドの受付にて、僕は二ナに顔を近づけ、女子高生が噂話でもするような小声で話す。

「あれですよね？ 雇っていた護衛が全員、街の広場に首を切り落とされて見せ物にされた事件。その雇い主である貴族様の護衛任務、ですか？」

「そうですが、……あまり顔を近づけないでください」

「一つと嫌そうに顔を背ける二ナ。あつそう、ごめんなさい。と心の中で謝罪し、心の中でニヤニヤと笑みを浮かべながら、表面上は無表情で淡々とそのまま話を続ける。

「護衛対象の腕が立つので護衛はそれほど要らず、人望があつて護衛の人材は集まつたけれど、見せしめの効果で御者がいない。それに腕利きの護衛がやられた以上、護衛に専念したいので雑務処理をする人が必要、という感じですかね。それでGランクの雑務として僕に話が来た」

「はい。どうせ金さえ払えば、どんな依頼でもこなしてくれますよね？ ギルド側としては、あなたみたいな人材、凄く助かりますよ。

『Gランクの天才』さん

ブルリと身体が震えた。その名で呼ばないでくれ、禁断症状が出る。

僕のそんな様子を二ナはざん引きしていた。恐らく、僕がそう呼ばれて武者震いしていると思つてゐるのだろう。ナルシストだ、きやー変態！ みたいな心境だろつ。

逆だ逆、恥ずかしさのあまり体全体が震えてるんだよ。手もブルブルしてるんだよ。怒りと羞恥心で爆発してしまいそうだよー！ と言いつつも、実は満更でもない。

「まあ、任せてください。その通り名は好きじゃないですが、依頼通り、雑務をこなしますよ」

金さえ払えば、何だってやるさ。

今はまだ、下積み期間だ。じっくり、ゆっくり、じわじわと。

水から煮るように、僕の復讐はゆつたりと進むんだ。

依頼の主は、アイカシア国の貴族だ。観光のためにこのランベルグ帝国に来ており、そこで事件は起こったようだ。

アイカシア国は民主国家で、僕も一田置いている国だ。多数決とか、実に合理的だと思わないか？ 数が全てを制する国、いいね。

そして依頼主、カイル・フュリアスはアイカシア国の裁判長を司る男だ。

カイルは彼の地の田舎出身で、学業優秀な彼は瞬く間に上流階級の仲間入りを果たした。その裁判は公平かつ道徳的で国民から支持を得ていると語る。

だが、公平と言つのは一般市民から見た意見であり、貴族など頭の固い金の亡者どもには厄介でしかないだろう。カイルは身分の高い者には恨まれていてもいると言つて良い。特に、アイカシア国は元々王政であり、有力貴族が未だに多くいるのだ。

観光に出かけたこの気を逃すまいと、暗殺の計画を企てたに違いない。

国際問題に発展しそうだが、それは彼が抑えてくれているようだ。実に優秀な男だ。そして、それ故に狙われているのではないかな？ 戦争は儲かる。やりたいやつはいくらでもいるのだ。そいつらは戦場に出てきはしないが。ああ、胸くそ悪い。

任務当日、集合時刻である昼過ぎ、僕は十五分程早く集合場所である国境の門へと着いた。

馬車はあちらが用意したみたいで、豪華な四角い馬車が一台止まっていた。僕の仕事は御者と食事の準備、それに不寝番かな。

今現在確認出来るのは、剣士の少年とでかい盾を背負った男、それに依頼主（馬車の中に入っているよう）だ。ふむ、この程度の人数か？ 剣士と盾の男は仲間と言う訳ではないようで、両者腕を組んでじつと待つていてる。僕はそれを遠くからニヤニヤしながら見ている。こいつらと関わりありませんよ、という距離で。深い意味はない。そして集合時刻、そこには依頼人と僕を含め、七人程集まつていた。

遅れて来たのは、魔術師と槍を持った青年だつた。五分前行動を知らないのか？二人は別々の方角から集合時刻ギリギリに來たので、お仲間と言う訳ではなさそうだ。といつも、全員が初対面じゃないかな？

と、馬車が開き、依頼人のご登場である。

降り立つたのは、眼鏡がよく似合う金髪の優男だつた。

「私がカイル・フュリアスだ。今回は世話になる」

カイルは三十代後半で、いかにも文官といつ出で立ち、争い事とは無縁のように伺える。僕の目から見れば、優秀オーラが滲み出ている。噂は真実か。

と、彼の影から一人の少女が現れた。

「娘のリースです。私も戦いますので、よろしくおねがいします」

現れたのは、息をのむ程の美少女だった。

腰まである神々しさを感じさせる金髪、宝石のような輝きと魅力のある碧眼。異性は愚か同性までも虜にさせる美貌の持ち主で、挨拶と共に見せた微笑は、天使の微笑と言つても過言じやない。すらりとした身体で、人形のような完成された形をしている。それでいてどこか幼げな雰囲気の持ち主で、思わず愛でたくなる可愛さがあった。

騎士を思わせる薄手であるが確かな鎧、腰に吊るされた細身の剣。  
……ああそつか。この事件は、彼の愛娘、『戦姫』リース・フュリアスを狙つたのかもしれないのか。

リース嬢は『戦姫』と呼ばれる美少女だ。その可憐さは、ギルドの受付で人気の二ナと比べるのも鳥游がましいほどである。純白の輝きを放つ剣で戦う彼女に、戦女神を投影する者も少なくないと言つ。

だが今回は事件のせいか、顔色があまりよろしくないようだ。心優しい事である。護衛はその職務を全うしただけだろうに。腰に吊るされた剣が、噂に名高い『聖剣レイリース』だろう。命名は彼女の名前をもじったようだ。純白の刃を持つ魔剣……じやなくて聖剣。何か特殊な力があるに違いない。

彼らの自己紹介に続いて、ギルドメンバーも名乗り始める。

「シューイ、だ。ランクはA、剣士」

シュイは尖った赤毛の持ち主で、霸氣を感じない少年だ。だが、背中に普通の長剣より更に一回り大きな剣を吊るしており、存在感がある。

ランクAというのもなかなか珍しい。強さとしては、上級魔獣に引けを取らないレベルと言つた感じだろうか。十代後半でその地位に上り詰めているのだ、もう少し優秀かもしない。ただ僕の目からは、どうにも剣を振るう事に戸惑いがあるよう見える。人を殺すのが怖いのだろうか？ 護衛対象に特別な感情を抱いていないようなのは高評価だな。あのような事件の後に付ける護衛だ、ギルドもなかなか解っているじゃないか。

「あたしはフイー。ランクはB、魔術師」

フイーは、ギルドから集められた中で紅一点、短めの茶髪を持つ少女だ。黒のローブを羽織り杖を持った、いかにも魔術師と言つた出で立ち。一メートル半にも及ばない身長、言わずもがな幼児体形である。

しかし、俗に『偏屈魔術師』と呼ばれるフイーが何故だ？ プライドが高く、負けず嫌いの彼女。

研究室に引き籠つてばかりで、碌に依頼を受けないと聞いていたが……。世間に疎く今回の事件を知らないのか？ それとも、別の意味があるのか……。まあ、なんでもいいか。

「ガイラスだ。ランクはB、槍使い、よろしく」

ちゃら男、というのがガイラスの第一印象。今後もそれは変わらないだろう。リース嬢に色目使つてるのがバレバレなんだよ。

ただ、ムカつく事にこの男、雰囲気は三流だが装備だけは一流だ。手に持つている槍は、『螺旋槍』と呼ばれる、ロンギヌスの槍の

劣化版みたいな奴だ。色々貫ける槍、といった感じである。魔術構造としては、回転と振動により分子レベルにダメージを『与える魔道具だ。いくら金を積んだんだろう。

「ラングだ。ランクはB、盾を扱う」

「おお、面白い奴が来たもんだ。」

ラングは見た目と年齢が一致しない、老け顔のがたいの良い男である。まだ二十代だと言うのに、老練な冒険者に見えるのだ。まあ、冒険者歴十年のベテランには違いない。特徴は、亀の甲羅のようなサイズの鋼鉄製の盾を背負っている所。

僕の意見としては、そんな重くてでかくて持ち歩きづらい装備使いうなよ、と言いたい所だが、彼の武勇を聞く限り、そんなことは関係ないようだ。

あれで殴るんだと、敵を撲殺者である。  
そして、僕も自己紹介をした。

それぞれの簡単な自己紹介が恙無く終わつた所で、ガイラスが僕に噛み付いて來た。いや、言葉にこそしないが、ここにいる全員が僕に疑いの眼差しを投げかけて來ている。……おお、リース嬢までもか！

ふむ、やはり僕のこの見た目、とんでもなく胡散臭いようだ。

「おっさん本当に役に立つのか？」

ガイラスの……いや、このメンバー全員の疑いを晴らすべく、僕はこう言つた。

「少なくとも、来るかどうかも解らない敵のために雇われたあなた達とは違いますから。僕は必要でしょうし、役に立ちますよ？」

暗に、護衛なんか要らなくね？ と言つた僕の言葉に、一同は呆然としていた。

あれ？ なんか間違えたか？  
僕は慌てて言葉を付け加える。

「すみません、皆さんと同じ報酬を受け取りますから、謙遜しませんでした」

てへっ、と笑ってみせる。

依頼人は呆れた顔で、ギルドメンバーは苛ついた顔を僕に向けた。  
それはそうだろう。

Gランクのくせに、Bランクの報酬を受け取るのだから。嫉妬かい？ いけない子達だな。僕が力不足に見えるかい？

そういうのは、僕の実力を見てからにしてもらおう。

Gランク。

それは、ギルド初期登録者のランクであり、そのランクの任務はどれほど遂行しようと、ランクを上げるためにギルドポイントが手に入らない、報酬だけの任務。

ネズミ退治、草刈り、ゴミ拾い……路地裏の子供でも出来そうな簡単な仕事をこなす任務、それがGランク任務だ。

ランクが上がる、ということは自身の評価が上がる、ということに等しい。ランクが上がれば、ランクが指定された高額報酬の任務を受けたり、各国で高待遇されることが多くなる。というのも、所詮は評価の基準であり、通り名持ちにはランクは関係ないのだ。よ

くも悪くも。

僕こと『Gランクの天才』も、Gランクでありながら個人としての評価がべらぼうに高いため、こんな横暴が許されるのだ。

## GIGIの天才 1（後書き）

感想・評価を頂けると嬉しいです

本当に変なおじさんです。

どうして、ギルドはこんな人を派遣して来たのでしょうか？

『Gランクの天才』と呼ばれている、この手の仕事では最高の人材と聞かされていましたが、本当なんでしょうか？ これで腕が悪かつたら、ただの陰険なおじさんでしかありません。さすがにそれはないでしょうが……。

隊列は、先頭にガイラスさん、馬車の横に私とフイーが一緒の馬に乗り、ラングさんが反対側にいます。殿はシュイ君という形です。勿論、御者にはレイさんが付いていて、馬車の中にはお父様もいます。

街道はお世辞にも整つておらず、馬車がゴトゴト音をたてています。アイカシア国は街道を石畳で綺麗に舗装していますが、ランベルグ帝国はまだのようですね。今の皇帝が悪政なのが原因でしょう。魔物や刺客に襲撃される事も無く、比較的ゆっくりなペースで進み、三分の一程進んだ所で野宿する事に決めました。街道沿いの木陰に馬車を止めます。

「あたしが結界張る」

と、地面に住居一つ分くらいの魔術陣が浮かび上がりました。この結界は、今魔法陣の中にいる人しか出入り出来ないタイプですね。それを詠唱も無く、この速度でやつてのけますか。むむ、優秀な魔術師ですね。国にお持ち帰りしたいです。そうすれば、もつと国も安全に??。

「リース、なんか良からぬ事を企んでるでしょ？」

「い、いえ何も！ 結界、ありがとうございます、フイー」

「……なら良いんだけど」

ジト田でこちらを見るフイー。動物的勘でしょうか？

フイーとはここまで来る馬上で仲良くなりました。

「フイーは何の研究をしてるんですか？」

「魔術」

「そうじやなくて、どうこつた分野の魔術なんですか？」

「全部」

という感じです。なんとなく、フイーが『偏屈魔術師』などと呼ばれる理由が解りました。子猫みたいに可愛いのに、無愛想な返答をするから。

「ふうひ、意外と疲れるな馬車の旅つて……」

お父様が伸びをしながら馬車から出てきました。ずっと座つてゐただけですから、そうでしょうね。それに、運動もあまりされないし。

「まあ、話し相手には困らなかつたけどね。レイはなかなかに面白い男だよ」

「そりなんですか？」

面白いと言つやは、奇想天外とか、奇天烈とか、変人の方が似合ひそりですけど。勿論、口に出しては言いませんが。

「明日もこのペースで行こひ。これなら明日にはアイカシア国内に入れるし、どこか村の宿に泊まる事も可能だ」

「やつなると……あれ？ あのおっさん要らなくね？」

「…………」

と、シュイ君とガイラスさんが話していました。ラングさんは横に立つて話を聞いているだけのようです。

それにしても、ガイラスさんは毎回の事をまだ根に持つていてるようですね。仲良くしてとは言いませんが、険悪なムードにはならないで欲しいです。

「馬鹿な事言つたな。…… つと、このよつた予定でよろしくですか？」

シュイ君が私とお父様に確認に来ます。お父様も私も異論は無く頷きます（レイさんの必要性は確かに薄くなりますが、御者さんとしては必要ですね）。

と。

「夕食が出来ましたよー」

そんな声が辺りに響きました。むなしく。

タイミングが良かつたのか、それともその台詞のインパクトが強かつたのか、レイさんを除く全員が口を動かすのを忘れて、呆然としていました。

いつの間にか焚き火が出来ており、厚手の鍋が火にかけられていました。

え？ いつの間に？

そんな私達一人一人を押して、鍋の元にレイさんが集合させます。

その間、私を含めた皆は、驚きのあまり彼の為すがままです。

そして、鍋の蓋を開けてレイさんは言いました。

「本日の夕食は、七種の野菜と極楽鶏のシチューでござります」

「……はい？」

思わず涎が零れそうな、良い匂いが辺りを満たしました。  
私の目の前には、お屋敷で出されるものと比べても全く遜色のない、立派なシチューが。

「ノーランド産の生クリームを贅沢に使用し、最高級品と名高い極楽鶏と野菜七種を煮込みました。味付けは疲労回復のため、少々濃いめです。味が濃いようでしたら黒パンもありますので、それに付けて召し上がるだければ」

.....

え？ えーと、いえ、はい？

レイさんは説明しながら、お皿によそつてスプーンと一緒に一人に手渡して行きます。あれ？ この銀のスプーン、私の屋敷で使っているのより綺麗だ。

まだ、皆動けません。鍋の隣にはバスケットに入つたたくさんの黒パンがありました。焼きたての様で、ほかほかと湯気を立てています。

全員に皿が行き渡り、いただきます！ とレイさんが一人で言って、やっと私達は考える事を思い出しました。

いたたきますは、たくさんいるのに一人で言うと、何故だか凄く虚しく感じるものでした。

「では、どうぞ」貰味ください」「

「いや！ 何平然とどんな事やつてんだおつせん！？」

「うつと笑うおじさん」、ガイラスさんが噛み付きました。銀の

スプーンを突きつけて、怒鳴ります。

私も同じ気持ちです。

「お口に合いませんでしたか？ それなら、すぐにでも別物を作りますが」

「そうじゃねーよ！ 何平然とした顔でこんな料理作ってんの！？ これ、護衛の旅だぞ！？」

「腹が減つては戦が出来ぬ、という言葉があります。食事はどんな時でもちゃんと取らなければいけませんよ？ あつ、戦闘になりますとも、私が片付けますから御心配なく」

「そうじゃねーんだよっ！ わっかんねーかな！？」

頭をがしがしと搔いて、ガイラスさんが怒鳴っていますが、レイさんは顎に手を添え、首を傾げるばかりです。

「わあ、凄く胡散臭い仕草……。」

ガイラスさんが言いたいのは、そんな立派な食材どこから調達して来たのか、旅で作るものじゃない、いつの間に作ったのか？ といふ感じでしょうか。

「……とつあえず、食べましょっ？」

冷めて美味しいくなるのも勿体無いので、私がやんわりとたしなめます。ここは素直にいただきましょう。その後で、話を聞けば良いのです。

「？？？…？」

私が一口食べた事で、皆が食べ始めました。

「……うまいな」

「ありがとうございます」

ショイがおじさんを褒めていますが、私はそれどころではあります  
せんでした。

## 何このシチューや!?

私が今まで食べて来たものの中で、一番美味しい！ 城で出された料理よりも、他のお屋敷で出されたものよりも凄く美味しい！ 生クリームの濃厚な味わいが口の中に広がって、ジャガイモや人生は口中で溶けていきます。極楽鶏の肉は柔らかく、噛めば肉汁が溢れて、それがシチューと絡み合つて絶妙な深みを出します。

ରୂପ

「どうしました？ お口に合いませんでしたか？」

別段気落ちした方でもなく、平然とレイさんは言いました。  
この料理がまずいわけがない！ という自信はなさそうで、美味しくなければ別の作りますよ、といった感じです。

「いえ。凄く美味しいです。それでその、レイさんはどこの宫廷で働いた事でもあるんですか？」

۹۱

そうなんですか……つて、厨房に入った事があるのなら、働いた  
も同然じゃないですか！

「この料理はその時厨房にいた人のを真似しまして。別に、僕でなければ出来ない料理ではないですよ。高級食材の力も借りています

6

「それだ！ おっさん、極楽鶏って言えば一羽金貨一枚だぞ？」

れに、ノーランド産の生クリームって、こつからどれだけ離れてると思ってんだ？ つていうか、どうから出したそんなもん！」

極楽鶏と言えば、富廷の料理でも扱われる超高級品、美味しさも折り紙付きです。ですが、それよりも上を行くのがノーランド産生クリームです。ノーランドは大陸の最北端の国で、そこで作られる乳製品は至上の味と呼ばれています。ただ、保存が難しく市場には滅多に出回りません。

そんな高級品、どうして……。

「僕の手荷物です」

そう言って、皮でできた上等そうな鞄を見せるレイさん。彼の唯一の持ち物で、御者台に置いてあつたのを微かに覚えています。でも、大きさ的に鍋が入つていれば膨らんで目立つような……。  
いえ、それよりも。

「レイさん、一体いつ調理されたんですか？」

レイさんが声をかけて来たのは、ここに着いてから三十分と経っていないません。いえ、そもそもこの鍋とお皿、それにパンはどこから出したのですか？ パンに至つては焼きたてでしたし……。私は、馬車しか用意してませんよ？

「それは企業秘密です」

「……」  
「……」  
レイとレイさんが不敵な笑顔を見せました。……とても板に付いてます。

「……おかわり」

「はー、エハヤ」

フィーがもう一目食べ終えて、おかわりです。あれ？ この子、そんなに食べるよつた話はしてなかつたけど……。

「俺も頂こうか」

「俺にも頼む」

「私にも頼むよ」

ど、シユイ君にラングさん、お父様までもがおかわり。えつ、早く食べないと私の分無くなっちゃう！？ こんなおいしい料理、食べ逃せません！

シチューは綺麗に食べ尽くされ、パンが少しばかりの残る食事となりました。大満足です。お金を払ってでも食べたい料理でした。

「お皿はパンで拭つて綺麗にしてください。あつ、別に犬や猫のようこべらべる舐められても構いませんよ？」

……余計な一言付け加えるレイわんは、やはりおつわんです。お父様は何やら笑っていました。どうやら、彼の事を気に入つたようです。旅の最中、何をお話されたんでしょう？

## Gランクの天才 3

馬車の乗り心地はあまり良くない。街道の整備が悪いのもあるだらうが、サスペンションがないのが大きいだらう。お尻が痛い。自分の馬車だつたら付けているが、借り物の馬車だ。あまり改造はしたくない。前世の記憶で車輪を改良しても良いが、こういう技術はあまり曝したくない。誰にでも出来る力など、後の脅威でしかないのだから。

しかし、少しというか、なんというか——困る、というか。僕はちらりと斜め後ろを見やり、そしてすぐ前を向き溜息をついた。

そこにいるのは、リース嬢とフリーだ。二人仲良く同じ馬に乗っている、のが問題だ。

明らかに、明らかにリース嬢とフリーの接触率が高すぎる。前に乗るフリーをリース嬢が抱きかかえるようにしているのだが、もはやあれは抱きついているだつた。フリーもなんやかんや言って可愛いい女の子である。対して、リース嬢は美少女だ。

田福を通り越して、田の毒だつた。

「レイ君、少しお話の相手になつてくれないかい？」

と、護衛対象のカイルが僕に話しかけて來た。恐らくと言つか、ほぼ間違ひなく暇だつたのだろう。

「ええ、僕で良ければ」

カイルは三十代後半、僕は見た目三十代である。一応。ため口で

話し手も良いのだろうが、微妙な上下関係を作っている。それが僕としては非常に話しやすい。

「レイ君はGランクだったね。どうしてランクを上げないんだい？」  
「僕が求めているのは他人からの評価ではなく、コレですか」

と、僕は親指と人差し指で円を作つてみせる。世の中金だよ、とは言わないが必要なのだからじょうがない。  
そんな僕をカイルは苦笑し、

「じゃあ、どうしてお金が必要なんだい？」

と尋ねて来た。いやいや、ちょっと踏み込み過ぎじゃないですか？  
まさか、帝国に復讐するためです、などと真っ正直に答える訳にも行けまい。どうするかな……。

「実は、病弱な母が——  
「嘘だね」

僕のお涙頂戴の話は、最初の導入で否定されてしまった。  
さすがは裁判長、嘘は簡単に見抜きますか。

「……恥ずかしい話、豪遊がしたくて  
「それも嘘だね」

「……

いや、あながち間違っちゃいないんだけど。いつも断言するように否定されてしまうと、なんだか僕が本心でそう思っていないような気がする。僕は僕が解らなくなつて来たよ。

「くくく、『めん』めん。ちょっとからかい過ぎたかな」

カイルは笑いを堪えていたようだった。

狼狽する僕がさぞかし面白かったのだらう。いや、基本的に胡散臭い笑顔か、無表情に徹する僕だけど。

「まあ、無理に答えなくて良いよ。訳あり何だろ？」  
「はいそうです。復讐のためなんて、そんなこと言えるわけないじゃないですか」

カイルの笑顔が凍り付いた。逆に、僕は人の悪い胡散臭い笑みを浮かべる。

うん、その裁判長という役職、もはやそれはカイルの天職と言つても過言じやないのではないか。  
僕のこれが嘘とは見えないようだ。

「……君は、随分と捻くれた性格をしているね  
「見た目と中身の不一致を目指します」

その後、しばし僕らは見つめ合つ。火花が飛び散るように視線が混じり合い、そして。

「君は面白いな。では、ちょっと君の昔話でも聞かせてくれ」「いいですよ。聞いたら最後、もう元には戻れませんけどね」

僕らはそんな事を言って、しばし談笑した。

ちなみに、その時話した昔話は、八割弱真実だつたりする。だからといって、どうやって復讐するかとか、魔王や勇者の話はしていないので、口封じをしようとは思っていない。

今の所。少しのことで心変わりするかも知れないけど。

「……そんな話があつたのか。恥ずかしい話、知らなかつたよ」  
「知られたらまずいんですよ。特殊な事情が有つたとはいえ、善良な国民を虐殺したのですからね。ただし、この事が國民にバレたりしたら……、もしかすると、この帝国が滅んだりするかも知れませんよね～」

僕の軽口に、カイルは苦笑すらも浮かべられなくなつていた。

「まあ、ちょっとどばかり気に留める程度で十分な話です、ええ。今  
の所は……」

「…………。面白い話だつたよ、ありがと」

そう言つたカイルの顔は、何か色々と考えているようだつた。

全行程の三分の一程進み、日が傾いて来たので野宿となつた。前  
が草原と街道、後ろが森と攻められても逃げやすい場所だ。近くに  
川もあるようで、かなり好条件な場所だろう。おまけにフリーが結  
界を張つてくれたので、寝ているときの安全性は高そつだ。  
皆が何やら話しているが、丁度良い。僕は僕の仕事を始めよう。

### 魔法と魔術。

この世界には、一通りの異能の力が存在する。

魔術は、マナと言う未知の要素を仮定した時、物理化学の法則が  
成り立つ事象のことを言つ。RPGなどの攻撃魔法だとすると良い。  
魔法は、物理化学の法則に捕われず、独自の法則にのみ縛られる  
事象のことと言つ。これは説明しづらいが、忍者の変化の術とか変  
わり身の術なんかがこれに近い。

フイーは魔術師だ。前世で言う所の、神様とか超能力者だろう。  
僕は魔法使いだ。前世で言う所の、エンジニアとか科学者に近い。

僕は魔法使いだ。前世で言う所の、神様だと超能力者だろう。  
？？いや、『魔王』なんだけど。

僕のマジックは種も仕掛けもない。本当の魔法なのだから。  
けれどそれは異端の能力。あまりおおっぴらに見せられる力ではない。だから、ちょっと小道具を用意する。

鞄だ。魔法具だが、使用法を解つていないとただの空っぽの鞄だ。  
某ネコ型ロボットの道具に、四次元ポケットと言うのがある。  
まあ、簡単に言えばこれはそういう魔法具である。  
ただし、あの道具と違いこれには条件、法則がある。

魔法具らしく、『魔の法則』があるとでも言おうか。

『一つ、鞄に入れた物でなければ、取り寄せる事は出来ない。  
一つ、取り寄せたい物を明確に思い浮かべなければ、取り寄せる事は出来ない。

一つ、取り寄せられるのは、その物の所有者でなければならない。  
一つ、鞄に入れた物は、入れた時点の状態を維持する。  
一つ、生命体を入れる事は出来ない』

以上が、この鞄の法則だ。

これにより、一度入れた物は腐敗する事無く、最高の状態を維持して持ち運ぶ事が可能だ。法則に入れてはいけないが、鞄に入り切らないサイズの物はどうしようもない。解体して入るような大丈夫だが、組み上がって出来たりはしない。

今現在、この鞄の中には一万を超える物を入れている。  
それでは、本日の夕食と洒落込みますか。

まずは火元を作る。こればかりは取り出す事は出来ない。以前に誰かが野宿したのか焚き火の跡があつたので、それを活用させてもらう。

適当に薪を集め、石の円の中心に置く。それと別に、Y字の枝を一本を垂直にして、鍋を掛けられるようにその上に棒をのせ、魔術で小さな火を起こす。指先にライター程の火を灯す魔術は初步的な物で、魔術の才能がある者なら大抵出来る事だ。コレくらいで驚かれたりはしないので、この時ばかりは普通に準備する。

耳を澄ませ、更に辺りを伺う。……よし、誰も僕の存在を気に掛けてはいないな？

では、図らずも『Gランクの天才』と呼ばれる僕の力をお見せしよう。

手始めに、鞄から鍋と皿を取り出す。鍋は厚手のステンレスの物で、皿は軽くて壊れにくいプラスチックに近い材質の物だ。そしてバスケット、続いてパンを取り出して行く。パンは焼きたての物を突っ込んだので、出したそのときからほかほかと湯気を立てている。この鞄の恐ろしい所。

それは、液体を入れても大丈夫だと言つ点。

いやー、作り置きしたシチュードを入れてあるんだよね、あははは。と言う訳で、レトルトのような手軽な感覚で、本格的なシチュードが旅先でも頂けると言う凄いアイテムだ。勿論、これは以前僕が作ったシチュードに変わりはない。

女性陣がシチュードを被ると言つよなサービスシーンなど無く、食事は終了。シチュードは思つた以上に好評で、その分当然のように疑問が来たけれど（いつの間に作ったのか、食材が高価だが大丈夫か等）、『Gランクの天才』という言葉で片付けた。自分で言つておいてなんだが、なんで納得するのか僕には解らない。

シチューは特にフイーに好評で、ぶつぶつと『生クリーム……牛乳』とか、『胸が……』と呟いていたので、たっぷりとよそつてあげた。男っ気があるように見えはしないが、コンプレックスなのだろう。何がとは、僕の口からは言えない。

シュイやカイル、意外な事にラングにも褒められたが、ガイラスは不機嫌な顔をしていた。それはよく分からない。また、食器を回収していると、何故だかリース嬢からジト目で睨まれたが、それも僕はよく分からぬ。

#### 食器回収後、皿洗いをする。

本来なら川まで行つて洗つたりするのだろうが、僕は『Gランクの天才』だ（うわ、何言ってんだか僕）。そんな面倒な事はしない。僕が『Gランクの天才』などと呼ばれる由縁は、その奇抜な発想にある。

シチューの効果か、何故だか僕の作業を見にリースとフイーが来たので、僕は『Gランクの天才』たる由縁を披露することにした。今回使用するのは魔法ではなく魔術だ。魔法はきっと、魔術師であるフイーにはどうあがいても許容出来る物ではないはずだ。前世で言う、火の玉をプラズマと言い張るようなタイプの人間だから。まず自分の前に水のマナを集める。これは感覚的な物で、これが出来るか出来ないかで魔術の才能の有無が決まる。僕は空氣中に存在する水素や酸素を意識し、それが集まつて来るよう念じている。魔術の基本は、各マナを魔力と反応させる事で現象や物質とするものだ。今回のイメージとしては、水のマナが大量の水素と酸素、魔力が熱運動エネルギーと言つた感じだろうか。本当、魔術は化学臭い。

水球。まず、直径一メートルの水球を宙にイメージする。そしてそれを具現化すべく、集まつている水のマナに魔力を放つ。水滴が生まれ、それが次第に大きさを増して行く。水滴が集まつて大きくなっている感じだ。近くに川がある事で、水のマナが集まりやすいからか、十秒くらいで水球が出来上がった。

ここで集中力を切らしては、水球が球形を維持出来なくなり、バケツの水をひっくり返したような、RPGの激しい水流の攻撃魔法となってしまう。けれどもう慣れた物で、僕は水球を維持しつつ、その中に鍋を入れる。まあ、こうやって川まで行かずに洗う訳だ。さて、ここからが『Gランクの天才』たる由縁だ。

今回のように川が近くにあるのならば、集中力や魔力を消費するようなことはせずに、素直に川へ洗いに行けば良いのだ。特に護衛任務など、いつどのような規模の襲撃があるかも解らない状況であれば尚更である。

ただし、それはただ水で洗う時の話だ。

「……えつ」「……すごい」

二人の驚嘆の声は僕の耳に、一人の視線は僕の前の水球に注がれている。

水球が泡立っていた。ボコボコと泡立ち、中の鍋を回転させ綺麗にしている。水球がその形を変えようとするが、さらに魔力を注ぎ球形に維持、そして汚れを分解する。これは、水球を沸騰させてい るのだ。ようするに、お湯での洗浄である。

僕が水の魔術を扱う上での魔力のイメージは、熱運動エネルギーだ。これは、それを水球全体に加えた物だ。

これが僕を天才と呼ぶ由縁。実に単純だ。

というのも、この世界に水を沸騰させるような魔術を使う人間がないからである。そもそも、魔力を熱運動エネルギーなどと考える人がいないだろう。そこまでこの世界の化学は進歩していない。僕に言わせれば、魔術は化学反応を感覚で行なっているような物だ。

もう少し物理や化学が研究されれば、僕の天才などという称号は消えるだろう。

ちなみに、天才の前に付く『Gランクの』とは、僕が戦闘がからつきしからと言つショボイ理由である。

いやね、魔術はさ、使うのに結構時間がかかるんだよ。それに集中力がね？

僕の場合、とてもじゃないが戦闘には使えない。世の魔術師諸君には頭が上がらないよ。彼らはものの数秒で魔術を攻撃として使えるレベルまで具現化するから。

……まあ、僕だって魔法を使えば、戦えなくはないんだけどさ。

その後、川に沐浴に行く女子一人。一人とも襲われたとしても返り討ちに出来る実力者だ。何かあつたら叫ぶようにも言つてある。男達は馬車のところで各自が各自を監視。

カイルの一言、

「私の娘を覗きに行つた者は死刑です」

で、男の口マンを実行に移す者は誰もいなかつた。戦闘力皆無のカイルの一言であったが、背中がゾワゾワ来るものがあつた。

女子が帰つて来た後、男達も交代で川に行つて鴉の行水。護衛の関係上、戦闘力がGランクの僕にはガイラス、カイルにはシュイとラングが付いて行つた。ガイラスとの水浴びなど、語る事などない。リース嬢の濡れた髪は、月夜に照らされ綺麗に輝いていた。姫だと女神だと呼ばれるのも頷ける。その前に付く物騒な『戦』の文字は知らない。戦闘は見てないから。

夜中、僕は自分の仕事の一環と割り振つた不寝番をしていた。  
というのも、僕はこのメンバーを信頼していないからだ。

護衛対象のカイルとリースを除くギルドメンバーは、裏切りが発生した場合脅威となる対象ばかりだ。シュイは言わざと知れた優秀な剣士、フィーはその性格から忌避されがちだが優秀な魔術師、ガイラスは武器だけ見れば英雄クラス、ラングはなんか威厳がある。さすがの僕でも、そんな奴らに寝込みを襲われて無事な自信はない。

魔力の回復には睡眠が一番だが、僕は一度寝てしまうと朝まで寝こけてしまう。余程の事が起これば起きるが、隣で誰かが動いているとかでは気付けない。

と言う訳で睡眠を取らずとも何日でも動ける僕は、不寝番を買って出た。Gランクという隠れ蓑を使っているため、何か遭つたらすぐ起こしてねと、リース嬢にありがたいお言葉を頂けた。

だが、まだ解ってないようだな。『Gランクの天才』を。

今、僕の他に起きている人は誰もない。皆ぐつすり、今日の疲れを癒すために睡眠中だ。馬車の中で寝ている女子一人も覗いてみたが、ぐつすりと寝ていた。この様子、朝日が昇るまで起きないんじゃないかな？

あれだよね、美味しいご飯をお腹いっぱい食べると眠くなるもんね。ぐつすり寝ちゃつても仕方ない、うん、人間としての摂理だ。

いや、僕が睡眠薬を投与したからだけど。

だが、これに深い意味はない。寝込みを襲おうとか、荷物を漁ろうとか、そんなやましい事は考えていない。ただ皆にぐつすりと寝て英気を養つてほしいだけだ。

まあ、女の子の寝顔は眼福だけね。

それと、万が一裏切り者がいたとき、その行動を阻止する意味もある。依頼を遂行出来ず困ると良いさ！ 裏切り者はいないにこした事はないけど。

朝日で私は目覚め……え？ 朝！？

「うー？」

慌てて馬車から降りると、焚き火の側で膝を抱えているレイさんが見えました。その横には、既に朝食があります。

「おはようございます、リース嬢」

寝起きに見るレイさんは、何故だか胡散臭くありませんでした。あつ、田に隈ができる。……もしかして私、ずっと寝てましたの？

「すみません。……もしかして私、ずっと寝てました？」

「はい、皆さんぐっすりとお休みでしたよ？」

そう言われて辺りを見回すと、未だに皆寝ています。普段あまり寝付けないお父様までも、幸せそうに寝ていました。……あれ？ そう言えば私も、最近は寝付きが悪かったのに……。

「朝食の前に川で顔を洗われてはいかがですか？ ……あ、護衛が必要ですか？」

「いえ。フリーが起きてから行きます」

と、私の何がオカシイのか、レイさんは笑いました。  
あれ？ 私寝癖付いてる？ それは恥ずかしい。

「フリーさん、きっと起こさなければ起きませんよ？ 昨日も寝坊

して来たようですから。魔術師の方は睡眠時間が不規則なんですよ

「……そうだったんですか」

そう言えば、フイーは集合時刻ギリギリに来たような——って、毎過ぎのあの時間まで？

フイーを起こして（どうやら自分で起きるのが苦手なだけの様で、寝起きは意外とすつきりしてました）、川で顔を洗つて戻ると、他の階も起きていました。

「悪いな、ずっと不寝番していたんだろ？」

「いえいえ、それが僕の仕事ですから」

「……何か異変はなかつたか？」

「大丈夫です。フイーさんの結界が優秀だつたおかげか、特にすることもありませんでしたよ」

「つーか、おっさんの日の隈がやべーよ。ちょっと寝てろう」

「ううだね。居眠り運転をされても困るし、少し休んだらどうだい

？」

「……では、出発まで寝かせていただきますね」

皆に心配され（ガイラスさんが何故か気持ち悪かった）、レイさんは御者台で寝に行きました。朝食も準備されているので、一時間くらいは寝られるのではないかというふうか。

朝食は紙に包まれたサンドウイッチで、パンはふんわり、具の野菜はシャキシャキ、微妙な酸味のある調味料が癖になる、やはり美味しいものでした。

食事後、適度に運動をして、出発の準備にかかります。何故だか、皆の動きにキレがありますが、本当にぐつすりと寝てしまつたようです。レイさんに申し訳ありません。

そのレイさん、わずか一時間の睡眠だと言つのに日の隈は取れ、

至つて普通に御者をやっています。なんというか、本当に凄い人なんだと思いました。

今、フィーが御者台と一緒に乗っていて、昨日の魔術について何やら話しています。時折、意見の食い違いなんか言い争うような声が聞こえるのは、気のせいでしょうか。これが『偏屈魔術師』と呼ばれている原因？

面倒な事になつた。

僕はすっかり忘れていたのだ。フィーが『偏屈魔術師』だと語り事を。

「だから！ 昨日の魔術の説明！」

「企業秘密です」

「いいじゃない、減るものじゃないし！」

おいおい、なんだこの五月蠅い子は。昨日まで借りて来たネコのようになっていたと言つのに、今日の喚き方と来たら、まるで大熊貓に騒ぐ人のようじやないか。いや、昨日までが猫を被つていたのであって、これが彼女の普通か。

フィーはどうやら、水を沸騰させる魔術に興味があるようだ。それもそうだろう。一般的に水を扱う魔術は、ただの水を生み出す魔術だからだ。

もし水を熱湯に変える事が出来れば、熱湯から水蒸気、さらには逆に氷にまで派生する。基本的に水の状態変化は、熱運動エネルギーと粒子間引力の大小関係だ。水蒸気が可能なら、氷も出来ると言つていい。そうなると、蒸気機関から保冷技術まで発展する。

僕が善良な一般市民だつたら出し惜しみせずに教えるのだが、生憎僕は復讐を考える人間だ。おいそれと技術発展をさせたくない。昨日の敵は今日の友、昨日の友は今日の敵。

なんと言おうと、教えません。いいじゃなく、別に炎を生み出して水を温めれば、結果は同じなんだからさ。

「けち」

「自分で頑張りなさい」

「なんであたしがもう確立した魔術を研究しなきゃいけないのよ。あたしは最先端の魔術を考えるの。一度確立した魔術を詳しく見て調べてられないわ！」

なるほど。まさにエンジニアだな。

ソフト開発環境があつて、それで色々作るのが君と言つ事か。

「年長者の助言をさせていただくと、基本が解つていなければ碌な魔術は出来ませんよ？」

「はあ？ 基本なんてマスターしてるわよ。理論さえ聞けば大体の事は理解出来るもの。……昨日のあの水球、あたし達とまるで考え方が違うみたい。熱湯にするのに、火のマナを使ってないもの。何か特殊な魔力の扱い方をしてる？」

うわやべえ、俗にいう天才だこの子！ 僕のような前世の記憶を流用して紛い物の天才じゃなくて、本物の天才だよ。熱運動エネルギーとか教えてたら爆発的に魔術が発展しそう。

教えないでおこう。この様子なら、遅かれ早かれ自分で気付きそうだ。あえて間違った方向に進める手もあるが、知識の浅い僕にはそんな事出来そうもないし。

それに、僕は魔法使いだから。魔術は専門じやないんだ。

ちなみに、魔法はおいそれと使えないでの、魔術としての切り札

も持つている。

マナという要素を突き詰めると、とんでもない代物である事がヒントだ。いやはや、空恐ろしいものを扱うよ、魔術師は。そんな事を考えている僕をフイーはジト目で見つめてくる。そして、しばし俯いて何か考え、

「……どうしても、ダメ？」

大きな瞳を微かな涙で潤わせ、小首を傾げて聞いて来た。  
可愛らしく上目遣いで言つても、駄目な物はダメです！  
じ、内心では反論出来ている僕だったが、口からは何も出なかつた。

「あつああつ」

訂正。よく分からぬ何かが出ていた。

「？？？敵襲つ！」

シュイが突如そう叫んだ。 フィーの女の武器で陥落氣味だつたため、 僕はある種助かつた。 一気に全員の気が張る。 場所はアイカシア国の国境まで数十キロという地点。 どうやら、 他国の仕業に見せかけたいようである。

「……背後に数十の気配ですね」

リース嬢がそう呟いた。 気を扱う鬪氣術は、 この世界ではぞらである。 その代わり、 魔力を扱う魔術師はかなり少ない。

シュイ達も異論はないようで、 その数からして魔物ではないだろうか。 しかし、 結構な群れだな。 別に血の匂いを放つてている訳でもないのに、 随分と数が多い。

人為的なものだな、 確実に。

「その程度の数なら、 あたしが魔術でだいたいやれる

フィーが御者台から後ろを振り返り、 その数を確認しそう断言した。

僕？ 無理無理。 僕がGランクに甘んじるのは、 戦闘が嫌いだからよ。

今の僕では高威力高範囲の魔術は使えない。 魔法を使えば可能だが、 魔法なんて異端扱いなので論外だ。

さあ皆、 頑張ってくれ。 僕は影でこそこそ皆の事を応援しているよ。 頑張れ頑張れ、 どんどんぱふぱふ。

……陥落氣味の理性、 気の迷いだと思つてくれ。 普段の僕、 胡散

臭いおっさんと呼ばれる僕でも、こんな事態にこんなことはしない。  
……「斐ー、やり過ぎだよ。上目遣いはなんとか耐えられたけど、耳を噛むのは——何でもない。何にもなかつた。

「魔物との距離が五十メートルを切つたら馬車を止めてくれ。斐ー、それまで魔術の準備を頼む。他の皆も、戦闘の準備をしていてくれ。魔術で倒せなかつた魔物を殲滅する」

シュイがそう言って、大剣に手をかける。他の人々もそれぞれ己の武器に手をかけ、戦闘のシュミレーションでもするかのようだつた。僕はやる事がないのでその間に、僕はカイルに馬車を急停車させらる皿を伝えておいた。あれ、意外と重要じゃないか？

「気をつけて。怪我するなよ？」

と、カイルからありがたいお言葉を頂いた。  
ありがとうございます、僕も流れ弾に当たらないよう、馬車の上で高みの見物兼応援をします。

「斐ー、魔術の準備はいいか？」

「大丈夫。いつでもいいわ」

「じゃあ、十秒後。……さん、に、いち——止まれ！」

シュイの号令で僕は馬を止め、直後、斐ーが馬車を降りた。そして流れる動作で杖を掲げる。

「求めるは人類の偉業。摂理に逆らいし物を滅せよー。」

詠唱だ。

自分のイメージを補助する役割があり、より強力な魔術が可能に

なる。恥ずかしいとか言つちゃ 駄目です。

詠唱内容は、『人類の偉業』が火を表し、『撲理』は弱肉強食、『滅せよ』は爆発的威力の現象。仰々しい言葉を並べるのは、それにより威力を高めるのと、どんな魔術かを解析されないためだ。僕はなんとなくで解つちゃうけど。

魔物達の手前の地面に、巨大な朱色の魔術陣が浮かび上がった。人間だつたら、ここでどんな魔術が来るのかなんとなく解るが、魔物は訳も解らず突っ込んで行く。

そして、轟音と共に火柱が上がった。

地面から突き出るよう現れたそれは、凄まじい火柱だった。何十メートルと距離があるにも関わらず、その熱気に思わず顔を背ける程の、猛烈に強力な火柱。

火柱が消えた後には、いくつもの消し隅が残っていた。

だが、それで終わりはしなかつた。

魔物はどうやら一列になつていたようで、火柱が消えた後から何匹かの魔物が襲つて來た。

猪とサイを足して二で割つたような魔物だ。鼻の当たりに鋭い角があり、突かれた一溜まりもない。

それをシュイ、ラング、リース嬢が迎え撃つ。フリーとガイラスは馬車の横で待機である。ガイラスはやや悔しそうな顔をしていた。戦闘狂か？

シュイは大剣で魔物を一刀両断する。大きな剣の重さと、それを感じさせない速度で魔物の硬い皮膚を切り裂く。身体能力を高める何かを持つていそうだ。

ラングは盾を構え、魔物にタックルをぶちかましていた。豪快だ。そして力負けするどころか魔物を吹き飛ばし、体勢が崩れた魔物の頭部を盾の側面で叩き割つている。

圧巻だったのはリース嬢だ。

彼女の手に握られているのは、細身で純白の剣、『聖剣レイリー・ス』。僕に言わせれば魔剣だが、聖剣である。

魔剣とは、基本的に魔石を使った剣の事をさす。基本的に。あくまで基本的に。魔王の僕には、基本は関係ない。

聖剣レイリー・ス。その効果は、持ち手の身体能力の底上げ、そして――。

「はあつー！」

シュイと同等の速度で魔物を切り裂く彼女の剣は、魔物を綺麗に切り裂いた。

熱と光だ。高密度の光を纏つた聖剣は、熱量を持った斬撃を生み出す。綺麗な紙の摩擦熱で手が切れるように、けれど元が剣であるためどんな切れ味となっている。

魔力は、エネルギーと考えていい。それを大量に蓄積する魔石で作られた剣、それが魔剣。魔術と魔法の境界線だらうと僕は考えているが、やはり魔術よりだらう。

魔物を切り裂いた彼女の長い金髪が、その剣の放つ光で輝く。微量に彼女の聖剣が魔力の残滓を散らし、彼女が神々しい粒子を放つているように見えた。

……確かに、彼女の戦う姿は戦女神と呼んでもいいかもしないな。

柄にも無く、そんな事を思ってしまった。  
と、不意にそんな僕の不抜けた思考を覚醒させるような、鋭い気配を感じた。

「まづいつー！」

丁寧語を使うといつキャラ設定を忘れ切って、僕はフリーのいる

方へ御者台から飛び降りる。

第六感に近い何かが、まずいと告げている。

ズダン！ と、僕がフィーを突き飛ばすのと同時に、耳を打ち鳴らす炸裂音が響いた。

「きやつ！ ！」

鮮血。

フィーのローブが切れ、足から血が流れた。くそ、間に合わなかつたか。

だが、辺りを見渡しても魔物は見当たらない。丁度リース嬢達が殲滅した所だつた。

炸裂音と気配……銃か！ ？

未だにその技術は存在していないと思つたが、僕の知らない所で既に開発されていたのか。

「どうした！ ？ 森からか！ 」

怪我をしたフィーを見て、ガイラスが颯爽と森に飛び込んだ。

「やめろ！ 深追いするな！ 」

シュイが叫ぶが、ガイラスは話を聞かずに森の奥へと走つて行く。恐らく、自分一人魔物と戦えなかつたからだろう。戦闘馬鹿だと言う事だ。

「くそ、一人で行かせるか！ ラング、追うぞ！ 」

シュイがラングに呼びかけ、一人はガイラスが消えた方に走つて行く。

おいおい、護衛対象をほつたらかしてビビ行くんだよ。

「うう……」

と、フイーの呻き声でそれどころじゃないのを思い出した。見た所、銃弾は足を擦つただけのようだ。が、その銃弾に毒でも塗つてあつたのか、傷口がみるみる紫色へと変色している。

「フイー、大丈夫ですか！」

リース嬢が駆け寄つてくる。「うん、今は一力所に固まつてている方が良い。

「ううう……」

「レイさん、フイーは大丈夫でしょうか。というか、先ほどの炸裂音がこの傷を？」

呻くフイーを心配そうにリース嬢が抱きかかえた。絵になるな……じゃないか。

やはり銃は表向きには存在していないようだ。

「どうでしようか？　ただ、毒の効果がある攻撃だったみたいですね。即効性の毒、早く解毒しなければまずいかもしれません」

銃はあまり知られていないので言葉を濁し、僕はフイーの傷口に手を添えた。

あまり見せたくないが、そもそも言つてられまい。

魔力を傷口に注ぎ込む。魔力は血液を流れて行き、毒となる物質を発見後、それを相殺するイメージだ。

「うぐっ……あつ……」

「フイーー。」

と、フイーが痛みかなにかで失神した。この魔術も知られるとまづいので、こればかりは好都合。

集中力と魔力を絶やさずに数分して、やっと傷口の色が良くなつた。さらに傷口の細胞活性を促すイメージで、魔力を注ぐ。傷口はものの数十秒で塞がり、ひとまず安心だらう。

「これで大丈夫なはずです。傷は塞ぎましたし、毒も解毒しました。後遺症も残らないでしちゃう

「凄い……。これも魔術ですか？」

どうやらリース嬢は魔術の素養がないようだ。魔術の素養がある人なら、俺が魔力を使ったのを感じ取れるはずだからな。それなら、魔法を使っても良かつたかな？　いや、それはフイーにバレるかもしれないから、これでいいか。

「はい。あまり得意ではありませんが、神聖術といつ特殊な魔術です」「えっ！？　レイさん、ニルベリア皇国の巫女様に会つた事あるんですか？」

あ、やばい。そう言えば、神聖術はニルベリアの巫女様の術だつた。それをアレンジしたけどベースは変わらないか神聖術とか言つちゃつたけど、これはまずい。

「……え、ええ。伊達に『Gランクの天才』などと呼ばれてはおりませんよ。こういう仕事ですから、色々な方と出会つんですよ。これはその時少し齧りまして」

「はあ、レイさんは凄い人なんですね」

困ったときは『Gランクの天才』。つむ……、毛嫌いしていたが、意外と便利だな。

十数分後、カイルに事件の顛末を伝えていると、シュイが戻ってきた。

「……ガイラスは見つからなかつた」

シュイが重い口を開けた。

あの後、二人で手分けしてガイラスを探したそうだが、ガイラスの姿は見つからなかつたそうだ。

「この魔物の襲撃……、人為的なものですね。そしてフリーを狙つた攻撃。レイさんが庇ってくれなければ、フリーは死んでいたかもしれません。確実に、私達は狙われているみたいです」

重い沈黙が辺りを満たしていた。

魔物を操り、遠距離からの謎の攻撃を放つ襲撃者。それが僕以外のメンバーの考え方のようだ。

堪え難い空気なので、僕は案を出す。

「フリーの容態は今は安定していますが、なるべく安静にしている方がいいでしょう。一日待てば容態は回復するので、僕はここで野宿することを提案します」

「動くなと言うのか？……だが、いつ襲撃を受けるかわからないぞ？」

僕の提案に、シュイが反応した。  
と、それにラングさんも意見を出す。

「だが、移動してもそれには変わりはあるまい。襲われるときは襲われる。……それと移動した場合、ガイラスと合流出来ん」

「……得体の知れない魔術師を追つて行つたんだ。無事とは限らない。命令違反だし、見捨てるべきだ」

暗に、ガイラスはもう諦めようと言つシュイ。僕としても、別にガイラスなんてどうでもいいんだけどな。

「……まあ、僕らがなんと言おつと、最終的な決断は依頼主ですか  
らね。どうしますか？」

僕に話を振られて、カイルは少々驚いたような顔をしてみせたが、  
真剣な顔で答えた。

「私はこれ以上、護衛を死なせたくない。フリーさん、ガイラス  
君。二人の護衛の安全を考えて、ここで休んで行こう。……フリー  
さんの体調が戻り次第出発でどうかな。その時までにガイラス君が  
戻らなければ、残念だが彼は諦めよう……」

カイルは出来た人間だった。

依頼主にそう言われてはどうしようないので、シュイは若干渋  
々ながら頷いていた。野宿案を出した僕だったが、実のところ、気  
持ちで言えばシュイと同じであった。何かきな臭い、と。

「……では、僕がガイラスを探してきましょ」

「レイさんー？」

リース嬢が驚いた顔をしたが、このメンツを考えると、一番要らないのは僕だ。例え僕が欠けた所で、リース嬢が御者をやれば大丈夫だろう。

「僕は護衛の役に立ちませんから、役に立つガイラスを探してきます。シュイとラング、リースさんがいれば大丈夫でしょう」

「……あたしもいる」

と、フィーが目を開け、身体を起こした。が、声が弱々しく、半ば意地で起き上がったようだ。

「では、探してきます」

「……気をつけろよ？ 相手は得体の知れない魔術師だからな？」

シュイが心配そうに声をかけてくれたが、大きなお世話だ。むしろそっちが気をつけるよ？

銃を知らないシュウ達にすれば、先ほどの攻撃は得体の知れない魔術となるようだ。気配の読めるこのメンバーなら多分大丈夫だろう。

僕はガイラスの消えた森に足を踏み入れた。

……何故先ほどの狙撃手はカイルやリース嬢を狙わなかった？

馬車の中にいたカイルはともかく、リース嬢は狙えたはずだ。

??いや、あのメンバーで銃撃を避けられないのはフリーくらいか。研究所に引き籠つて、戦闘の経験が浅いフリーを除いて皆、気を読める。僕だって出来るんだから、彼らなら完璧に避けるにしろ防ぐだらう。

狙撃手は何を思つてフリーを攻撃した？

魔術師が邪魔だった？ だが、わざわざ存在を知らせてまでやる事か？ やはり、本当は別の意味が？？。  
あつたのか。

「????！」

そして誰もいなくなつた、というお話がある。

一人が消えて、二人が消えて……最終的には誰もいなくなるのだ。その手のタイプの話には、必ずと言つていいく程、消えた人物に裏切り者がいる。

死ぬ事によつて、自分の存在を容疑者でなくそつとする。

僕は、これもそんな感じだと思つていた。

僕がガイラスを見つけて、適当にぶん殴つて縛り付けて、裁判してもらえば良いと考えていた。  
だが、そうじゃなかつた。

「……ガイラス」

ガイラスが死んでいた。

頭を鈍器で殴られたようで、頭が陥没し血を流して、ガイラスは

死んでいた。辺りに争った形跡も無く、背後からの一撃だった事が伺える。最後まで槍を離さなかつたが、ランクBの男の死体としては、どこかむなしいものがあった。せめてもの救いは、即死であつた事だろう。

ガイラスを殺した犯人の凶器は、重量のある鈍器。一撃で死んでいなければ、何度も何度も殴られる。そして地獄を彷徨つた事だろう。

「…………」

と、僕の足が何かを踏んだ。  
それは？？線。

「????ツ！！」

一瞬のうちに茂みに飛び込んだ。  
次の瞬間、ガイラスの身体が爆発した。  
木つ端みじんに吹き飛んだ。

軽薄な男だつた。よく僕に噛み付いてくる、あまり好きじゃないタイプの男だつた。むしろ嫌いだつたよ。

だが、こんな死に方はないだろ。

戦士としての誇りなど微塵も無く、無惨に散つた命。

？？ああくそ、何を感傷に浸つてているんだか。任務はまだ終わつてないんだ。

ガイラスをその場に残し、僕はカイル達の元へと駆け出した。

ガイラスが、殺害された。なら、もう答えは出ている。

さらばガイラス、お前の敵は取れないかもしけないが、お前が化けて出ないような結末は用意してやる。  
それと。

「裏切り者には報復しなくちゃな」

僕は憎悪と狂氣で口元を歪ませた。

僕はさ、裏切りが大嫌いなんだよ。前世の死因もそんな感じだし、この世の表向きの死因もそうだ。  
だから復讐？？しなくちゃ。

奴が何を思つて裏切ったのか僕は知らない。いや、最初から仲間ではなかつたのか。最初から、カイルとリースを殺す事を考えて行動していただけだろう。

最初の晩こそが、奴の動ける最高の日だつた。焚き木拾いや不寝番、そこで誰かを殺害する予定だつたのだろう。ここでガイラスを殺したように。そつだつたら僕だろう。自分で言うのもなんだが胡散臭いからな。……もしくは、全員か。

だが、僕が睡眠剤を投与した所為で、実行出来なくなつた。そして強攻策として、魔物とあの狙撃手。

協力者がいるのは、出来れば知らせたくはなかつただろう。

この世界の銃は、不意打ちにはぴつたりだが、それだけで戦うには無理がある。

気、と呼ばれる物が感知されるのだ。銃での攻撃は、殺氣を伴うため察知されやすい。

切り札、に近い物がある。

どうやら、奴も相当焦つているようだ。

急がなければ。さつきの爆発で、あちらも動きがあつたはずだ。

裏切り者？？、ラングに報復を。

「ラングッ！ 何故だつ！？」

走つて戻ると、シュイがカイルを庇つよう、ラングの前に立ちふさがつていた。爆発に気を取られて、不意をつかれたのか、他の二人は倒れふし、リース嬢が一人を守るように立つていた。

シュイの大剣、ラングの盾。

どちらも異様に巨大な武器だ。その戦いも、壮絶なものだ。

シュイは自分よりも大きな剣だと言うのに、軽々と振り回し、巧みな剣術を繰り出す。伊達にランクAではない。だが、彼も何らかの攻撃を受けたのか、どことなく動きにキレがない。

対してラングは、その大きな盾で自分の視界を狭めていると言うのに、シュイの攻撃を全て防ぎ切る。その戦い方は経験則や長年の勘と言つた所だろう。……ガイラスもまさかラングが裏切るとは思わなかつただろう。僕だつて、あまり信じられない。

剣と盾がぶつかり合つ中、シュイとラングもぶつかり合つていた。

「何故？ 頼まれたからに決まつてゐるだろつ」

「ギルドの掟に反するんだぞつ！？」

「ギルドなど、金を稼ぐために属してゐるのに過ぎんよ」

剣と盾がせめぎ合い、体格的に劣るシュイが吹つ飛ばされる。が、シュイは宙で回転し、難なく着地した。

ラングの言い分は、僕に近い所があるようだ。

「簡単な任務だつたぞ。他国の話が聞きたいと護衛達を酒場に呼んで、酒で酔わせた後首を切るだけだつたからな！」

それを聞き、リース嬢の顔が青ざめる。そして、リース嬢は怒りに顔を赤く染めた。

ここまで目立つて気に病んでいる様子はなかつたが、やはり悲しんでいたのだろう。それを馬鹿にしたように話すラングに、少なからず怒りを抱いているようだ。

それを知つていたから、僕らはあえて何も触れなかつたのだが。

「金に踊らされたか！ ラングッ！！」

「この世は金と知恵だ！ 若造が！」

ああ、これはまずい？？、僕がそう思つた時には、もう遅かつた。シュイとラングが真つ向からぶつかり合う。二人の攻防はほぼ互角だつた。だがそれは、シュイの速度重視の剣とラングの筋力重視の盾が釣り合つていたからに等しい。真つ向からぶつかり合えば？？、

「かはっ！」

シュイが力負けして先ほどより強く吹つ飛ばされた。さらに剣を落としてしまつている。致命的だ。

だが、ラングはそれに追い討ちをかけない。

それもそのはずだ。ラングの任務は、カイル達の殺害なのだろうから。

ラングはシュイを吹つ飛ばした勢いを持つて、カイルに襲いかかる。鈍器、盾で殴り殺すつもりか。

リース嬢が聖剣レイリースを構えるが、あれは重量系と対するには不向きだ。例え盾を切り裂けたとしても、その勢いを殺す事は出来ない。それにラングの盾は分厚く、盾が切れてもラング自身には到達しないだろう。そうなると、リース嬢も押し倒される。まづい。

だが？？ここしかない！

僕は右手に持っていたそれに魔力を籠め、ラングに投擲する。

「つ！」

死角からの投擲だと言うのに、ラングは反応してみせた。タックルの勢いを止めず、振り返りながらそれを盾の中心で弾くように構えた。

……さすがラングだ。これなら、弾いてすぐにでもリース嬢を押し倒し、カイルを殺せる。見事だよ。けど、終わりだ。

「ツ！？」

ラングの声にならない叫びが聞こえた気がした。ガイラス、お前の武勇は語り継いでやるよ。

ラングの盾が、木つ端みじんに砕け散った。

『螺旋槍』。回転と振動により分子レベルにダメージを与える魔法具。

そして、ガイラスの形見。

それがラングの盾を木つ端みじんに砕いてみせた。これで、お前の気も晴れたか？

「？？うぐつ！」

螺旋槍は盾を碎くに留まらず、ラングの腕をも削る。

その痛みに、ラングの動きが崩れる。だが、一瞬で体勢を立て直しカイルに肉弾戦を挑む。巨漢のラングとひょろいカイルでは話にならない。一瞬で首の骨を折られて、カイルは死んでしまう。

「ぐつー！」

だが、その一瞬で十分だつた。  
不意に、ラングの動きが止まつた。その首には、一本の剣が突きつけられている。

「一步でも動けば、首を落とします。……だから、手を引いてください」

そう、『戦姫』リース・フュリアスには、その一瞬で十分だつたラング、護衛の殺害犯に突きつけた刃は、微かに震えているようだつた。怒りで殺しそうなを我慢しているように見えた。

最後の言葉は、彼女が優しい事の証明。いや、裁判長の娘だ。罪には罰、人を裁けるのは法だと考えているのかもしれない。

だが、これにて一件落着とはいかななかつた。それでも全ては終わらない。

ズダーン！ と炸裂音が響き、鈴を鳴らしたような音が響いた。

「なつー！？」

聖剣レイリースが弾かれた音が鈴のように響いた。また狙撃手か

！ 今度は武器を狙つたからか、殺気が無く反応出来なかつた。

その一瞬の隙をつき、ラングは僕の向いの森に飛び込んで行く。かなり速い。

だが、逃がすかよ。

「レイさんーー？」

僕は茂みから飛び出し、ラングを追う。リース嬢に驚かれたが、そんなもの知らない。奴は僕の手で、どうにかしてやりたかった。

森を疾走するが、ラングとの距離は離されるばかり。  
ちつ、この身体じゃ、追いつけないか。

なら……、いつそ追い越してしまおう。

身体の構造、筋肉の一つ一つの動きを変え、バネのある動きで一気に加速。弾丸の如くラングを追い越し、僕はその進路上に躍り出した。

僕の姿を見てラングが驚いた顔をしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

渋い男だと思っていたが、何、随分と悪党臭い顔をしてくれる。

「……驚いた。追つて来たのは貴様一人か。だが、追つて来てどうするつもりだ？ 僕をカイル達に引き渡すのか？ Gランク風情が調子に乗るなよ？」

「調子に乗つてるのはアンタの方だよ、ラング」

「ツー？」

不意に、ラングが驚いたような顔をした。

ああそつか、おっさんの体じゃアンタに追いつけなかつたから、ちょっと内部を変えたんだつた。それに伴い声も変わつたし、キャラ設定など忘却の果てか。今更この姿にこだわる必要はない、か。僕は魔法を解き、ラングと対峙した。

「？？？なつー？」

「アンタは色々と勘違いしてる。Gランク風情？　あなたはそのGランクにやられたのをもう忘れたのか？」

決定打になつたのはリースだが、そのお膳立ては僕がやつたんだぞ？

アンタの『自慢の盾を破壊したのは、他でも無い僕なんだぜ？　だいたい、さっきまでの僕と今の僕はまるで別人なんだ。？？つて、隠れてたから解らないか。

「調子にの？？』ぼつ！？」

ラングを水球の中に閉じ込めた。

おお早い早い。やつぱりこの身体だと魔術も高速で使えるな。

今僕は黒髪に黒い瞳だ。僕の本来の姿。おっさんの姿はいわば仮の姿と言える。あの胡散臭さは、実在のおっさんを忠実に再現したのだけど。

水球の中は踏ん張る事も出来ず、外から助け出されなければ脱出する事は不可能に近い。水球に捕われた驚きで息を吐いちゃつたら、けつこう呼吸も苦しいんじゃないかな？　口に水も入っちゃつたし。

「さてと。一つだけ言わせてもらつと、別にアンタは間違つちやいないよ」

戦争で人を殺せる理由は、命令されたから。  
殺す理由ではなく、殺せる理由だ。

命令されたから殺しました、それは何も間違つちやいない。

人間は全ての罪を受け止められる程強くはないし、世の中金だし

うん、別にアンタは間違つちやいない。

だけどさ。

「間違っちゃいない。だけどな、僕はそれが嫌いなんだよー！」

家族や友人、村を焼き払つた帝国が憎い。復讐したい。  
それを命令した奴か？ それもそうだ。

だが、それを実行した奴の方が僕は許せない。  
他人に命令されたからやりました？ でも死ねと命令されたら死  
ないんだろう？ 自分のためにしか生きれないんだろう？

僕はさ、そういう醜い人間が大嫌いなんだよ。

間違つていてることに、間違つていると言える人間を僕は知つてい  
る。それ故に、それが出来ない奴が僕は嫌いなのだ。  
ああ、僕が間違つているのさ。

人間を根本は素晴らしい生き物だと思つていて、僕が間違つてい  
るのさ。

人間は間違いなく醜い生き物だろう。自分のことでなければ、簡  
単に責任転嫁する醜い生き物さ。

それに納得出来ない僕が間違つてるんだろ。

いいぜ、僕が間違つているのを認めよつ、受け止めよう。

「だから?? な？」

水が沸騰し、水球改め熱湯球の中でラングが暴れる。

だんだんと赤くなつて行くラングの体を、僕は冷ややかな目で見  
つめていた。

僕は逃げもしない。その罪から逃れようとしない。復讐は受け  
入れよう。

だが、死のうとは思わないな。  
それに??。

「……うえ、気持ち悪い」

「？？げほつ！」

相手を殺そうとも思わないけど。

僕は熱湯球を解いた。不意に地面に落とされたラングが呻いているが、そんなもの知ったこっちゃない。でももう十分かな、やつてるこっちが気持ち悪くなつて来た。僕の復讐とラングは特に関係ないし、所詮これは復讐の予行練習だから。

本当言つと、別に見逃しても良かつた。ただ、命令されたを理由にする奴が僕は嫌いなだけだ。これは父さんと母さん、それに彼の影響だろう。

家の規律を破り、幽閉された母さん。法を犯し、母さんを助け出した父さん。

そして、命令に背き、魔王を助けた勇者。

「……甘いよな、僕」

間違つていると思える事に間違つていると言える、そして行動が出来た彼ら。僕はそんな人達の中で育つたから、それが当たり前だと思っているけれど、実際はそんな綺麗な話はないんだよ。

僕は人間が大好きで、それ故嫌いな奴は大嫌いなんだ。そして嫌いな奴が大半なのだ。

でも、僕が嫌いでも、誰かは好きでいてくれるんじゃないかな。好きな人を失えば、それは凄く悲しい。

だから、僕は殺さない。

復讐はするさ。

死にたくない奴には殺してくれと泣き叫ぶような地獄を。

まあ、死ななきや治らないような腐った奴はちゃんと殺す。その変はちゃんと弁えているつもりだ。

人を裁けるのは人で非ず、法に在りなどというが、そんなもの知

らない。復讐は残された者の正当な権利だろ。

と。

ずどん、と銃声が響き。

「あつ……」

ぱーん、ヒラングの頭が爆ぜた。

ベチャベチャと、熱い血液が僕に降り注ぐ。ネバネバとした液体が、僕を汚す。何も言わない目玉がころころ転がり、そして僕を見上げた。

お前の意志なんか関係ないんだ、死ぬべき奴は死ぬとでも言いたげな目玉。

口封じされた。

「……くそつ」

口でだけ残念そうに僕はした。心の中は、酷く冷めていた。

あつそう死んだの、と。

ああ、僕は本当に狂っているな、いい感じに魔王になりきれりゃな。

人の命がどうだ講釈として、全然悲しくないもの。

「……口封じされました。ガイラスも、死んでいました」

血まみれで戻った僕は、開口一番そう告げた。

リース嬢とシュイが剣を突きつけてのお出迎え、なかなか怖い物があつた。

「……そつか。とりあえず、拭きなさい」

カイルがそう言って僕にタオルくれるが、気持ちだけもらって、魔術で水球を作り、頭から被つた。

頭、冷やそう、僕。

水球を大量に作って、どんどん上から降らす。目に水が入るから周りは見ないけど、きつとどん引いてる。別に良いさ、どうせこれつきりだ。

よし、頭が冷えた。……寒くなつて来た。

最後に、温水を降らせて？？これで血は落ちただろう。

「はい……」

「すみません」

タオルが差し出され、僕は今度は受け取る。  
タオルが差し出され、僕は今度は受け取る。

リース嬢だった。

目が赤くなつており、泣いたのだと理解した。どうやら、ガイラスが死んだのはラングが裏切つた時に知つたらしい。

旅の最中は気丈に振る舞つていたが、本当に優しい人だったのか。人の死に泣けるなんて、なんていい人なんだ。

決意が固まつた。

及ばずながら、僕はあなたの役に立ちましょう。

今夜、全てを終わらせます。

深夜、私は起きました。

場所は変わらず、今回は結界も張つていません。

ですが周りの皆はぐつすりと寝ています。薬でも盛られたように。

昨日のようにぐつすりと、一人の人数を減らして。

私達が狙われた理由は、簡単です。

お父様を妬ましく、邪魔に思つた者。私を妬み、欲した者。

その二つの思惑が重なり合い、今回の事件が起こりました。

裁判長であるお父様に賄賂が贈られて来た事があります。思えば、それが事件の始まりでしょう。お父様は当然のようにそれを受け取らず、それを贈つて来た貴族に忠言されました。けれど、それが瘤に障つたようです。

平民の分際で、お前は言う事を素直に聞いてれば良いのだ！ と。アイカシア国は優秀な人材なら平民も貴族も関係なく登用しますが、それはまだ始めて間もないです。丁度軋轢が生まれる時期でしょうか。

私はアイカシア国の兵士です。お父様が法で人を守るなら、私は力で人を守る。魔物や争いから法で人は守れません。それが私が戦いに身を投じる理由です。

現在、国はどこも戦争をしておらず、兵士とはいえ、冒険者とやっていることは変わりありません。依頼があれば魔物や盗賊を斬りに行く、という仕事です。

ですがいつの間にか、私は將軍と呼ばれる立場になつっていました。発言権が強くなり、私自身が依頼をこなすことも減りました。そして、どうやらその地位を妬まれたようです。望んで手に入れた訳で

もないのに。

貴族上がりの武官である人達が、私が歯牙にもかけなかつたのに苛立ち（というのも、彼らの視線がいつも私の身体を舐め回すようにみていたからですが）、ねちねちと嫌みを言つて来る日が続きました。平民出の私が高官職についているのを好ましく思つていないです。

そんな内情に嫌気が指した私が、今回の観光を提案しました。  
そして、気のあう仲間達とお父様を連れて観光に来てーー。  
仲間達は皆殺されました。

……どうして、こうなつたのでしょうか？

私は、何も悪い事はしていない。それなのに、私のせいでたくさん的人が死んだ。今日も護衛の人が二人も死にました（一人は刺客でしたが、一人の死に変わりはありません）。  
もう、終わらせましょう。これ以上、無関係な人を誰も殺させはしません。

黒幕は国内に戻つて、きちんとお父様に裁いてもらいます。  
だから私は、この事件の実行犯を捕まえます。

風が金髪を撫でました。頃合い、でしょうか。

私は聖剣に手をかけ、立ち上がって馬車から少し離れます。そして、

「いるんでしょう？ 狙撃手さん。いえ、暗殺者さんですか？」

夜の闇で恐怖感を生み出す森を睨みます。それに気圧されたのか、がさがさと茂みが動きました。

「…………」

茂みが蠢き現れたのは、フィーのよつた黒のロープに身を包み、フードを田深に被つた人物でした。性別は顔も体格からも解りません。

黒の大きめなロープで、裾に手が隠れていて獲物も伺えません。聖剣レイリースを抜き構えます。白銀の刃が闇夜を照明のように照らしますが、やはり皆はぐっすりと寝ていて起きません。起きれない、と言つた方が良いかもしませんが。

「…………」

暗殺者さんは何も言わず、右手を振りました。次の瞬間には、その手にナイフが握られています。サバイバルナイフのような、凶刃が見えます。さすがに、近接戦闘では銃は使わないのでしょうか。いえ、それとも切り札のつもりですか。

「はあっ！」

攻撃は、私から仕掛けました。

刺突から始まり、横薙ぎ、斜め上に一閃、そこから袈裟切り。その連撃を暗殺者さんは華麗に避けて行きます。さすがに、この剣相手に受け止めるなどはしませんか。

「つ！」

けれど、このままでは劣勢なのは間違ひありませんよね？

あえて大振りの横薙ぎを繰り出します。相手が間合いを取ろうと後ろに飛びのもあえて追尾せず、こちらも距離を離します。

距離にして二十メートル弱。まあ、これで切り札も使えるんじやないでしょ？

思った通り、ナイフを持たない左手が上がります。けれど、これは予想外です。

「拳銃……」

間違いなく、あれは拳銃。連射が可能な、近代的な、あまりにも近代的な武器。つと、思わず思考が傾きました。

引き金に指がかかり、一切の躊躇無く引かれた。

あえて切り札を出させたのは、この戦いがどれほど無意味か悟らせるため。切り札が効かなければ、この勝負に相手方の勝ちはない。優秀な暗殺者ゆえ、単身での襲撃。それとも、単にこの事件の黒幕がこれ以上雇えなかつただけか。

まあいずれにしろ、これでおしまいでしょう。

銃弾は直線的にしか飛ばない。大きなカーブを描いたり、直角に曲がつたり、障害物を避けたりはしない。

この聖剣レイリースは、別に切れ味が良い剣ではない。熱量が莫大な剣だ。そう、銃弾にほんの少し擦らせるだけで、銃弾を溶かすくらいの熱量を持つた剣。

「つー？」

じゅわっと、銃弾が赤い光と共に地面に落ちた。

驚きながらも、懲りずに何発も放つ暗殺者さん。何度も無く撃ち落とす私。

おしまい、です。

「？？？」

銃弾が尽きたのか、暗殺者さんが背を向けました。ああ、丁度良い。

「かはつ！」

身体能力を上げて突進し、押し倒します。そして抵抗出来ないよう、右手と左手を押さえつける。

倒れても未だに取れないフード、正体不明、しかし脅威でなくなりた暗殺者。その耳に口を近づけ、私はこう話しかけた。

「隸属の首輪なんて、お洒落な物付けてるね」「ツー？」

びくりつ、と相手の身体が震えるのが伝わってきた。

ボーアンソプラノの声が、そう襲撃者に語りかけたのだ。

おっと、またやってしまったか。どうやらまた声が元に戻ってしまっているようだ。いやはや、身体能力を上げるとどうにも魔法が緩んでしまう。

今更なので私は？？いや、僕は魔法を解き、襲撃者のフードを取つた。

魔法。

僕は変化する魔法を使えるのだ。

それも、体格や身体能力のみならず、才能、経験、思考といった部分までも。

「魔法使い……」

どこか忌々しげに呴いたのは、海のような深みの有る蒼い髪の少女だった。その少女の首には、金色の首輪が付けられている。魔法具、隸属の首輪。

『法則1、付けられた者は付けた者の命令に、意志と関係なく従う。

法則2、付けられた者は命令を実行中、その意志を失う事はなく、

身体だけが命令に忠実に動く。

法則3、付けた者の意に介する行動をとる事は出来ない』

という魔法具だ。

なるほど、この隸属の首輪を彼女に付けた奴が魔法使いで、彼女の恨みの対象と言つ訳か。いやはや、厄介な魔法具を作つた奴だよ、本當。

どことなく感情を失つた少女だ。

恐らく、幼い頃にこの首輪を付けられ、暗殺者となれ、とでも命令されたのだろう。彼女は意志と関係なく、身体が勝手に暗殺者になるべく生きて来たのではないだろうか。

けれど、僕はこの少女がとても優しいように思えた。

その目は充血しており、一睡もしていないような隈がある。そして今にも泣きそうな顔をしていたのだ。きっと、泣いていたんではないだろうか。

意志に関係なく、意識を保つたまま人を殺して來た少女。

彼女の恨みがましい目つきに、僕は笑みを浮かべる。

「助けて上げようか？」

驚いたような、惚けたような顔を少女がした。凄く顔がニヤ付いた。やばい、おっさんの思考が僕に染み付いて来ているぞ。

これ以上無駄な襲撃をされないために、僕は返事も効かずに首輪に手をかけた。

ビリビリと電流に似た物が僕の手を焼き切ろうとするが、それは僕の手に吸い込まれるように消えて行った。僕は手に炎を宿し、その首輪を焼き切る。

どうせこの首輪は、魔法がかかつていなければ唯の首輪だ。外さ

れないように反撃の魔術を仕込んだようだが、魔王の僕にはそんなもの関係ない。

全ての魔力を扱う事象は、今の僕には効かない。レイと言ひおつさん状態やリース嬢に化けているときは効くけれど。

「さて、これで君が僕らを襲う理由は無くなった。それでもまだ命令に従うか？ その時は仕方がないね」

「えつ……」

僕は立ち上がり、彼女を自由にしてあげる。彼女は不思議そうに、先ほどまで首輪の付いてた所を撫で回していた。……その役目、僕がやりたかった。ネコは好きなんだ。

夜明けまではまだあるが、早めにおつさんの姿に変わつておく。

「さあ、お行きなさい。あなたは自由ですよ」

と、胡散臭いおつさんの声で、あまりの出来事に呆然としている彼女にそう言つた。普通、この手の魔法具は一度使われると逃げる事は出来ない。何せ、使つた本人もどうしようもない魔法だつたりするのだから。

そう言えば、彼女が僕の正体をばらしたら、このおつさんは使えなくなるか。まあ、その時はその時だろ。

僕はのんびりと階がいる馬車の方へと向かつて行つた。

-----

僕の使つてゐる魔法は、複写魔法。

『法則1、変化出来るのは実際に接觸した人物のみである。

法則2、変化は、肉体を完全に変異させ、その人物の肉体的特徴に全て完璧に変化する。

法則3、変化した人物の人格を、仮想人格として構築し蓄積する。使用者の判断時に採用する事が可能である』

これが僕の持つ魔法である。

完璧にコピーする能力だ。つま先から脳みそまで、しわの数から爪の長さ、髪の毛の本数までもを完全にコピーする。完璧なクローナンを生み出す能力と言っても過言ではない。何せ、変化した人物の人格すらもコピーするのだから。

仮想人格、これは人間の内情を全てコピーする。その人の記憶、経験、癖、思考など。

だから僕がリース嬢に変化しているとき、リース嬢の過去の話をされても僕はちゃんと受け答えが出来る。癖の一つ一つまで完璧にこなしてみせる。今回、事件の考察をしてくれたのも仮想人格である。

勘違いしないでほしいのは、全て仮想人格が思考し、自分ならこうしますという答えを出してくれるからであって、別に僕が変化した人物に乗っ取られると言う訳ではない。

だから、その人物だつたら絶対にしない、という行為をする事も可能な訳だ。全ての行動の決定権は僕にある。仮想人格はあくまで仮想、身体を動かす権利はない。

この魔法の恐ろしい事は、変化した者の才能と呼べる部分をもコピーする事が出来る点だ。身体的能力の全てコピーである。もしもこの状態で僕がリース嬢と戦つたら、それは凄い戦いになるだろう。自分ならどのように立ち回るか思考してくれて、それに身体が付いて行く。まさに、自分との戦いが出来る訳だ。

この魔法を使って、僕は魔王ではなく、おっさんとしてギルドの登録されている。僕を助けてくれたおっさんだ。なかなかに身体能力も高く、魔術の才能もあり、本当に万能な身体だ。僕は好き好んで使っているが、顔と声がどうにも駄目だと最近気付いた。ギルドでは僕の正体がばれるまで、まだしばらくこの身体を使わせてもらおう。

おっさんであれば、突然消えても不思議がられるまい。

## ヒローグ

後日談。

あの後、僕たちは特に問題を起こす事無くアイカシア国首都、アイカシアに到着した。やはり黒幕連中は、あの少女とラシングを雇うのが精一杯だったのだろう。

ちなみに、調べた所、あの少女は現在行方不明となっているようだ。復讐でもしているのか、自由な人生を満喫しているのか定かではないが、暗殺者稼業はあまり好きじゃなかつたようだ。僕としては後者であつてほしい物である。

カイル達とは首都の彼らの屋敷前で別れた。

カイルには今回の事件の黒幕らしき人物を伝えておいた。一応、少しだけ彼とはつながりを持つておきたかったのがある。あと、アイカシア国は少しだけ土台が脆く、優秀な人材をさっさと手放すんじゃないかなと思っているのもあつたが。

一応僕、魔王だからね。いずれ作るかもしれない王国に優秀な人材が欲しいのだ。

「レイさん、あの……うちの屋敷で働きませんか？」

というリース嬢のお言葉を丁重に断り、報酬を受け取り、ギルドへと向かつた。リース嬢と一緒に屋敷で働くのは嬉しいが、それで迷惑はかけられない。それに、美人って裏がありそうで怖い。いや本当、なんでそんな事言つてくれたんだろう？　仮想人格のリース嬢に答えてもらつのは最低だと思うので、未だに僕の中でもそれは疑問だ。

ガイラスの死体は、彼の名譽を考えその場で葬った。仲間に裏切られたとはいえ、あまりにも情けない死に方だつたからだ。といつても、爆破されてしまったので、結構適当な埋葬になつたが。今思うと、あの鉄の塊はもしかして……手榴弾？ 僕以外にも、前世の記憶持ちがいるのかもしれないな。

ラングの死体は、場所が解らないのを好都合と考え、そのまま放置した。結局、彼が何を思つてその依頼を受けたのか、僕らには解らなかつた。そのため、同情する事も、深く恨む事も出来ず、なんだからもやもやした物が残つた。

「…………レイさん、色々助かつた。ありがとう」

ギルドで任務完了の旨を伝え、すぐに宿屋に向かおうとする僕に、シユイが話しかけて来た。

「礼は要りませんよ。僕たちは助け合つ関係を結んでいた訳ですから。それぞれがベストをつくしだけでしょ」

僕の台詞にシユイが苦笑し、やつぱりおつさんだな、と謎の台詞を吐いた。

飄々とした態度、これがレイというおつさんのキャラなのだ。

「では、またいつか会える日があれば。僕は敵としては現れませんので」

と格好付けて去ろうとした途端、ぐいっと袖が引っ張られ、危うく転びそうになった。誰だこの野郎！ 僕は全然寝てないんだ！

眠たいんだぞ！ このままここで寝るぞ！ 白痴じゃないが、一度寝たら朝まで起きない事に定評があるんだ！

と、内心で怒ったのだが。

「レイ……、ありがと」

フイーがぼそりと呟いた言葉で、それはびくに消え去ってしまった。

呟きの後、フイーは何故か胸を張つて言つ。

「いつかあなたを仰天させるような魔術を見せてあげるんだからー…いやいや、今この瞬間、僕はものすごく驚いたよ。フイー、シンデレだつたんだ。

「やれやれ、今回は妙に疲れたな

夜中、僕は首都で一番高い宿に泊まつた。フイーやシュイは知らないが、どこか別の所に泊まつているはずだ。フイーはリース嬢の屋敷にでも泊まつているのではないだろうか。仲良かつたし、あの二人。

看病したがるリース嬢に追い回されて僕の後ろに隠れるフイー。おっさんに近づけずに困惑するリース嬢、何やら誇らしげなフイー。どさくさに紛れて、王子様気取りでフイーを抱きしめる僕、幾ばくかの沈黙の後殴られる僕……とか色々あつたような無かつたような微妙に背の高いおっさんの姿から小柄な僕の元の姿に戻り、大きなベッドに寝転がる。窓から差し込む月明かりしかない部屋のため、僕の黒髪は闇夜に紛れる。そのためか、この国では黒髪が嫌われている。

黒髪自体は少くないのが現状だが、帝国のお偉いさんの誰かが、魔王は黒髪である、などと言つたもんだから、僕としては魔法で変化して出歩いているのだ。迷惑極まり無い。いや、僕が魔王なのは真実だけど。

そのためか、国民の大半が黒髪であるニルベリア皇国と帝国は仲が悪い。魔王の黒髪説は、実のところニルベリア皇国に攻め入る理由にしたかったのではないかと僕は思つてゐる。

今回の任務の報酬は、金貨三十枚、日本円にして三三千万円の仕事だつた。宿屋は銀貨三枚、三万円での宿泊である。

ちつ、安いな。宿屋の値段じゃなくて、報酬がだ。

依頼内容と見合つていると言えば見合つてゐるが、これじやあ同志に顔向け出来ない。あいつ等は白金貨で報酬を得てゐるんだ。

それもこれも、僕のために、その僕の報酬が一番少なくてどうするよ。

といつても、『王が自ら働くな！ 金を稼ぐのは俺等の役目だ！ そして老後は楽させろ！』とか言い出しそうだ。まだ僕は王になつちゃいないと言つの』。

と。

僕以外の気配が、部屋から感じられた。

いやはや、今日は僕に取つては厄日かな？

「……どうしたんだ？ 僕に何か用？」

それは、あの暗殺者の少女だつた。

行方不明と聞いていたが、まさか僕の後をずっと付けていたとか？ ストーカーか、別に嫌いじゃないな。そういう一途な子は好きだよ。

え、違うつて？ そりや残念。

「…………

ベッドで横向で寝ている僕の方に、無言で近づいてくる少女。何か言つてほしい。僕はどんな態度を取れば良いんだよ。言葉にしなくても伝わるのが一番だけどさ、結局言葉にしなくちゃ伝わらないんだよ。言葉にする事が大切な。恥ずかしくても。はい、だから何か喋つて！

「…………

という僕の心の中の叫びでした。

ほりね？ 何も伝わない。

少女が、僕の前に立ち、僕を見下ろした。ぞくっと、身体が震えた気がした。

今度はしゃがんで、僕と田線を一致させる。じきりと、胸の鼓動が高鳴る。

僕はその少女の目を、真っ直ぐに見つめ返す。良く言つじやない、目の動きで何を言いたいのか解るつて。僕？ 全然解らんよ。精々、嘘をついているかいないかだね。この状況では何の意味もない。

無言で見つめ合う僕ら。

少女の水色の瞳の中に、僕の顔が映つている。なんか男らしくない、見るからに弱つちい顔だ。それに僕は身体も小柄だし。だから背の高いおっさんに化けるんだけど。まさか、背の高さまで変えるとは思わないだろ。

そんな事を言つても、僕は公式記録上では死んだ事になつているんだけど。

この魔法を使って、親友が僕に成り代わつて死んだから。思わず、思い出し涙（？）が零れそうになつた。僕は弱虫だよな、僕の姿のままじゅ、すぐに泣いちまう。涙腺が弱いんだ。

でも、それが僕が父さんと母さんの息子である証明みたいな物だと思っている。前世の僕は、とにかく泣かなかつたから。

「……どうしたんですか？」

と、不意に声がかけられた。

それは、酷く優しげな音色で、何故だかとても心地よい響きだつた。

「ちょっとね、嫌なこと思い出して……」

「……そうですか」

訂正。全然優しくない。むしろ氷河期のように冷たいよ、この子の声。彼女の名譽のために良く言つなら、鈴を鳴らしたような声かな。風鈴みたいな感じ。悪く言つなら、氷のホテルで響くかき氷の皿の音。どうしてかあの皿の音は、酷く冷たく感じる。

興味がわいたので、彼女の姿を注意深く観察してみる。

……ふむ、あの時は気付かなかつたが、この子もかなりの美人だ。可愛さとクールっぽさが入り交じつた、どこか大人びた少女。笑えば年相応の可愛さだろうが、無感情なので大人っぽく見えるのだ。

「…………」「…………」

再び沈黙。息苦しい夜。別に熱くはないんだけどさ、寝苦しいぞこの状況。いや、寝たら寝たで、永眠になる気もする。

……まあ、いつか。

なるようにしかならないよ、人生は。

僕がここで死ぬようなら、僕って人間はその程度の人間だつたつてことさ。

生きる努力はするけど、努力の必要性がない場面ではしないよ。

じゃあ、おやすみなさい。

目が覚めたらブルースクリーンだった。  
ワット!? 何が起きた!? 強制ログアウト…?

否、少女の髪が目の前にあった。

どうやら、一緒にベッドで寝ていたようだ。  
なんだ、そんなことか…え?

僕は寝惚けると言つたことがない。だからこれは、明らかに混乱。  
朝っぱらから状態異常。いや、宿屋で休めば回復するはず—いや  
いや、落ち着け僕、何の話をしている…?

ちりと僕は視線を下げると、可愛らしい寝息を立ててちらしあるお嬢さんの、これまた可愛らしい寝顔が。

さらに視線を下げると彼女の腕が僕を抱きしめており、胸のあたりに柔らかな感触が。

さらに下げると、足と足が絡み合つているじゃないか。白い生足  
がーーあ?

よく見れば、彼女の格好は下着にて、薄手のシャツと格好だつた。

ふむーー、僕は抱き枕にされていたようだ（一行前についての口  
メントはしない）。

「え? あ、え?」  
「う……」

僕が拳銃不審になり、逃げ出そうとした所、彼女の抱きしめーー  
もとい締め付けが強くなつた。だ、脱出不可能です大佐! 気持ち  
よくて良い匂いがしてなんか柔らかくて、僕の理性が無くなりそ  
です!

「？？？！？」

「どうにかしなくちや。せひ。

とりあえず、理性があるだけ行動してみた。

少女の頬にキスしてみた。

うんとね、王子様のキスでお姫様が目覚めないかなってね？

理性は無くなっていたようだった。

「うつ？」

と頬が濡れたのが気に触ったのか、少女がゆっくりと目を開けた。ぱちりと開かれた時には、僕は燃え尽きていただろう。寝起きが良いだけだったとしても、見られていたと思つて爆死していただろう。

「お、お目覚めかな？」

「…………」

無言で、じくじくと頷く少女。

うむ、意思の疎通は可能なようだ。  
でも離してくれないのは何でかな？

「えっと、とりあえず、どうしたの？」

「…………」

また無言。言葉にしなくちや、伝わらないんだよ。  
と、そんな僕の心の声が聞こえたのか、ついに少女が話しお出した。

「……あなたが、私を助けてくれた」

いや、それどうしたのは僕じゃないかよ。君がどうしたいのかを聞いてるんだ。いや、どうしてこんな事をしているのかも聞きたいけどさ。

胸がドキドキ、この鼓動が君に伝わりませんよ！」

「……私は、あなたに感謝します。……でも、恨んでもいます。どうやって生きて行けば良いのか、私には解りません。……責任、取つてください」

甘ったれんじやないよ！ それがどれほど自分に対しても無責任な発現だか解つてゐるの！？ 後悔するよー」と、心中で大反対。

「……責任つて、君、僕の正体解つてるよね？ 僕、魔王だよ？ 魔王に責任を預ける君は、凄く無責任だ」

意外と口でも反論出来た。けど、口だけだった。  
少女の瞳に映る涙に、僕の心は崩落していた。

「……私は、生き方が解りません。依存しなければ、生きられません。……だから、どう扱つても結構です。あなたと一緒にいても良いですか？」

ああわかった、いいよ。

でも一緒にいたい言つても、終始抱き枕みたいに抱きしめられて困るんだけど。これじゃあ僕動けない。

「……駄目？」

と小首を傾げる少女。

「駄目」

僕は断言してみせた。そして、間髪入れずに次の言葉を紡ぐ。

「君を一人の女の子として扱つてもいいなら、いいよ」

と僕は笑つて答えた。

『動けないから離して』、と僕は言わなかつた。代わりに、少し強めに僕から抱きしめていた。

後に判明した事だが、どうやら僕の理性は簡単に吹つ飛ぶようである。

「…………」時、なんて言えば良いのかわかりません。  
でも、あなたと一緒にいると、凄く……胸が熱くなります。それが、  
心地良いんです」

そりや抱き合つてるからね、僕の熱が移つてるだけじゃないか?  
心地良いとかは知らない。僕はちょっと久々の人の温もりに泣きたいだけなんだ。それが愛情と言うのなら、僕の胸のムカムカは、そういうものなのかもしれないけど。

けど。

「……なんだよ、生きるのに一番大切な物は、解つてんじゃん  
？」

首を傾げる少女に、僕は答えを教えた。

「幸せだよ」

僕に取つて、実は復讐なんて二の次だ。

僕を助けてくれた皆が、それを望むとは思えない。  
だから僕は死んでしまつた彼らの分だけ、人を幸せにしようと思つてゐる。

それが僕の世界の破壊。不幸な人の世界の破壊。  
だが、僕は魔王だ。きっとマトモな人間にはならないと思う。人の気持ちなんてさっぱり解らないし。  
だから？？。

手始めに、僕が幸せとやらを知らなきや駄目かな。  
と言つて、この目の前の女の子に精一杯甘えさせてみた。

## HPLローグ（後書き）

ここからはあとがきです。本編とは関係のない話がだらだら続きます。

興味のない方、そういう話は嫌いな方は、どうぞ読み飛ばすなり、プラウザの戻るボタンをクリックしてください。

これにて、例えば仮の魔王様、序章が終了です。

……予想以上に話数が伸びてしまいました。反省します。その割に文字数が少ないのも、反省ですね。

今回の物語、私としては色々とチャレンジ精神で書いた作品です。例えば、戦闘が短い（私の作品全般そうかもしませんが……）。

世界観をあまり語っていない（国の名前とその内情程度）。魔法がチート（他のシリーズでは『能力』と表記していたりもします）。

上記の二つは、単純に私が読んでいても読み飛ばすので、書くスキルも未熟なのだから、いつそのこと短くしようとした試みでした。三つ目が、このシリーズ全般に言える事でしょうか。

私は、電子機器一般がどうやって動いているのかさっぱり解りません。

こいつの理屈で動いてるんだよ、と聞かれてなんとなげでしか理解する事が出来ません。

パソコンなんかが特にです。

そのソフトを構築している言語と理論は結びつけられても、その下、ハードでどのような動きをしているのかがまるで理解出来ません。私のプログラムの理解は、言語を理論通りにすればとりあえずこいつの結果を生み出す、といつ認識です。それをたくさん繋げて、ソフトを作っていると。

この物語で言う魔法とは、そんな感じです。

どういう現象が世界に起つていいのか解らないが、とりあえずこういう結果になる、といつ現象です。

本当、チートです。でも、それをただのチートでは終わらせないようこじよじと思っています。

『例えばシリーズを足して一で割った作品』の余剰分だったのですが、頑張って更新して行つつと思っています。

次回はいつになるか解りませんが、次章  
『純情な生け贅と黒のマサノ』、エピローグでまた何か語ろうかと思っています。

最後になりますが、感想・評価、とても自信になりました。  
ありがとうございました。これからも、よろしくお願ひします。

## プロローグ

僕がニルベリア皇国の巫女、アオイと出会ったのは、一人の呪いに掛かつた人を助けるためだった。

ニルベリア皇国は、日本のよつな国だ。違いはいくつかあれど、その文化は日本にかなり近い。島国であり、天皇がいて、神社があつて、米や味噌がある。僕に取つては心のふるさとと言つても良い。違いと言えば、神社にやけに権力があると言う事か。神様の力を借りて怪我や呪いと言つたものを治療する神聖術を使えるからだ。実際の所、あれは魔法に近いと僕は考えている。怪我は魔術で治す事は可能だが、魔法によつて付けられた呪いは、魔術では治す事は不可能だからだ。魔法であるが弾圧されない神聖術を見つけて、物は言い様だと思い知つたものだ。

### 閑話休題。

あれは、僕が癒しを求めてニルベリア皇国のご田舎に行つたときの話だ。

呪い。それは、魔法によつて付けられた特殊な傷。  
それを治すには神聖術、もしくは希少ながら存在する薬でしか不可能だ。……表向きには。魔法には魔法で対抗する事ができ、その傷である呪いも消せる事が出来る魔法があるからだ。

田園風景が広がる田舎道を僕は歩いていた。特に道を選ぶわけでもなく、道が続く限り。少しばかり、考え事をしていたのだ。

ハンバーガーが食べたい、と。

「」の二ルベリア皇国に来てから一ヶ月程立つたが、ずっと和食。しばらくの間は、懐かしいと思つて食が進んだが、そろそろ刺激が欲しくなつて来ていた。

そろそろ別の国に行くか、じゃあどこの国にするか……などと考えていたのだ。田園風景が広がる田舎道を歩いていた、はずだった。

結果、道に迷つた。

辺り一面、森。前と後ろに道こそあれど、どっちから来たのか方向感覚を失っていた。完全に迷子だつた。

やべえよ、やべえ。見た目おっさんのかせに道に迷うとか、恥ずかしくて死にそう。はははは、どうにかなるさ、と仮想人格は言つているが、いやそれどころじゃない。このおっさん見た目からじや、むしろ納得されそうだけど。

「…………」

と、森の奥から人の話し声が聞こえてきた。

助かつた！

どうして森の奥からなのかは知らないが、そんな事考へている暇はない。

恥ずかしいのでいつも胡散臭いおっさんスマイルを浮かべ、僕はさささと近づき声をかける。

「すいません、道に迷つたんです……が……」

僕の声はどんどん尻すぼみ。タイミングが悪いよ……。

女の子を担いだ山賊さん達だった。

「あ？ テメエ、何者だ！」

白いローブを着て手かせを掛けられた女の子。それを担いだリーダーっぽそうな男が文句を言つて来た。

迷子です、とは言えなかつた。もし言つたとしても、信じてもらえそうにない。おっさんじやあ、迷子とは言えないし。

……よし、仮想人格 に任せよう。

「『』覧の通りただの旅人だよ」

「んな訳あるか！ テメエみたいな胡散臭い奴の言つ事が信じられるか！」

ふつ、と笑みを見せる僕に、しゃしゃーしゃーと騒ぎ立てる山賊達。信じてもらえないでの、次の嘘を吐く。眞実が一番信じられなさそうな気がするのは何故だらう。

「姫、あなたの騎士が助けに来ましたよー。」

「手ぶらの騎士がどこにいるかー！」

「よしよし、お前等よくやつた。後は任せろ。その女を置いて下がつてな」

「へいお頭？？つて、巫山戯てんじやねーぞ、おっさん！」

遂にノリの良かつた山賊さん達も、腰にあつたナイフを構える。どうやら何一つ信じてくれなさそうだ。

といふか、別に僕があの女の子を助ける必要はないような。そん

な義務はない。わざわざそんな危険を冒す必要なんてない  
じゃないか。

と言ひ詫で、

「じゃ、後悔するんだね」

僕は踵を返して、ゆっくりと歩き出した。

後ろで山賊達が呆然としているが、そんなの関係ない。女の子の  
安否も関係ない。

「て、テメエ！ 待ちやがれ！」

と、一人の山賊が追いかけて来た。

「お見送りですか？ ありがとうございますねえ」

「巫山戯てんのかこの野郎！ ……いや、そうだ。お見送りだ」

突つ込んで来た男だったが、不意にニヤリと笑みを浮かべた。そ  
して、ナイフを構える。

「テメエが地獄へ行くお見送りだよー。」

見られて生きて返せるか馬鹿が！ と、男が襲いかかってきた。  
馬鹿だなー、僕相手に一人で来るとか？ 手間が省けたよ。

「兄貴、始末してきやしたぜー！」

「良くなつ？ へふー？」

「兄貴ー？」

僕は追つて来た山賊に化け、兄貴に足払い。前にぶつ倒れる兄貴から女の子を奪い取り担ぎ上げた。

「テメエ、裏切ったのか！」

何故だか裏切り疑惑を持たれ、攻撃態勢に入られた。  
おやおや、こいつはまだ僕があの山賊だと思つてるのか。  
これで三人の関係が崩れては可哀想なので、僕はおっさんの姿へ戻る。

「いつ！？ て、テメエ、魔法使いだったのか！？」

「名答、僕は魔法使いさ。とんでもない化け物クラスのね。  
にやにやと笑いながら、僕は女の子をしつかりと抱き抱える。  
別に女の子の体柔らかいとか、良い匂いだなんて思っちゃいない。むしろ、ちょっと痩せ過ぎじゃないかと思つていいくらいだ。  
僕の目から見たら幼女だね。

あれ？ こっちの方がまづい事言つてないか？

「じゃあ、頑張ってね～」

と僕は颯爽と駆け出した。駆け出していく氣がついた。

「道聞ぐの忘れたよ」

「兄貴、大丈夫ですか？ 擾つて来たのを攢われちゃつたんじゃな  
いすか」「……いや、それで俺にどうじうと？ ビうじょうもないだろ。そ

れに、身代金は要求出来そうになかったからな

「そつすね、あんな屋敷に住んでるから金持ちかと思つたの」

…

「何？」

「何言つてんだお前。いつから東に行つた所に？？テメエ！」

道を聞くのを忘れたので戻つて来てみれば、良い話を聞かせてくれた。

身代金、ねえ。良い所のお嬢さんなのかな。

「報告！」苦労、ではでは

「テメエ？？って、何すんだ！」

「兄貴、止めてください！ あんな化け物、関わるのはよしまじょ  
うやー、どひせ、碌な娘でもなかつたんですし

逃げる僕を追おうとする兄貴と呼ばれた男を、子分一人が足止めしてくれた。うん、それでいい。僕なんかに関わると碌な事にならな<sup>いぞ。</sup>

で、僕の肩で碌な娘と呼ばれた女の子が、泣いているように震えていた。

しばらく逃げて、まだ道に迷っていたので、不本意ながら女の子に道を教えてもらつ事にした。道は道でも、獸道だけだ。

想いでた女の子を下ろして、その手枷を取ろうと手を伸ばしたら、

「！」、来ないでくださいー！

『やれりと女の子が後ずさつされました。

……ショックだった。

いや、まさか助けた女の子に引かれるくらい自分が胡散臭いとは思わなかつた。

「私に近寄らないでください」

「いやいや、別にやましい事は何もしないよ？」

そう言つて、僕は女の子が被つっていたフードを取る。こういう時は、田と田を合わせて話すに限る。つと、顔が泥かなにかで黒く汚れているじゃないか。可愛い声なのに、勿体無い。

僕はさりげなく、魔法を宿した手で女の子の顔を拭つた。

「ほら、顔もつるつるじゃないか。だからほら、君の綺麗なお手でおじさんに見せて『ご覧？』

「……。うう、ですか？」

言つてる事につながりがない。どんな接続詞『だから』だらう。つていうかコレ、どっからどう見ても変態だぞ、僕。

そんな僕をきょとん、と見つめる女の子。何がオカシイんだい、言つて『ご覧？』おっさんの顔かい、それとも頭の中かい？

どっちもだね。

と、差し出される手。じゅりりと音を立てる手枷。純朴そうな瞳。

え？ あ、そう。手、出しちゃうんだ。

「あ……うん、そうそう」

驚きながらも、当初の予定通り手枷に魔力を流して鍵を外す。じゅりりと音をたてて落ちる手枷を、手みやげ代わりに押借した。持つてもしようがないだろう。

「じゃあ、道案内してもらおうかな」

「はい？」

「君の家、『二』にあるんだい？ 大層な屋敷らしいじゃないか。ちよつくり御呼ばれさせてもらひつよ」

髪を撫で付け、最後には眼鏡を押し上げる。

……うつむ。仮想人格に好き勝手やらせていると、僕の評判を心底落としてしまいそうだ。いや、最初から底辺から動いてないんだけども。むしろ悪目立ちしているよ。態度が『Gランクの天才』として。

いい加減、方向転換しないとまずいかな。今度から真面目に依頼を受けてみよう。やるからには本氣で。幸い、まだそんなに悪名は轟いていないしね。

と、そんな心を改めようとしている僕に、女子は言った。

「はい！ ゼひ来てください、私の騎士様」

とても可愛らしい（当時十三歳の）笑顔だった。

え？ はい？ 何それ？ さつきのコント、聞いてたの？ いや、あちらさんにしてみれば眞面目にやつてたのかもしれないけどさ。僕は何がなんだか解らなくて、仮想人格に任せた。

「そんな可愛らしい笑顔、騎士を怪盗になさるおつもりですか？  
お姫様」

「嘘つきな騎士様にはピッタリですね」

僕は少しひくりして、それこそ図星だと言わんばかりに引いてしまった。

そんな僕を見て、女の子はくすくす笑っていた。

くそ、幼女に笑われるとは何たる恥！ 驚かせてやる！  
という子供っぽい理由で、僕は魔法を解いたのだったが……。

「……意外です。……カツコいこじゅないですか」

よく考えたら、僕はこの子の前で一度変化してみせていたじゃな  
いか。

あまり驚かない女の子に、僕は自分の愚かしさを感じ取っていた  
りした。

「さあ、付いて来てください。お持て成し致します」

そう言つて、とにかく先に歩いて行く女の子。

そう言われて、僕はとぼとぼ後を追つて行つた。

そう言えば、僕をカツコいって？ そんなお世辞？？聞き慣れ  
てないから嬉しい。

「やうひ言えば、名前、言つてませんでしたね。私の名前はアオイで  
す」「僕は名乗らなーよ。』Gランクの天才『なんて、俗では呼ばれて  
いるけど

壊められたのが嬉しくて……僕はアオイの住む屋敷の前に着くま  
で、おっさんの姿にならなかつた。  
ちなみに、結局名乗らされるはめになつた。

---

これが、僕と呪われていた少女、アオイの出会いだった。  
一人の呪いに掛かった人、っていうのはアオイのことだ。  
呪いにかかるて療養していた彼女が誘拐されたのを、偶々助けて、  
ついでに呪いも解っちゃったと言つ話。

それにしても……、今も昔も、僕は姿を隠す事にこだわりがない  
な。結構簡単に魔王の姿を曝してるよ。碌でもない理由で。  
まあ、それもこれも、公式記録上では魔王は死んでいるからなん  
だけどさ。

#### 閑話休題。

そんな彼女との出会いから三年、前世では結婚出来る歳になつた  
アオイ。生意氣で（無邪氣で）憎たらしい（可愛らしい）餓鬼だつ  
た彼女も、大人になつたのか。

僕はそんな事を思いながら、新たなる依頼の地、ニルベリア皇国  
へと旅立とうとしていた。

## プロローグ（後書き）

感想・評価を頂けると嬉しいです。

首無し磔貴族の護衛任務から数日後だった。  
アイカシア国首都、アカシアのギルドの受付にて、受付嬢から伝  
言もとい、任務を頼まれた。

「うん？ 僕に依頼かい？」  
「はい、そうです」

どうやら、二ナから僕宛に依頼が送られて來たようだつた。  
受付嬢は手紙を僕に渡すと、さも忙しそうに奥に引っ込んで行つ  
てしまつた。これは僕が引かれたんじゃなくて、手紙の内容を見な  
いように氣を遣つていなくなつたんだと思いたい。

ちなみに、僕こと『Gランクの天才』に依頼をするのはなかなか  
難しい。一つは、僕自身が連絡手段に魔宝石（魔石ではなく、一度  
きりしか使えない魔法を附加した唯の石）を与えた場合。これ  
は僕に直接伝わつてくる。今回はもう一つ、ギルドの厳重な審査を  
通つて來た場合のようだ。

が、依頼内容はニルベリア皇国首都、シミヤの端にある小屋にて  
と書かれていた。そこまで来てから話はする、といふ血が手紙には  
書かれていた。

胡散臭い……。

どの口が言つんだとか言わないで。

しかし、ニルベリア皇国か。あそこには……アオイくらいしか知  
り合ひはないな。もう三年経つたが、元気だろうか。実は、一度  
行つたきりでニルベリア皇国には行つていなかつたりする。そう言  
えば、アオイには連絡手段である魔宝石を渡してあつたよな。と言  
う事は、これはアオイからの依頼ではないのか。でも、こんな内容  
の依頼が僕に來るのは……ふむ。

ニルベリア皇国は食事が味気ないという理由で、実はあまり人気がない。島国で行きづらく、田舎でこの世界の観光地には向いていない。

というのも、魔物なんかが闊歩しているからそこまで開拓が進んでおらず、自然なんてわざわざ見る物じやないと言うのが一般的だ。旅行と言えば、進んだ国の町並みを眺め、珍しい物を買うのが普通である。

ニルベリア皇国に行く者の大半は養生に行く者だ。巫女の神聖術に希望を抱いて海を渡る。精進料理（味気ない料理）が主食で、落ち着いた田舎。病人に取つてはこれ以上ない療養地だろう。健康な物に取つては刺激が足りないと言うか、詰まらない国である。かくいう僕も、しばらくは行かなくていいやと思つたのだ。だからアオイが元気かとか、薄情にも知らないのだ。

十六歳になつたあの子は、一体どうなつただろう。さぞかし美少女になつた事だろうな……。

と。

スパーク、と後頭部に衝撃があり、僕はくらりと姿勢を崩した。痛い、結構痛い。誰がぶつた、感謝料請求するぞ！ という怒りではなく、どうしようもない途方に暮れた感じで僕は振り返った。

「レイ、顔がにやけてます。……その顔は気持ち悪いです」「アイリ……」

僕は殴つて来た元暗殺者の少女、アイリに苦い視線を向ける。それを目を閉じて涼しい顔で受け止めるアイリ。人様を殴つておいて、随分態度が大きいじゃないか。反抗期かい？

「……他の方の迷惑です。場所を移動してください」「……はい、すいません」

あのね、なんかね、態度が冷たいよ。

僕は一体どこで調教??じゃなくて教育を間違えたのだろうか。あの日は抱きついて離れなかつたのに、今じゃ一定の距離までしか近づかない。付かず離れず、その様は秘書のようだつた。僕は嫌われてもいなが、好きでもないと言つ事か? でも、僕から近づいても避けるんだよな。一定の距離を保つんだよ。でも夜にベッドに入つて來たりするのは何故だろ? よく解らない。

……あれか。好きな事には好きと言える、嫌いな事には嫌いと言えるように教育した所為か。そして成果なのか。最後は僕、罵倒されてたもんね。

僕の自業自得だった。

回想してみよ。

「……私の名前は……アイリ、です」

「アイリ、ね。良い名前じゃん。みひしき、アイリ」

そう言つて頭を撫でてやつたら、小さく照れくわいに笑つていつたつけな。あの時のアイリは可愛かつたな……。

「マ……れ、レイ。なるべく近寄らないでください。あなたと一緒にいると勘違いされそうで嫌です」「

面と向かつて嫌と言われて、凄く傷ついた。そして、アイリは僕に近づかなくなつた。

回想、終わり。

むなしくなつた。

アイリは拳銃を持っていたが、それはどうやら渡された物らしく、手榴弾もそつだつたようだ。その使い方も教えていたが、今は僕が預かっている。近代兵器など、迂闊に見せていい物ではない。誰でも簡単に人を殺せるなど、あまりよろしくない。

恐らく、僕と同じ前世の記憶持ち……いや、魔法使いがいるのだろう。かなり思慮が浅い奴だ。魔法使いと言えど、脳天をぶち抜かなければ死ぬと言うのに。

隸属の首輪により、身体が勝手に暗殺者として生きて来たアイリの身体能力はかなり高い。おっさん状態の僕よりも上だ。

と言う訳で、僕はGランクらしく、大人しくアイリに引っ張られて行つた。むしろ引きずられているようだった。

ギルド内にある休憩スペースに運ばれ（もはや自分の意志はない）、四人掛けの机と椅子につづ伏せになりながら、僕は今後の予定を話した。

「で、二ルベリア皇国に行く事になつた。どうする？」

「……どうするも何も、一緒に生きますよ」

「氣のせいかな？ もうじやなくてユイエーテ聞こえたんだけど。まあ、一緒に来るのに変わりはないか」と。

「レイさん……ですか？」「えつ、本当だ」

聞き覚えのある声が聞こえた。具体的には、戦姫様と偏屈魔術師だった。

「レイさんもニルベリア皇国に行くんですか？」

「ええ、まあ」

いつの間にか同席している一人。

フイーは予想通り、リース嬢の家で厄介になつていたようだ。  
も、つて事は、彼女達もニルベリア皇国に行くのか。

「お二人は？観光が何かですか？」

「いいえ、私が呼ばれたんです。それで、フイーには付き添いで  
「リース嬢が？」

「呼ばれた……ねえ。アイカシア国とニルベリア皇国は友好関係に  
あるが、戦姫を呼び寄せる、ねえ。何だか嫌な予感がするな。

「リース嬢、つい先日襲われたばかりではないですか。大丈夫なの  
ですか？」

「はい。お父様が犯人に目星を付けられていて、すぐに捕まりまし  
た」

「おいおい、優秀すぎるぞカイル。僕は誰が怪しいとか教えただけ  
なのに。証拠とかはなかったのに。それを数日で、か。恐ろしい。  
というか、裁判長の職権乱用じやないか？」

「ところで……彼女は？」

「彼女？ああ、アイリですか」

先ほどから黙っているアイリを不思議そうに見るリース嬢。この  
子があなたの命を狙っていたんですよ、とは言えないし、フイーに  
至つては殺されそうになつてているので、どうしたものか。  
よし、見た感じで騙そう。

「僕の秘書ですよ」

「いや、Gランクのあなたがどつちかといふと秘書とかでしょ」

そうかもしねないな。実際、雑務に関しては僕は天才的とされている。

雇いたいと目の前のリース嬢も言つてくれた訳で、その腕は折り紙付きなのだから尚更だ。

「……アシリです。レイが」「迷惑をお掛けします」

おいおい、アシリは僕の保護者かよ！ という突っ込みを一人の時ならしているが、リース嬢達の前では出来ない。レイと言つおつさんは常に自分のペース、流されたりはしないのだ。でも僕は何か言いたい。でもなんて言えば良いのか解らない。

と、僕が悶々としている間に女性陣は自己紹介を終えていた。

「で、あたし達と一緒に行かない？ どうせ同じ場所に行くんでしょ」

「そうですよ。レイさんなら良いですよ」

「そうですか？ 僕なんかで良ければ、」「一緒にさせてもらいますが

って言つても、実はあんまり乗り気じゃない。

僕は信用を落とさないために行くしかないが、二人には出来れば二ルベリア皇国には行かないでほしい。何か嫌な予感がしている。そこで、僕はニコリと笑つて「言つた。

「昔騙した女の子の責任を取りに行く僕でよければ」

リース嬢の顔が笑顔で凍り付いた。フリーは驚いた顔をしている。

アイリは僕をちらりと一瞥し、また視線を外した。

「えっと、その[冗談ですよね?」

三人を代表したように言つづー ス嬢に、はははっと笑い飛ばした。  
笑い飛ばして、何も言わなかつた。

沈黙は物語る、「ごめん真実、と。

アオイからの依頼なら、あながち間違つちゃいないんだよな。と  
いうか、僕は基本的に皆最初は騙してゐる。そういう意味では、リー  
ス嬢達も未だ騙され続けていると言つていい。

「あんた、責任取るとか意外と甲斐性あるのね」

「ちょっと、フイーなに言つてゐるの!？」

大陸東部に位置するアイカシア国、その首都であるアカシアは港を有する都市だ。港があるため流通が激しく、著しい発展が見られた。

といつのは置いておいて、僕は宵の口、港で仲間に会っていた。リース嬢達は、『ちよつと考え方させてください』と言つて、屋敷に戻つて行つた。うん、それで良い。で、アイリは付いて来ていた。付かず離れずである。

僕達は黒のローブに身を包みフードを深く被つて、港で待ち合わせをしていた。

「アイリ、別に付いてこなくても良かつたんだぞ？」今日はアポを取るぞナゾつたんぞから。

「……あほ？」

知らない単語に首を傾げるアイリ。秘書みたいな冷静な対応ではない、子供みたいな可愛らしい仕草にきゅんと来た。

短い金髪と相まっていかにも海の男と言う雰囲気を出している。男は僕に気付くと、手を振りながら駆け寄つて来て、肩をばしばし叩いた。

「久し振りだなマ……、ごほん、レイ！」

「久し振りだね、サガリ。一年振りだけど、相変わらずだ。それと、大声じやなれば僕の名前を呼んでも良いよ」

そう言ひて、僕はちひつとフードの下から黒髪を覗かせる。といふか、身長で解れよ。

「いや、遠慮しておくれ。俺は声がでかいからな。しかし、お前は変わつてゐるようで変わつてないな」

「まあね。売り上げは上々かい？」

「当たり前だ。本当、お前の知識はすげえな。バレないようにするのは結構難しいが、その労力が報われる収益だ」

ニッと笑みを浮かべるサガリ。

彼には、僕が発明した技術の実験台になつてもらつてゐる。本人は気付いていないようだが、といつても、安全は確信しているので問題はない。

万が一事故を起こしても、ちょっと船が木つ端みじんになるだけだ。問題ない。

「急な話だけど明日、ニルベリア皇国に行く事になつた。船出せる？」

「ニルベリア？ なんだつてまたそんな田舎に……隣の彼女と旅行か？」

にやにやと笑みを浮かべるサガリは、レイの知り合いだと思つ。類は友を呼ぶんだ。

しかし、特に変な反応はしない所を見ると、ニルベリア皇国で何かが起こると言つ訳ではないのか？

「違うよ。そんな事言つたらアイリが怒??」

「そうです、旅行です」

僕は冗談はやめてくれ、と肩を竦めようとしたが台詞は遮られ、とん、と微かな衝撃が伝わつて來た。

アイリが、僕の腕に絡み付いて來た。ちょっと、胸が当たつてます

よ。

「はははっ、さすがだな。良いぜ？ 快速で飛ばしてやるよ」

「何がさすがなんだよ。……まあ、よろしく頼むよ。つと、明日は僕、レイの格好で来るからよろしく」

「解った。そん時はあいつの人格で話してくれよ」

そう言って手を振り、サガリは自分の船へと戻っていた。彼は港に船を泊めていても自分の船の部屋、船長室で寝る。なんでも、大切な物があるとか。

サガリは元々レイの知り合いで、レイと一緒にいた時に知り合つた。レイと一緒にいて船旅をするときは、必ずと言っていい程顔を合わせていた仲だ。といっても、レイが死んで以来、顔を合わせる機会は減つてしまつたが。

レイの人格で話、ね。

僕の魔法は、故人を愚弄していると言われても仕方がないな。

宿への帰り際、リース嬢の屋敷に寄つてみた。勿論、黒のロープは脱いでレイの姿になつてゐる。ロープを着て行つたら、即不審者扱いで逮捕、そして実刑になりそうだ。

数日で変わるはずもないが、相変わらず豪邸だった（フリーの魔術実験が失敗、なんて事があれば変わるか）。前世の学校くらいの大きさだ。敷地も建物も。

侵入を困難にするための先の尖つた柵、敷地内を覗かれないための木々。ライオンのような彫像がある門、その先に広がる石畳と噴水。右手に庭園、左手に芝生。落ち着いた印象を与える白い三階建ての屋敷、テラスが印象的。

僕も将来、こんな屋敷に住みたいな。いや、やっぱり城にしよう

かな。魔王だし、屋敷は別荘と言つ事で。いやいや、そこまで贅沢  
しちゃ悪いか。

などと考へながら、僕はフュリアス家のメイドさんに連れられて  
屋敷の前に立つていた。そのメイドさんも今は屋敷にリース嬢か力  
イルを呼びに行つてゐる。

言伝でも良かつたのだが、昼間の事を考へると、それはまずいん  
じやないかなと思つた次第、わざわざ面会を求めた。

一人を二ルベリア皇国へ行かせないためにあんな事を言つたのだが、よく考へてみれば、国に呼ばれておいて行かないと言つ返答は無理だろう。

とりあえず、明日二ルベリア皇国に向かうと、機会があれば誤  
解を解いておこうかなと思つていた。

のだが、

「やあ。久し振りと言つ程でもないが、久し振りだね」  
「……そうですね、カイル」

出て来たのはカイルだつた。ゆつたりとしたバスローブに身を包  
み、いかにも金持ちといった雰囲気だが、不思議と気に触りはしな  
かつた。

「上がつて行つて、と言つてもすぐ帰るんだろ?」  
「ええ。ちょっとリース嬢達に伝えたい事があるだけですから

ドアを半分程開いて、手で支えつつドアに身体を預けるカイル。

「昼間の事なら、別に何も言わなくていいよ  
「はい?」

カイルの口からその話が出るとは考へておらず、思わず聞き返し

てしまつた。そんな僕の様子が可笑しかつたのか、カイルは笑いを堪えていた。

なんだか、カイルの前では僕も調子が狂うな。お互ひ様かもしけないが。

「いやね、夕食の時に聞いたんだよ。やけに機嫌が悪いと思つていたけど、まさかそんな話だとは思わなかつたよ」

「リース嬢はなんと?」

「僕にその話をした後、『レイさんがそんな人だとは思いませんでした! もうつー!』って感じだったよ。で、フィー君が『そつかな? 見たまんまじやない?』って言つてたかな」

おいカイル、何も言わなくていいよつて、まさか……。

「で、私が『それつて唯單に、昔世話になつた女の子の頼みを聞きに行く、つて意味なんじやないかい?』って言つたんだけど……図星みたいだね」

「……感服ですよ。本当、あなたに嘘は付いても意味がない。面白い冗談も詰まらなくなつてしまひますね」

僕は肩を竦めるしかなかつた。

いやはや、まさか話を聞いただけのカイルに見破られるとは。まあ、結果オーライだ。僕の冗談は意味を無くしていたんだから。

「お察しの通り、昔に知り合つた女の子の頼みを聞きに行くんですよ。あくまで予想ですがね。騙したと言つのも、僕はこんな性格ですからね、しょっちゅう嘘をついてますから」

むしろ僕は嘘で構成されていると言つても良い。

仮想人格は関係なく、魔法で自分の存在を偽つているのだから。

「では、リース嬢達に伝えてください。明日の朝に僕らはニルベリア皇国に発つので、日の出に港で待っていてくれれば行き違いにはならないのでは、と」

「それって、かなりいい加減じやないか？」

苦笑するカイルに、僕は微笑む。

そうだよ、これってかなり意地悪い伝言だよ。

「ニルベリア皇国行きの船なら、転覆しても気にならない程度出でいますからね。僕と一緒に行く理由らしい理由もありませんし、今回一件で少なからず不快な想いもされているでしょうから。会えたる一緒に行く、程度で良いでしょう」

「解った。一字一句、間違いなく伝わるよ」

最後の言い回しが少しばかり気になつたが、僕はそれではと別れた。

石畳を踏みながら門へと向かう僕に、今まで一緒にいたにも関わらず、忘れるくらい静かにしていたアイリが話しかけて來た。

「……私の事は、はなさないんですか？」

「話さないよ。そんな事をして、一体誰が幸せになれる？」

暗殺者は行方不明、それで良いのだ。

アイリが罪として受け止めるのなら、罪悪感に苛まれると言つのなら、カイルがガイラスの復讐をしたい、いかなる罪人も法によつて裁くべきだ、というのなら僕は眞実を話そう。

だが、アイリは罪には感じていない。そういう感情が抜け落ちてしまつていて。

カイルが何故人氣があるのか、それは人の感情をも理解出来るか

らだ。ただ単純に法に乗つ取つた裁きをするのではなく、人の心を考えて裁きを下す。彼の目は魔法のように嘘を見破る。犯人に更正の余地がなければばつさり切り落とすし、それが見られれば刑を軽くしたりもするのだ。勿論、遺族なんかの気持ちも考えて。

前世であれば、きっと裁判長としては失格だろうが、そのシステム 자체が深く浸透していないこの世界では問題ない。いつかは問題になるかもしだれないが。

そんなカイルならば、アイリを裁くなどとは言わないだろう。彼女を裁いた所で、何一つ報われる物はないのだから。

宿に戻り、僕はレイの姿から戻る。相変わらず、部屋には月明かりしかない。

「はあ……」

魔法は使い続けていても一向に疲れないが、僕は恐ろしいのだ。自分の姿を忘れてしまうのが。父さんと母さんの息子である僕が消え去ってしまうのが、怖いのだ。

「……震えますよ」

アイリが僕の手を握つて、そう言った。

あれ、本当だ。震えてやんの、情けないな。

と、僕はベッドに押し倒された。勿論、アイリによつて。ちょっと、胸が当たつて——もういいや。確信犯だろ、当てるんだろ？

本当、アイリの考えている事はよく分からぬ。くつづいて來たり、一向に近づかなかつたり遠ざけたり。

「……私、嬉しかったです」

何が？ なんて野暮な事は聞けない。

聞かない代わりに、沈黙と共に頭を撫でてあげる。

「……私の事、はなさないと言つてくれて、嬉しかったです」

「うん。話さないよ。それでアイリは幸せでいられるか？」

「はい。…………だから、はなさないでくださいよ？」

そう言つと、ぎゅっと僕を抱きしめてくるアイリ。

まるで僕の温もりが、どこかに行つてしまふんじゃないかと不安  
げで、離さないと言わんばかりに。小さいながらも小刻みな鼓動が  
僕に伝わって来る。

「話さないよ。……いや、離せないよ」

一度失つて、再び手に入れた物は、失う恐怖とその心地よさを知  
つてゐる分だけ、手放しづらい。

だから、現状維持。一線は越えるつもりはない。

柔らかな感触を強く押し当たられて、僕はふと思つた。

…………もしかして、アイリは僕に眞実を『話さないで』じゃなくて、  
私を『離さないで』って言つていたのか？

…………可愛いな。

レイが帰つて行くのを見送り、私はドアを閉じた。

本当、こつばれるかヒヤヒヤしていた。それはそれで面白そうだったが、こちらの方がもつと面白そうだ。

「ほらね？ 一人が考える程、彼は不誠実な人間じゃないよ？」

私はドアの裏側に隠れていた、もとい隠していたリースとフィー君に笑みを見せる。ほらね、私に偽りは効かないのだ。

「……レイさん」「レイ……」

と、二人とも言葉を無くしていた。だが、これは答えを聞くまでもないな。

「じゃあ一人とも、早く寝なさい。早起きは三文の得と言つよ」

彼の捻くれた性格からすると……、まあ、私は行けないからどうでもいいか。

しかし、彼は本当に面白い。

いつか、本当の姿で会いに来てもらいたい物だな。  
そもそもそんなに遠い話じやないだろう。

少々？？いや、随分と彼は警戒心が薄い。どうでもいいと思つているのかもしれない。でも、人の家の前でどんなびっくりショーやしてくれているんだ。

同じ魔法使いとして、それには文句を言いたい。

「お一人とも、来たんですか？」

「はあ……、はあ……、何を、驚いてるのよ」

「そうですよ！ レイさんが言つたんじゃないですか！ 日の出に

港と！」

そう言えばそうだけ。しかし、あの言い方なら普通に朝に来ると思つたんだけどな……。

今、丁度日が昇り始めた。現在の時刻、六時少し前。

息を切らしたフリーと、腰に手を当てて怒り気味のリース嬢がいた。

僕の策略としては、胡散臭いおっさんの言つ事は真に受けず、リース嬢達は八時くらいに港に来るんじゃないかな、と思っていた。漁に出る訳でもないのに出港が日の出、それは異常である。

朝も過ぎた頃に来て、ははは、と日の出に港に来ていたリース嬢達の無知を笑う、それが仮想人格 の解答だつた。

が、生憎そういう訳にも行かない理由がある。僕らがこれから乗る船は、衆目に曝すには躊躇する所がある。それでも人を小馬鹿にする選択を促すレイの人格は、少々破綻しているように思えた。だからあのおっさんは……。

「おっ、今回は一人も女増やしたのかよレイ

と、サガリが船、トレジャー・ホープ号から降りて來た。お察しの通り、こいつは元海賊だ。海賊は海賊でも、財宝を探して世界各地を回っていたからトレジャーハンターに近い。そして行く先々で食

い逃げをして悪名を轟かせていた。勿論、食い逃げのときの台詞は

『宝を見つけた時に払う』だ。

悲しいかな、宝を見つけてしまったサガリは律儀にもそれを売つぱらつて、世界各地の飲み食い屋に金を払いに行つたのだ。そして、それでも足りなかつた分を今の船問屋で稼いでいる。僕の入れ知恵のおかげで、借金はなくなつたはずだ。

「羨ましいですか？ 分けては上げませんよ？」

「誰があんたの女だ！」

「それはちょっと……」

「…………」

上から僕、フィー、リース嬢、アイリの反応だ。

照れもなれば狼狽もしない、完全に僕は眼中にもなかつた。

一頻り冗談を交わして、僕らはトレジャー・ホープ号に乗り込んだ。

出港からしばらく、僕は船長室でサガリと今までの事を話していた。

甲板を見下ろせる位置にある船長室は、この船の中で一番豪華な部屋だ。ニルベリア皇国で購入したと言つ漆塗りの机、帝国の貴族御用達しの家具屋のふかふかの椅子、戸棚には歴史を感じさせる古書が大量に揃えられている。壁には胡散臭い宝の地図らしき物があり、燭台なんかちらほら見えた。

おっさんらしく、昔話に花を咲かせた。おっさんと言つても、三十代だが。

サガリとの話が一段落し、リース嬢達の様子を見に僕は甲板へと出る。海の風は冷たく、僕??といつもレイの赤毛を微かに揺らす。

海しか見るものがなくなり若干飽きて来ているであつた。フイーが、首を傾げていた。

「……船って、こんなに揺れないものなの？」  
「いえ、もっと揺れると思いますが……」

この船は今、全く揺れていない。だから酔わない。  
出港当時はそこそこ揺れていだが、港を出てからは全く揺れていない。

引き籠りと温室育ちには、この船の異常さは解らないうつだった。  
だからこそ、僕は一人にも乗れる機会を与えたのだが。

アイカシア国首都アカシアから出発し、ニルベリア皇国の首都シ  
ミヤに到着するには、およそ普通の船ならば十日間かかる。けれ  
ど、この船の速度なら三日もあれば着くだろう。

マストが風に揺られている。ピンと張られており、マストは旗  
のようにたなびいていた。勿論、船が進む速度で起こつた風に。  
フイーが何かに感づいたのか、甲板から海を見ながら僕に尋ねて  
来た。

「ねえレイ、魔力を感じるんだけど、何か知らない？」  
「知りませんよ。船の事なら、サガリに聞いてください。尻尾振つ  
てお願いすれば彼なら答えてくれますよ」

悪いなサガリ。僕はもう憲りてるんだ。フイーは知りたい事があ  
れば本当に尻尾振るぞ、多分。  
サガリを売つて、僕は自分の船室へ逃げる。

船は、波を立てず滑るように海を突き進んでいた。

この船の動力は帆に受ける風でなければ、スクリューでもない。魔石が動力となっている。もつとも、巨大で高価な魔石を使っている訳ではない。

魔石は希少な物だが、それは大きい物だけだ。

砂粒サイズの魔石は全くと言つていいい程価値がない。なにせ、地球で砂鉄を集めるように、場所が場所ならそこら中に落ちている。さらに僕の持つている特殊な石があればそれこそ磁石に吸い寄せられるよう簡単に集まる。小さくとも効果があれば砂金のように採取されるかもしれないが、魔術に使えない微弱な魔力しか放出しないので道端に転がっているのだ。

無理にその魔力で魔術を行使しようとすれば、例えば水を生み出す魔術だとして、雀の涙程度の水滴が出来れば良い方だ。だがおそらくは、水蒸気くらいだろうか。それを生み出して、その形状や位置を維持するために魔力はずっと使われ続ける。それでは何の役にも立たない。

尤も、僕としてはそれはそれで加湿器になるんじゃないかと考えているが。

#### 閑話休題。

さらに魔石は铸造するような事も困難で、砂粒の魔石を集めて一つの小石程の魔石にするのは、普通に買った方が安く上がる。

そのため、砂粒サイズの魔石は精々子供の玩具としてしか扱われず、実は身近な所に転がっている。僕にしてみれば、宝が道端に転がっているような物だった。

幼少期から僕は魔石に興味を持つていた。

なにせ、反永久的に純粹なエネルギーを生み出す物質だ。これを研究すれば、化石燃料を使った地球の二の舞は避けられる。環境問題など、資源をエネルギーに変えるために生まれた問題だ。純粹に

エネルギーを放出してくれる魔石があれば関係ない。

そんな考えがあり、僕は無駄に放置されている砂粒サイズの魔石を使って、子供の頃から研究していた。その研究成果の一部が、この船に使われている。

魔石は魔力を際限なく生み出す物だ。使えば使う程効力が失わる魔宝石と違い、魔石は絶対に一定の魔力を生み出せる。魔力の放出量は魔石の大きさに比例するが、人の手で制御すれば放出量を抑える事も出来る。そのため、サイズの大きな魔石があれば小さな魔石は必要ない、小さなサイズの魔石の価値が下がると言つことになつたのだろう。小さくとも魔石は魔石だと言つのに。

純粹なエネルギーというのは、力学的エネルギーのみならず、光エネルギー、熱エネルギーなどと言つた要素も含んでいる。

話が逸れた。船の話をしよう。

「この船には竜骨はない。それどころか、クジラのお腹みたいな曲線を描いてすらもない。船底は桶のように平で、海との接地面積を広く取っている。

そんなこの船の底には、砂粒サイズの魔石がびっしりと鏽められている。船を浮かせ、波や水との接触で減速しないようにするためだ。

船底に鏽められた魔石の生み出す魔力は、重力に相反する純粹な上向きの力としてのみ使用している。これにより、船が水面から下に沈まないようになつていて。

これでは前に進む力がないので、船のお尻に一つ程見た目は樽、中身はジェットエンジンを組み込ませてもらつていて。ジェットエンジンと言つても、ちょっとばかり僕の秘策とも呼べる魔石を使つただけで、ただ単純に進行方向、船首に向かつて推進力を生み出しているだけだ。

イメージとしては、風呂に桶を浮かせて、それを手で滑るように

進める感じだ。ただ手で押すと、桶が波を生み出し、そして波にぶつかって減速する。だが、手で進行方向に押し続ければ波は起こらず、起こったとしても波に乗り減速しない。

これらの操作は全て船長のサガリが行なつており、実質この船は彼一人いれば動くと言つ物だた。だが、料理の腕が壊滅的、天気を予測するのが苦手、地図も読めないというサガリが一人で船旅など出来るはずもなかつた。といつも、嫁さんに許してもらえたようだ。

バゴン、と扉が開け放たれ、フリーが突入して來た。そして、

「レイ！ やつぱりあんたが作つたんでしょ！」

駆け寄つてびしつと僕に指を突きつけるフリー。犯人はお前だ！  
みたいな。見れば、ニヤニヤと笑いながらサガリが逃げて行く所だつた。

げつ、サガリの奴、僕を売りやがつたな。妻子持ちのくせに。  
…これは関係ないか。嫁さんに言いつけるぞ！ ……何をだらう。  
あの様子を見る限り、フリーに尻尾を振つてもうつたようには見えなかつた。

「やれやれ、バレてしましましたか……」  
「教えなさい！」

むむつ、随分と高圧的な物言いだな。躾が必要かな？

「そうですね……、では二回りつてワンと言つてくれたら良いですよ？」

「えー？」

女の子に向こうとしているんだか、僕は。  
そして何を逡巡しているのだ、フリー。

「……うう」

フリーは琥珀色の大きな瞳に薄く涙をためて、僕を上目遣い。も  
の言いたげに少し尖らせている薄桃色の唇が妖艶。波風に揺られる  
短い茶髪を、思わず撫でたくなつた。否、愛でたくなつた。  
くそ、これは確信犯か？ それとも天然か？ どちらにしても、  
僕にはダメージがかすぎる。可愛い物好きな僕には、少々厳しい。  
僕はわざとらしく頭に手を当てる。

「……少し風に当たつてきます」

「逃げるの？」

「酔つただけです。…………君の瞳に」

「…………」

言つた瞬間、フリーは完全沈黙。その後、無言で僕を殴り飛ばし  
て逃走して行つた。これに憲りたら僕に媚を売るのは止めるんだな。  
うむ、こういう時の仮想人格は頼りになる。取り返しのつかない  
事をしている気もするが。

「……」

ちなみに、そんなやり取りをアイリはジト目でずっと見ていた。  
何も言わず、我関せずと。

船の理論は適当です。  
指摘、意見があればどうぞお願いします。

「レイさん！ フィーに何をしたんですか！？」

「バタン！」と再び扉が開け放たれた。これも半ば予想出来ていた事で、僕は優雅に笑みを浮かべて襲撃者、もといリース嬢を出迎えた。

「どうされたんですか、リース嬢。他人の部屋にノックもなしとは、淑女にあるまじき振る舞いですよ？」

「あっ！ ……すいません」

やつてしまつたと口元に手を当てて、照れたのか俯くリース嬢。早速リース嬢のペースを崩す。さて、どうするかな。

「フィーですか？ 彼女がどうかしましたか？」

「そうですよ！ やつき甲板に戻つて来たと思つたら、ぼーっと甲板をうろついているんですよ。レイさん、何かしませんでしたか？」

すつとぼけてみた僕だが、もはや確信しているように言葉を紡ぐリース嬢。

どうして僕に直結するんだか。……口頭の行いの成果か。

「アイリちゃん、何か知りませんか？」

「……先ほどまで会話されていましたよ。何やら人の羞恥心を煽る事をおつしゃっていました」

「ほら、やつぱりレイさんが何かしたのが原因じゃないですか！」

やばい、押され気味だ。そしてアイリ、何を言つているんだ君は。

君は後でお仕置きが必要かな。

「ぼーっと甲板をうろついているだけなのでしょうか。問題ないのでは？」

「時折変な笑顔を見せるんですよ！？」

あつ、それは結構な問題だ。何もないのに突然笑い出すとか、あまり近くにいてほしくないかも。

「仕方ありませんね。では責任を取つてくれるてしまでしょうか」

「……やっぱりレイさんが何かしたんですね」

部屋にジト目の女の子が一人増えた。

居心地が悪いので、僕は甲板に逃げ出し——もとい、フイーの機嫌伺いをしに行つた。

「フイー、ちょっと良いですか？」

「ひつ！……な、何」

声をかけただけで引かれた。肩を叩こうとした手が所在無さげに宙を彷徨う。あれ？ これって、取りつべ鳩もないと言つ奴では？

「あ、あたしに何か用？」

いや、君に用があつて僕に会いに来たんじゃなかつたか？ まあ、今は用があるのは僕だけ。

「先ほどの事……少々冗談が過ぎました。まさかフイーがここまで気に病むとは思ひませんでした。反省しています」

「ふえつ！？」

ぺこりと頭を下げる僕に、あたふたと慌てるフイー。それを背後からこっそり（本人達はこっそりかもしれないが僕にはバレバレで）伺っているリース嬢とアイリ。告白のシーンでもないのに、何を拳を握りしめているんだか。

だって、

「……あ、つそう。べ、別に！ 別にあんたの言うことなんてこれっぽっちも嬉しくないんだからね！ あたしが気に病む？ 何勘違いしてんのよおっさん！」

右ストレーントが僕の腹を捕えた。少し痛かった。

「用はそれだけ？ それならさつとどりとか行つて。あんたの顔見てるトムカムカする」「それだけで良いですか？」「は？ 何言つてるの？ 意味解らない」「では、それだけです。魔術師殿の貴重なお時間を割いていただきすいませんでした」

そう言つて僕は踵を返す。うむ、コレで清算完了かな。

「……待つて！」

と、何時ぞやのように掴まれる僕の袖。つんのめる僕。先ほど謝ったばかり故、僕は怒れない。

「どうかしましたか？」

若干いらっしゃしながら、しかし笑顔を作つて僕は言った。

「……小腹が空いたから、何か作つて？」

小首を傾げてえくぼを作つて、フイーはそんなことを言った。  
僕は笑つて答えた。

「嫌です」

どうやら、フイーは天然で僕をたらし込めようとする人間だった。

「……いただきます」

船の食堂。そこで田の前に広がるのは、料理に近い何かだ。間違つても料理とは呼べまい。それに対峙するのは、苦笑いを浮かべているサガリ、胡散臭い笑みを若干引きつけた僕、女子の料理に一喜一憂したトレジャー・ホープ号の船員達だ。

「どうぞ、召し上がってください」

「食べてみれば良いじゃない……」

「……どうぞ」

笑顔のリース嬢が鬼畜に見え、ぶつきらひつのフイーが外道に見え、無愛想なアイリが小悪魔に見えた。

何がどうしてこうなったのか、僕は一から説明せねばなるまい。

即時料理を拒んだ僕は、隠れていたリース嬢にも参戦されて窮地に立たされた。

「レイさん、ここは先ほどのお詫びとしてぜひー。」

とかなんとか。

この船には料理人がいるので、僕を作ると言つのは彼に申し訳ないといふのと、正直鞄から取り出すならまだしも、自分で作るのは面倒だった。

「嫌ですよ。別にこの旅は依頼ではないですし、僕が料理する必要性はないですね。……お金を払つて、依頼してくださるのでしたら作りますが」

「仲間じゃないんですか？」

「仲間ならば尚更、当番制ではないですか？」

その時、僕は料理を断るのに必死で、考えていなかつた。

役割分担、適材適所。

「じゃあ、僕達が作ればレイさんも作ってくれますか？ 当番制なんですよね？」

「いえいえ、この船には料理人の方がおりますから、その必要性はないでしょ？」

「旅費を払つてないんです。料理くらい、僕達で賄いましょう！」

そうだつた。僕は知り合いであるサガリに金を払うなどとは考えず、タダでこの船に乗せてもらつてはいる。燃料費など無く、精々食費が少し増える程度問題ないだろうと考えていたが、知り合いでもなんでもない彼女達に取つては結構心苦しい所があるのかもしけな

い。

タダより高い物はないといつし、さつとと借りを返しておくか。  
それならば料理くらいならば作るか。

そんな甘い考えで、僕はサガリと料理人に交渉を行ない、料理に  
関しては僕たちが受け持つようになった。

その結果がこれだよ。

丁度昼食時間と言つ事もあり、早速三人が料理を作ってくれた。  
アイリにも作つてもらつたのは、今後の事も考えてだつた。  
そして出来上がつたのが見た目だけならマトモな料理が一品、見  
た目も怪しい料理が一品。

立ち込める匂いや見た目だけで、既に一章程放心状態だ。

「参考までに聞きますが、三人とも、味見はされましたか？」  
「そんなはしたない事出来ません」  
「あたしの料理は完璧よ」  
「……」

はい、絶望的ですね。

覚悟を決め、僕が先導して箸を進める。ちなみに、マイ箸である。  
まずリース嬢の料理。

ロールキャベツだ。見た目は良い。後続の一品がとんでもないの  
で、それに比べればどんな料理も見た目は良く感じる。  
パクリ、と一口頂き咀嚼する。それを見た船員達が次々と料理に  
手を出し、そして——。

「げふつ」

「大丈夫かっ！？」

撃沈した。サガリはコレ幸いと、そんな船員達を生き残ったメンバーと共に連れ出した——もとい、逃げ出した。

開始早々、戦線には僕一人になってしまった訳である。

「リース嬢、今のを見られて何か思う所は？　ちなみに僕の感想は、味が薄くよく噛まなければ器皿に詰まる、って感じですね」「……すいません。私、料理した事が無くて……」

両手で顔を隠して落ち込むリース嬢。誰にでも欠点はあるのだ。しかし……、とんでもない交渉を行なつてしまつたぞ僕。これら二ルベリア皇国に着くまで、ずっと料理は僕らが受け持つと言つてしまつたんだ。

やばい、残りの二人が使い物にならなければ、僕がずっと料理をするはめになりそうだ。トレジャーホープ号の船員に頼み込まれて。

「では……、次にフリーですか」「……無理して食べなくともいいわよ？」

リースの惨状を見て、目を逸らしてそんな事をつづつフリー。おいおい、思い当たる節があるのか？

「では……、とにかく、これは何ですか？」

僕の目の前にあるのは、手のひらサイズで紫色のぶよぶよした物体だ。

おおよそ料理の色じゃないし、触感でもない。どこの工作の時間に作ったんだ、これ。いや、なんかの召還にでも失敗したような物体だ。

「……ゼリー」

驚いた。見たまんまだった。いや、ゼリーならあり得るか。うん、信用は出来ないが、少しばかり安心した。これで田玉焼きとか言い出した日には、僕は天変地異の前触れと取るだろうよ。うん、なんで薄っぺらいかな、これ。そしてチヨイスが可笑しくないかな？

「……いただきます」

さすがに箸じゃ食べられないと判断し、スプーンで掬う。掬おうとしたとき、皿の上をスライムのように逃げたが、一応掬えた。一口頂く。うむ、これは……。

「フイー、何か薬品を入れましたね？」

「ええ。固めるために、ちょっと色々」

「ちょっと色々の所が非常に気になりますが、あえて聞かないで起きますよ。ただ、あまり人に食べさせらる物ではないですね」

プロテインやら風邪薬やら、薬と名のつくもの全てを含ませたような味だ。苦みや甘みのみならず、独特的の薬品臭さがあつた。プールの匂い、もとい塩素臭がしないだけましと思おう。

「で、アイリのは……ハンバーグですか」

「……まあ」

これが唯一の救いになるか、それとも絶望へたたき落とすものになるか、僕はまだ知らない。ただ、見た目と香りは普通だった。箸でハンバーグ（暫定）を割ると、透明な肉汁が溢れる。デミグラスソースの匂いも可笑しくはない。

「……いただきます」

一口頂き——、僕は頭を抱えた。食べれるレベルの料理だ。だがハンバーグ（暫定）はハンバーグでも問題ないが、ソースがやばい。

「……アイリ、このソース、何を使いました？」

「……ワイン」

煮詰めてないだろ、それ。アルコールが全然飛んでない。ソースが完成してから、それにワインを付け加えた感じだ。その後、煮詰めていない。

毎日中から酔わせる気か？ 酔わせてどうじょうつて言つんだよ。

「三人とも、ちょっとここで待つててください」

「えつ……」

「良いから、動かないでここで待つていてください」

僕は三人を置いて食堂から出て、自分の船室に戻り、鞄から紙に包まれたハンバーガーを取り出した。それをバスケットに入れ、トレジャー・ホープ号の皆に渡して行く。お詫びだ。

食堂に戻り、三人にもそれを渡す。

「これが普通の料理というものです。味をしつかりと覚えておいてくださいね。間違つても！ 今自分で作つた料理が普通だと思わないでください」

三人は縮こまつて申し訳なさそうにハンバーガーを食し始めた。かぶりついて食べると言うのにリース嬢が戸惑いを見せていたが、他の二人が全く氣にもしていなかつたので、その後はハムスターが

種を齧るよつに小口で食べていた。

で、僕は三人の料理を一人で食べ続けた。残すわけにはいかなかつた。

ちなみに、三人が食べているのは中華風チキンのハンバーガーだ。厚さが十センチ程で、甘みのある唐揚げと特製のマヨネーズが絡まり絶妙な味を生み出す。触感は、さくさくふんわりのパンと、新鮮なレタスとジューシーな唐揚げの三重奏。

それを見ながら僕は三人の料理をもくもくと食していた。だつて、僕以外に誰がこれを食べられると言うんだか。

僕がこの料理とも呼べない何かを食せるのは、魔法を使っているからである。

食べた物ならば、どんなものだろうと分解し吸収出来ると言う魔法だ。特に取り立てて説明する事はない。口から入った物ならば、吐き気を催す事も無く分解して吸収出来るという魔法だ。手で触れたものも吸収出来れば便利なのが、それは仕方がない。

「…………

「……あの、無理に食べなくとも  
の、残してもいいわよ、別に」

「…………

無言で食してる僕に、三人は申し訳なさそうに顔を俯けた。  
が、残すなんてとんでもない。

「……僕が料理を作る際に気をつけている事は、どんな料理にも愛情を入れると言う事です」

リース嬢とフィーの二人がどん引いた。何せ今、おっさんの愛情たっぷりの料理を食べている訳だから。アイリは特に反応もしなかつた。

「食べて美味しいと言つても良いたい、喜んでも良いたいという想  
いが料理を美味しくするんですよ」

だから味見は大切だ。自分で作ったのだ、苦労した分だけ美味しい  
ければその喜びも大きい。誰かに食べてもらつて喜んでもらうより  
も、まずは自分を喜ばせる事から始めるべきだ。

「……あまり美味しいとは言えませんが、三人も何か想いを込めて  
この料理を作ったのでしょうか？ その想いを捨てるような事、僕には  
出来ませんよ」

ああ恥ずかしい。でも、こうでも言わなければ料理が改善される  
ようにも思えない。こう言つた所で、料理なんて栄養が取れれば良  
いと思つてゐる人には関係ない話だけど。

その後、僕は無言で食べ進め、全て食べ終えると船室に戻つて眠  
りについた。食つてすぐ寝たら太るとか、そんなの関係ない。いく  
ら吸収出来るとはい、腹の大きさは変わらない。腹が苦しかつた。

それから二ルベリア皇国に着くまでの一日間、僕とトレジャーホ  
ーム号の料理人による料理教室が開かれ、なんとか三人とも、人に  
振る舞えるくらいのレベルには達した。まあ、辺りを見ても海しか  
ないし、やることがそれしかなかつたのが大きい。

一番先に上達したのはアイリだつた。アルコールを使うのを止め  
させるだけで十分食べれる料理になつたからである。何故アルコー  
ルを使つたがつたのか、それは解らなかつたが。

次に上達したのが、リース嬢。教えれば素直に飲み込み、すぐに

成果を見せてくれた。なんか良いお嫁さんになりそうだ。

難産だつたのがフイー。彼女は栄養を取れば良いじゃない、と

いう典型的な例で、あまり料理に乗り気ではなかつたようだ。それが何か心変わりを見せたのは良かつたが、美味しければいいじゃない=栄養が高ければいいじゃない、という等式が何故か成り立つているようで、薬を混ぜたがると言う狂氣を見せてくれたからである。味と栄養は等式で結べないと解つたので、なんとかなつたが。

「あつ、見えました！ あれがニールベリア皇国ですね！」

出港から一日と半日、ついにニールベリア皇国が見えた。全体的に高い建物のない国で、平屋か一階建ての建物しか存在していない。木造建築が主流であり、僕に言わせれば懐かしい、他の人には田舎臭い雰囲気のある国だ。

首都シミヤの港に降り立ち、別れを告げる。

サガリは商売、リース嬢達は皇居、僕らはちょっと探索（小屋で依頼人と落ち合ひとは言えず）だ。

「では、機会があればまた会いましょう」

「…………」

「…………ふん」

「えつと…………、はい」

上から僕、アイリ、フリー、リース嬢の別れの言葉だった。言葉らしきものを言つたのは僕とリース嬢だけだった。

あれから一日と半日経つた今も、フリーは未だに機嫌を直してくれない。悪口を言つた訳でもないのに、どうしてこう機嫌が悪いんだろう。いや、あれか？ 僕が何も作らなかつたからか？

「フリー、ちょっと良いですか？」

「…………今度は何よ」

「ふすっとした声、きつと僕を睨みつけるフイー。僕が何をしたと言つんだ。ちよつとからかつただけじゃないか。

「これをどうぞ」

「……何よコレ」

僕は握りこぶしサイズの包みをフイーに渡す。ジト目で僕を見るフイー。あれ？ 僕の周りにはそんな田で僕を見る子ばかりじゃないか？

「お菓子です。あの時は何も作りませんでしたから、お詫びに」

中身はクッキーだ。ちなみに、この世界でクッキーはそこそこ高級なお菓子である。

「…………」

無言で口元に笑みを浮かべるフイーを見て、とりあえず「これでいいかなと判断し、また袖を掴まれる前に別れた。

この後、意外な形で再会をすることは知らなかった。

ストーリーの進むペースが遅くはないでしょうか？  
次回から、少しづつ物語が進展すれば良いな……。

「フイー、なんか機嫌が良くなりませんか？」

「そう？ 別にそんな事はないけど？」

皇居に向かいながら、あたし達は話をしていた。

別にあたしは何も変わらない。いつも通りだ。

リースが納得いかない顔をしているけど、あたしは別に機嫌が良くはない。悪くもないだけだ。

「それはそうと、やつきレイさんから何をもらつたんですか？」

「これ？ まだ見てないけど……、お菓子って言つてた」

腰につづり上げていた袋から、先ほどもらつた包みを出して手に乗せる。

「お菓子ですか！？ ……いつ作つたんでしょう。それとも、持つて来ていた？」

「…………どっちにしても、お菓子なんて似合わない男よね」

そう、だからこの包みの中身も、実は別の物なんじゃないかと疑つていて。疑うのは悪いと思つてるけど、言つて事する事全てがなんだか胡散臭い。なのに時たま凄く心に響く事を言つたりする。本当によく分かんない——変なおつさん。

皇居と言つ建物は、四方を壁で囲まれた所にあった。唯一の出入

り口には立派な門があり、ゆつたりとした紺色の服を着て腰に刀を帯びた人達が見張りをしていた。あたしはよく分からぬが、刀とはなかなかに素晴らしい武器らしく、大陸でも人気があつたので知つてゐる。

その人達に身分を証明して、中に案内されると大きな木造建ての平屋が見えた。凄く変わつてると云うか独特だけど、綺麗な建物だ。柱や廊下に使われている木の一本一本が金のように光り輝いている。何か塗料でも塗つているのだろうけど、魔術師のあたしにはそれ以上の事が解る。その木一本一本が何か魔力に似た物を秘めているんだと。それがこの国で使われる『神聖術』の要になる何かかな。

この国には建物に上がるときは靴を脱ぐと言つ風習があるみたいで、あたし達はブーツと靴を脱いだ。足に伝わる木の冷たさとか、靴からの解放感とかで結構気に入つた。

この国で一番偉い人のいる部屋へと案内されるあたし達。その途中で見た庭園は立派な物だつた。中島のある大きな池が広がつていて、その手前には白砂が敷かれている。マツと呼ばれる妙にくねくねした木ともよく合つていた。

そして、その庭が一望出来る部屋に通される。フスマと呼ばれる扉の前で案内人が声を上げた。

「陛下、アイカシア国のリース・フュリアス殿とそのお供のフィオナ・カロリア殿です」

どうやらあたしの本名までも調べられたみたいだ。まあ、この国で一番偉い人に会うのだし、当然と言えば当然か。フリーは愛称だ。

「お通ししなさい」

と、予想外の優しげな声が聞こえた。そしてフスマを開けると、声と良く合つ優しげな男性がいた。あたしはもっと傲慢で高圧的な

人を予想していたので、結構驚いている。

「陛下、お初にお目にかかります。アイカシア国將軍、リース・フュリアスと申します」「……ギルドのフィオナと申します」

リースが挨拶したので、あたしもそれに習つて挨拶する。リースのメンツが掛かっているので、それとなく敬語つぽいことを言つてみる。ギルドの任務として来ていれば敬語なんて使わない。

「遠い所、わざわざありがと。早速で悪いが、私の頼みを聞いてくれないか？」

「はい。私どもで良ければ、何なりと」

あたしは嫌な事は言つよ。と思いながら、リース達の話を適当に聞いていた。

「私の娘が誘拐されそなんだ。そこで護衛を頼みたい」

「誘拐……ですか？」

また護衛か……。あたしにはあんまり向いている仕事じゃないのにな。あたしはこいつ、爆発とか起こして一網打尽にするタイプなんだけど。

「最近、娘の周りで不穏な動きが見える。突然で申し訳ないが、引き受けてくれないか？」

娘？ あたしは正直、この国の事なんてほとんど知らないので何も言えない。リースに言われるままに付いて来ただけなんて、尚更言えない。

「娘さん、巫女のアオイ様ですか？ 巫女の中でも一番の神聖術の使い手だと伺っておりますが」

リースは知っていたようで、それに男の人は頷く。

「……わかりました。私どもで良ければ、精一杯努めさせていただきます」

リースは特に迷う事無く言つてお辞儀をする。あたしもそれに習う。堅苦しいのは苦手だな。その巫女様ともこんな感じは嫌だ。

「ありがとうございます。手だれの男達もいるのだが、娘も年頃の女の子、そういう言つた者達に身辺を護衛させるわけにはいかなくてね。本当に助かる」

頭を下げる國主に少しの意外性を感じる。けれどそれ以上に、子供思いなんだなと思つた。

-----

僕とアイリはニルベリア皇国首都、シミヤを歩いていた。待ち合わせの時刻は夜中であり、少々時間があったのだ。

この国の住人はほぼ黒髪、更に魔王は公式記録上既に死んでいるので、僕が僕で行動出来る国もある。

レイの視点に慣れていたので、僕の視点は少々物が変わつて見える。建物がこんなに高かつたつけとか、人ごみがこんなに大変だったつけとか、……アイリってこんなに近くにいたつけとか。

「アイリ、ちょっと近くないか？」

「……人ごみで離れてしまうと困りますから。私はこの国の事を知りませんので」「

そう言って、アイリは僕と腕を組んでいる。

あれ？なんか違う。僕の知ってるアイリと何かが違う。  
いつものアイリは秘書、付かず離れずの位置にいた。だが今のアイリは言うならば恋人、べつたりと僕にくつづいている。

……本当、よく分からぬ子だ。

夜中、宿を取つてから僕らは夜の街を歩いていた。

陰陽術と呼ばれるニルベリア皇国古来の魔術によって、街には提灯で明かりが保たれている。陰陽術は魔術というよりはシステムに近い。この国には精霊というか靈魂の概念があり、それらに頼む形で術を使っている。

この街の街灯は、彼らに日の光が弱くなつたら灯すように頼んでいる、といった感じだ。こういつ便利な使い方があるから、科学が発展しないのだ。

科学者視点の考え方を持つ魔術師だが、わざわざ自分の価値の下がる万人が使える力を生み出す訳がない。

ところで、

「アイリ、近くないか？」

「……夜は寒いですから

僕に寄り添うアイリ。

そうだね、夜は寒いもんね。僕の胸は凄く熱いけどさ。

それでもアイリの肩を抱く僕がいた。

シミヤの街の外れにある掘建て小屋、そこで依頼人と待ち合わせをしていました。小屋は完全に目張りされ、風どころか光も入らないような建物だった。

というか、光を出さない建物だ。

僕は建物に入る前にレイの姿になる。アイリは付かず離れず、秘書の距離となつた。うむ、時と場所は弁えていいようだ。

「お待ちしておりました。『Gランクの天才』様とお呼びすればよろしいですか？ 私はクロガネと申します」

そう言つて僕を出迎えたのは、初老の武士だった。腰に刀を帯び、和服姿であるからそんな事を言つたが、その物腰は紳士だ。しかし、クロガネとはなんともカッコいい名前だ。以前は名を馳せた武士であろう。

「ええ、あなたが代理人ですね？」  
「……お気付きになられましたか」

僕はそう言つて懐から手紙を取り出し、ひらひらさせる。  
舐めてもらっちゃ困る。これでも僕は魔王なんだ。見る由はあるよ。

「あなたはどうやら信用出来そうですね。では、依頼内容を詳しくお聞かせ願いましょう」

「いえ、私は何も申しません。この手紙を読まなければ、全て理解していくだと存じております」

と、クロガネさんは手紙を懐から取り出す。少々気になるが、僕は素直に受け取りその内容に耳を通す。

「……っ！？」

手紙の内容は衝撃的なもので、そして、僕が動くに値するものだつた。

手紙の内容は長く、そして少なからず個人情報が書かれていたので、簡潔に内容をまとめさせてもらおう。

僕の依頼——それは、『巫女にして御子、アオイの誘拐』だ。

「受けてもらえますか？」

そう尋ねるクロガネさんは、断ることなどあり得ない、と言つてゐるようだった。

「……ふふふ  
「……レイ？」

僕は笑わずにいられなかつた。そんな僕を気味悪そうにアイリが伺つてくる。

そうか、騙されていたのは僕の方だったのか。いやいや、ほぼ嘘の僕なのだから、これで相手と言つべきなのか。

「いいですよ。いえ、僕以上の適任などいないでしょ？」

僕は口元を歪めながら、クロガネさんの目を見てそつ答える。  
クロガネさんの目がきらりと光ったように見えた。

「ただし……」

僕はそこで一度言葉をくぎり、言葉を紡ぐ。  
魔王の姿となつてから。

「これは『Gランクの天才』としてではなく、『魔王』として受け  
入れてもらいますよ」

魔法、『魔の法則』には七つの属性がある。

それは魔法が『悪魔の法術』と呼ばれる事から、七つの大罪の名前で分けられている。魔法が限りなく暴力的な力である事が、罪なといつてもいいからだろう。

そして、本来は一つしか使えない魔法を、七つ使える僕が魔王なのだ。

#### 属性『傲慢』

これは強制力を持つた魔法の属性だ。隸属の首輪に掛かっているのが、これである。逆らうことの出来ない圧倒的な力操るタイプの魔法もこれに分類される。傲慢な態度を取れる魔法。

#### 属性『嫉妬』

これは人体に変化をもたらす魔法の属性。僕の複写魔法がこれに該当する。肉体の変質、能力の変化など、基本的に無い物ねだりの属性。嫉妬し続けないための魔法。

#### 属性『怠惰』

時空関係を操作する魔法の属性だ。時間と言つても思考の加速、体感時間の緩急などの使用者の生きる時間のみの変化で、タイムスリップなどは未だ確認されてはない。未来を見る、過去を見るなどの魔法はありそだが、また、瞬間移動、転移、亜空間操作などもこれに含まれ、僕の鞄がそうだ。時間を有効に使い、怠惰に過ごす魔法。

#### 属性『暴食』

吸収に関係する魔法の属性だ。僕が半ば毒物に近い料理を食べて

無事でいられたのは、これのおかげである。魔術や魔法の吸収が出来るタイプや、記憶や経験、才能などを奪うものもある。生きるために通り越した暴食の魔法。

#### 属性『色欲』

これは人心を操作する魔法の属性だ。感情、記憶などの人格や心を構成する要素を操作する魔法。『傲慢』の強制力と対比するなら、『色欲』は言うならば協力だ。心を乱し、色欲を煽る魔法。

#### 属性『憤怒』

破壊と消失をもたらす魔法の属性。全属性中、最悪かつ最凶の属性だ。魔法だろうが現実だろうが、それをなかつた事に出来る、奇跡を思わせる魔法。そのため使える者の数も少ないが、レイの魔法だ。気に食わない事をぶち壊し、憤怒しないための魔法。

#### 属性『強欲』

これは物体の所有権に効力を及ぼす魔法の属性だ。物質に限らず、生き物にも効力を及ぼす、物の価値が法則に組み込まれた魔法が該当する。欲した者は必ず手に入れる、強欲な者のための魔法。

今回僕が使用するのは、『強欲』の魔法。

奇しくも、かつて僕が言ったお巫山戯は本当になつてしまいそうだ。

「誘拐……ね。今回は騎士としてではなく、怪盗として馳せ参じようか」

「リースさんにフィーさんですね？ 初めまして、アオイと言います。どうぞ自分の部屋のように寬いでください」

アオイは屈託のない笑顔であたし達を出迎えてくれた。  
そりそりセミロングの黒髪、紅白の巫女服。……悔しいかな、  
胸はあたしより大きい。リースと同じくらいかな。あたしと一歳しか  
違わないと言つのに。

「……私、同年代の人とはあまりお喋りする機会がないので、実は  
少し楽しみにしてました」

「緊張感が足りませんよ？」

「そうよ。……でも、少しひらこなら寬いでも良いと想つ」

そんな感じで、畳に腰を下ろして足を伸ばすあたし。そんなあた  
しに若干呆れたような顔を見せるリース。だつたけど、肩を竦めてリ  
ースも腰を下ろした。

アオイに巫女の仕事、主に怪我人の治療があつて、日が沈んでか  
らの出会いだつた。仕事の様子、神聖術を隠れ見たけど、正直よく  
解らなかつた。魔力は確かに感じるが、どうにも魔術とは何か違う  
よつと思える。だから神聖なのかもしれないけど。

夜、少しばかり味気ないけど色々な料理の夕食を頂いた後、あた  
し達はアオイの部屋でお喋りしていた。十六畳の部屋で、三人分の  
布団とタンス、それに燭台が数本の質素な部屋だ。

「何か誘拐で思い当たる節がある？」

「……ええと、特にありません。基本的に私は誰でも面会出来ますし、誰かに恨まれるような出来事はないかと……。すいません、何もお役に立てる情報が無くて」

「いいですよ、アオイは気にしないでください」

あたしの質問に、アオイは申し訳なさそうにする。リースがちゃんとフォローしてくれるので、あたしはづかづかと話を聞ける。

身代金田当ての誘拐は考えづらい。國主の娘を誘拐するのはハイリスクすぎる。警備は厳重、誘拐後もしつこく追われ続ける事になつてしまふ。金が目当ての誘拐なら、貴族を狙つた方が得策。

それならアオイ個人に誘拐される理由があるのかと思つたけど、どうなんだろう。少なくとも金田当ての誘拐じやないと思つ。

「じゃあ……、アオイだけが出来る事とか、何がある?」

「……ええと」

「神聖術はどうなんですか?」

あたしの質問に少し首を傾げて考え込むアオイに、リースが助け舟を出した。

神聖術、それはあるかも知れない。

「……確かに、神聖術は巫女の中では私が一番得意ですが、私でなくとも時間がかかるれば皆同じくらいには出来ます。私だけが……といふのは……ないですね」

動機が全くの不明、か。

相手がアオイを無傷で誘拐したいのか、殺してでも連れ去りたいのかで対策が変わるんだけど、どうしたものかな。  
とりあえず侵入者には死を、でいいかな。

「じゃあ、あたしが一応魔術陣書いておく。入って来た奴を消し炭にする」

「フリー……、それって屋敷にまで飛び火しませんよね？」

「それは少しまずいです……」

そう言って魔術陣を橙色の魔術陣を部屋全体に構築するあたし。リースとアオイが不安げに見つめてくるけど、そんなにあたしは頼りない？

「大丈夫。時間があるから指向性が付けられる」

「戦闘じゃ付けられないんですか！？」

「軽い魔法なら大丈夫。間違つても半焼くらいだし」

「それはちょっと困ります……」

半焼、という言葉にアオイが俯く。

「冗談よ。あたしが間違つ訳ないじゃない。

「ところで……、これ食べる？」

魔術陣を構築し終えたので、一安心。ちょっととした気晴らしに、あたしはおっさんからもらつた包みを出した。

別に、毒味させようつて訳じゃないけど、でも一人で食べるのもまずいかなつていうか……。

あたしがポンと置いた包みを開けて、リースが驚いた顔をした。

「クッキー、ですね」

「フリーさん、良いんですか？ 高級菓子ですよ、これ」

「別に。あと、フリーでいいから。あたしは呼び捨てなんだから」

そう言つとアオイは口元に手を当てて驚く。そして、

「はい、フイー」

笑顔でそう呼んでくれた。

……悪くない。

「では、お茶を入れますね。……クッキーに合つか解りませんが」「いいのよ、どうせおっさんがくれた大したものじゃないから。……毒は入っていないはず。サプライズの何かも入っていないはず。味もいいはず」

「はずばかりですね。……まあ、それに関しても私も何も言えませんけど」「？」

おっさんだから、そんな理由で顔を見合わせて苦笑するあたしとリースに、おっさんの事を知らないアオイが首を傾げた。

毒味はあたしがやる、というつもりであたしがまずクッキー一枚齧る。

「……つー? ……甘い」

瞬間、口の中に広がるバターの濃厚な味。触感はさくっと、そして口の中で溶けて行く生地。表面に砂糖が付いていて、優しい甘さが口に広がった。

「凄く……美味しいです」

「本当ですね!」

リースとアオイが食べて、頬を抑えた。比喩なんかじゃなく、本当に頬が蕩けそうな美味しさ。

……どうしよう。一人で食べれば良かつた。

「これ、どうしたんでしょうか？ 買つて来たにしては随分とサクサクとしてますし、……作つたんでしょうか？」

「あのおっさんが？ 確かに料理には五月蠅かつたし、美味しかつたけど……」

似合わない、とリースと一人で思つた。

「……おっさん？ こんな凄いお菓子を作る人の事ですよね？」

再び首を傾げるアオイ。

そんなアオイにリースがおっさんの事を説明する。

「レイさんって言つ、凄い人……といつか変な人です」

「胡散臭いのよ、あいつ」

「レイ？ レイって、もしかして、『Gランクの天才』ですか！？」

そう言つたあたし達に、飛ぶようにアオイは反応した。  
え？ 知つてるの？

「レイ……、来たんですね」

「アオイ、レイさんの事、知つてるんですか？」

「はい！ 三年前に山賊に攫われた時、助けてもらつたので、恩人  
ですね」

顔を輝かせておっさんのことを語るアオイは、ビートなく誇らしげだつた。

「おー一人はどうしてレイと知り合つたんですか？」

「リースの護衛で」

「レイ……、ちゃんと頑張ってるみたいですね」

頑張ってる？ あれで？ 人を馬鹿にしたような態度よ？  
あたしが知らないおっさんは、もつと酷かつたって事？

「……フイー、なんかちょっと悔しそう。焼きもち？」

「はああ！？ な、何言ってるのヨリース！ ベ、別に悔しいとか、  
そんなんじゃなくてーーって、なんであたしがあんな奴の事を意識  
しなきゃならないのよ……」

あり得ない。あの胡散臭い奴をあたしがーーツ。  
自分でも解るくらい、顔が赤くなっていた。

「そういうリースだつて、この前護衛された時、家で雇いたいとか  
言つてたじやない！」

「あ、あればそういう意味ではないですよ！ ただ、優秀だったか  
ら家で雇おうと……」

「それ！ あたしもそれ！ 気に食わないけど優秀だから、ちょっと  
と気に掛けてるだけ！」

「……お一人とも、意識していられるんですね。レイの事」

「違う……」「

思わず声を揃えて断言してしまった。

だつてあいつ……、胡散臭いし、おっさんだし。

人を馬鹿にした態度取るし、魔術は教えてくれないし……。

料理とか、魔術とかだけ見ればちょっとはーー、本当にちょっと  
は！ いいのかもしれないけど。

でもおっさんはあり得ないわよ！

「そういうアオイだつて、レイさんの話をする時、顔が輝いてましたよ！」

「そりやー。元はと言えば、アオイがそんな事言つかり——」

「ええ。だつて私の初恋の人ですから」

「「？」」

腰を抜かしてしまつた。

あいつ、本当に女つたらじじやない！

「あんな奴のどிが良いのー!?」

「一途な所です」

「それは絶対違ひと思こますー！」

澄ましているアオイに、リースとあたしで騒ぎ立てる。

それ絶対騙されてるわよー！？

現に今もアイリを連れ歩いてるし、ドーには昔騙した女の子の責任を取りに来たつてーー、いや、あれは誤解だつたか。つて、あれ？

「リース、そう言えばおつせんがドーに来たのつてーー」

途端、燭台の火が消えた。

感想・意見・指摘などを励みに、九月までは毎日更新を頑張りたい  
と思います。

僕とアイリは黒のローブを身に纏い、正体が分からぬようにする。怪盗らしく、白のマントでも付ければ良いのかも知れないが、生憎と持ち合わせがない。それに、目立ちたくないし。

アイリが付いて来てくれるのは正直、迷惑だつた。僕一人ならどうぞうと侵入出来るのだが、アイリと一緒にそこを選択せざるを得ない。

アイリの来ているローブは魔法具のようで、自分が相手がフードを捲らない限り、正体が分からなくなる代物だ。僕のは、自分で作ったものだ。勿論、魔法がかかっている。というか、コレ自体が僕の『傲慢』の魔法だつたりする。

しかし、日本屋敷の侵入は厄介だ。

庭に蒔かれた白砂、廊下の板が歩けば音を立てる。  
仕方がないので、屋根を伝つて行く事にしたのだが……。

「忍者かよ……」

「？」

僕の呟きは、屋根の上にもちゃんといた相手の警備の者と、それをさわつと伸してしまつアイリに向けてのものだった。

暗殺者の動きが、身体に染み付いていたようだった。

屋根から天井裏へと忍び込み、お田当ての部屋を探す。ネズミと間違えられて、下から突つかれる事も無く（というのも、風のマナ足下に引いて微妙に浮いて音をたてないようにしていたからだ）、事前に渡されていた皇居の間取り通りのお田当ての部屋に着いた。天井裏で耳を澄まし、下の部屋の様子をうかがう。下の部屋が騒

がしくて、どうやら僕らの存在はバレていないうだ。

「あんな奴のどこが良いのよー。」

「…………な所です」

「それは絶対違うと思います！」

一人はよく聞き取れないが、一対一で誰かが罵倒されていくようだ。怒鳴っている声は……リースとフリー？ 微かにしか聞こえないが、どうやらターゲットもいるようだ。

リースとフリー、か。

なんという偶然、っていうか、誘拐する事がバレてるじゃないか。どうしてこうなった？あの手紙の内容からすれば、誰も気付いていないようだつたけれど……。

また騙されたのか。やれやれ、一筋縄には行かない人だな。

部屋に意識を集中すれば、微かに火のマナが集まっているのを感じる。フリーが魔術陣を書いたのか。厄介な物を。

大きさは部屋全体を……部屋全体！？ おいおい、護衛対象と侵入者、両方丸焼きにする気かよ。ん？ 指向性が付けられているのか。いや、それにしたって、炎つてのは空気中の酸素を燃焼するんだ。この魔術を発動させると、部屋の物は燃えなくて、部屋の酸素が全て燃焼するぞ。

さすが引きこもりの偏屈魔術師、護衛を解つてないじゃないか。どうして誘拐する僕が、君等の護衛対象の心配をしなくちゃならないんだよ。

……仕方がない。

僕は複写魔法で一度フリーの姿になる。そして魔術陣にフリーの魔力を使って、指向性の上書きをする。僕とアイリ、それに部屋の空気を追加した。これで炎は大して燃え上がらないはずだ。

演出」苦労、とでも言つてやろうかな。

自分の魔力だからか、どうやら氣付いていないようだ。  
しめしめ。それでは、突入と参りましょうか。

不自然な風が吹いて、蠟燭の火が全部消えた。それと同時に、天井から黒い影が二つ降つてくる。天井はあたしの予想外だった。  
魔術陣に何か仕掛けは——大丈夫、魔術陣は消えていない。  
馬鹿め。真っ正面？ かどうかは解らないけど、この部屋に足を踏み入れるなんて。消し炭になりなさい！

足が付くのと同時に、部屋に赤い魔術陣が浮かび上がる。すぐに近づかれても大丈夫なように、部屋全体を埋め尽くす炎の魔術にしておいた。部屋の物を燃やすないよう指向性を付けてあるし、大丈夫。

「きやつ！？」

「ゴッ、つと床全体から橙色の炎が天井近くまで立ち上った。アオイが驚いて小さな悲鳴を上げる。リースは何も言わず剣を抜いていた。

炎があたし達の身体を舐め回すように燃え上がるが、その熱は微々たる物で、お湯くらいの温度で気持ちいい物だ。侵入者は地獄の業火に焼かれた気分になるんじゃないかな。あたし自身がくらったことはないから解らない。

と、めらめらと燃え上がる炎の中から、声が聞こえて來た。それは断末魔の叫びじやなかつた。

「用があるのは彼女だけなんだ。大人しくしていいくれないか？」  
「なつ！？」

侵入者達は平然と立っていた。そのロープを焦がす事も無く、身じろぐ事も無く。

あり得ない！　あたしの魔術陣は確かに作動していたはず。それを受けて平然としているなんて、化け物だ。

？？いや、それこそあり得ない。きっと魔術の隙を突かれたんだ。何か仕掛けがあるに決まってる。

「何故アオイを攫うのですか？」

「何故？　頼まれたからだ」

「……優秀なのに仕事も選べないんですね」

リースが軽蔑を込めた視線を侵入者達に向ける。灯台の明かりが消えよく見えないが、侵入者達は黒のローブに身を包んでいるようだ。見ただけでは性別も何も伺えない。けど、先ほどから話しているのは、それほど身長も高くなく、少年のような声をしていた。きっと、あたし達と同じくらいの年の少年だろう。

「時間がないんだ。手早く済ませせてもらいつよ

」

そう少年は言って、動き出そうとする。

リースがアオイを庇うように前に出て剣を構え、そして——。

「ふえ？」

少年は近くのタンスに手を触れた。た、タンス？  
意味の分からぬ行動に、思わず変な声が漏れてしまう。リースも心情は同じようで、目を見開いて口を微かにぽかりと開けていた。

かなり混乱してゐるようで、その証拠に、

「……そ、それが、彼女、ですか？」

明らかに見当違ひな質問をしてゐる。落ち着いてリース、それは絶対に違うから。

事実、少年は笑いを堪えるように肩を振るわせていた。

「まさか。いや——そのままかだ」

「は——っ——？」

瞬く間だった。いや、そんな時間もなかつたと思つ。

少年の声が耳に届いた時には、タンスはアオイになつてゐた。

「つ——？」

驚いてリースがちらりと振り返り、そしてさらに驚く。  
先ほどまでアオイがいた場所には、タンスがあつた。  
な、何が起こつたの！？ タンスがアオイに、アオイがタンスに  
？ 幻術？ それとも……いや、そんなのあり得ない。けど、實際  
目の前で起こつて——。

「頼んだ」

だが、驚いていられるのもそこまでだつた。

少年はアオイをもう一人の侵入者に渡す。アオイは驚きの連續のせいが、思考が追いつかず停止していた。

「逃がさない！」

あたしは杖をもう一人の侵入者に向ける。部屋にはまだ火のマナが残っている。

「我が友を助け、導く希望の光となれ！」

詠唱することで火炎球に指向性と追尾機能を付加する。侵入者は庭に降りた所、隠れる場所もない。やれる！

と、少年がその進路に出て来た。庇う？ 残念、あたしの火炎球はあんたを避けてあっちに行くよ。それにあんたが集めているのは風のマナ？ 集めてる量は凄いし風を操るなんて珍しいけど、どんなに集めたって無意味よ。馬鹿ね、風は火を大きくするわよ。

火炎球は少年にぐんぐん近寄り、急速に向きを変える——はずだつた。

「え？」

けど、不意に少年が伸ばした手で、火炎球は霧散した。

あり得ない！ こうも何度もあたしの魔法が無効化されるなんて！ それにさつきの意味解らない現象、何よあれ！ 何でアオイとタンスが入れ替わるのよ、そんな魔術あり得ない！ でも、さつきのはマナを集めていたから魔術……？

あり得ないはずなのに……、確かにあたしの目の前で起こってる……。

知らず知らずのうちに、あまりの出来事にあたしはへたり込んでしまった。

-----

踏み込んだ瞬間、足下に赤色の魔術陣が浮かび上がる。

指向性を付けているので、さながらアーティストの入場の演出だ。ゴツと炎が天井まで燃え上がった。指向性を受けたと言つのに熱を感じる。優秀な魔術師だよ、フイーは。

長々といえば僕の正体がばれてしまいそうなので、といつよりも口を滑らせてしまいそうなので、僕は早々にターゲットを攫う事にする。

僕の使う『強欲』の魔法は、奪い取った物だ。

かつて、各国の要人の頭が岩と挿げ替えられる、と言う殺人が行なわれた。それは当時名を馳せた一人の殺し屋の所業、？？魔法だ。実に哀れな殺し屋だったが、その魔法は優秀だった。

”コレ”と”アレ”を交換する魔法。

自分の手が触れているもの”コレ”と、目に見える範囲にあるものの”アレ”を、過程を省略して交換する魔法だ。

今回は、僕の手が触れている”タンス”と、そこにある”アオイ”を交換した。

この魔法の恐ろしい所は、間にガラスなんかがあつても、見えてさえいれば交換出来ると言う所だ。

驚いているリースとフリーを尻目に、アイリにアオイを渡す。手はず通り、あの小屋まで。

「頼む」

僕の声で場が動き出す。アイリはネコのよつよつと庭に降りて駆けて行く。リース嬢がタンスがタンスである事を確認している。

そしてフイーが、魔術を構築していた。

「我が友を助け、導く希望の光となれ！」

『我が友』がアオイ、『助け』で被害が及ばないよう、『導く』で追尾、『希望の光』が炎を表しているかな。

追尾型、厄介な。

打ち消させてもらう。

僕は風のマナを馬鹿みたいに集める。集める。

風の魔術は難しい。風って言つのは、高い気圧の所から低い気圧の所へ向かう空気の移動だ。相手を切り裂くような風の魔術を使う場合は、相手の周りの空気を急速に奪う必要がある。

けど各マナを集める事でその事象を起こすのが魔術だ。それにのつとつて考えた結果、僕の中で風のマナつていうのは低気圧の箱となつた。そしてそれを集めて極端な低気圧の元を作つて、最終的に投げ飛ばすと同時に箱が崩壊する。するとその場所に低気圧の空間が出来、そこに空気が流れ込むイメージだ。

ようするに、風のマナつていくら集めても空気にはならない。むしろ、空気を排斥した存在、真空にかなり近い物だ。

映画でやつていた。炎を消すのは真空だつて。

ただ風のマナを集めた状態というのは、真空を作れる箱を大きくしている状態。それに魔力を注ぐことで箱が壊れて真空状態出来上がり、空気が流れ込む。

僕は風のマナを集め、それを火炎球に投げつける。

火の玉の魔力で箱が壊れ、真空が出来上がる。

そして——、火の玉が霧散した。

崩れ落ちるフイー。どうやら、完全に予想外の出来事だったようだ。

「ごめん、フリーの常識を壊しすぎたかな？」

アイリはもう見えなくなつたので、僕だけ逃げ切れば良いのか。

「うーーー」

と、剣が僕の方に伸びて来た。  
リース嬢の刺突だ。

これは見た事……、ではなくやつた事がある。まあいな、これは後ろに避けても刺突が追尾するし、横に避けても突きが横薙ぎに変化する。

じゃあ、前に避けるか。

直前まで剣が直撃する「一スで突つ込み、畳をスライディング。ついでにリース嬢の足下を崩そつとするが、それは跳躍で避けられた。

転がるように僕は立ち上がり、燭台を一つ掘んだ。

そして一本ずつ構え二刀流……、ではなく、一本まとめて右手で掘んだ。

「……なんですか、それ」

「答える義理はないね」

「いえ、答えてもらいます。アオイをどこに連れ去ったのかを」

どうやら、アイリの姿を追えなくて僕に攻撃を仕掛けて來たようだ。

逃げ切れそうだな。

「では、手っ取り早く済ませてしまいましょう」

僕はそう言って、あえて真っ向勝負、剣の打ち合いを望む。

聖剣レイリース、それは凄い切れ味の剣だと考えておいて良い。ついでに、闇夜を照らす良い照明代わりだ。

打ち合えば必ず、細身の剣だがこちらが負ける。豆腐でも斬るようになんて斬られてしまうのだ。だから真っ向勝負なんて愚の骨頂である。

しかし、それは僕が聖剣の効果を知っているからであって、知らない者からすれば、あんな細身の剣叩き切つてやるぜ！ となるのである。

燭台を一本一緒に持ち、その重量で自分の剣を折ろうとしていると判断したからだろう。馬鹿ね、そんなの無駄ですよーーみたいな。

「はあっー。」

僕とリース嬢は一瞬交錯する。リース嬢の斜め下からの切り上げと、僕の斜め上からの切り捨て。武器だけが交差し、そしてーー。

「えっ……」

僕は白砂に着地し、無事の武器を見ててほっとした。

リース嬢の武器が先端から真っ二つに折れ、この日何度目になるだろう驚きの表情が伺えた。

聖剣レイリースが折れた訳じゃない。

先ほどまで僕が持っていた燭台が、リース嬢の手に収まっていた。

『強欲』の魔法による、『燭台』と『聖剣』の交換が成り立つただけだ。

ありがとうございました。聖剣を貸していただきました。

その出来事に、リース嬢もへろへろと力なく座り込む。ショック

と言うか、訳が解らないだろう。

アイカシア国は魔法を認めていないからな。信じられないし、信じたくないだろう。

「少々大変でしょうが、言い訳頑張ってください」

僕は聖剣を置いて、アイリの後を追つた。

別に聖剣はいらない。僕は僕で魔剣を持つてるから必要ない。否、魔法剣を持っているから、それ以外の武器なんて必要ない。

「すいません……。力及ばず、アオイ様を攫われてしまいました」

「…………わかつている。少し、一人にしてくれないか」

「あの、すぐにでも搜索致します」

「ああ……、よろしく頼むよ」

アオイをあの侵入者の少年に攫われ、捕まることすらできなかつた私達は、すぐに陛下に知らせました。彼は力のない顔をしています。

けど、どうしてでしょ。

彼の顔は、娘を攫われた悲しみや怒りなんかではなく、もつと複雑な心情を表しているように見えました。

警備の者達は侵入者を許してしまった事で、より一層皇居の警備を固めているようです。そのため、搜索は私達と数人だけとなりました。元より、事を大事にはしたくないようです。

言いたくはありませんが、少し薄情ではありますか？

「…………フリー、落ち込んでても始まりませんよ」

「…………うん」

フリーは今、すごく落ち込んでいます。自分の使った魔術が悉く、あの侵入者の少年に相手にされなかつたからです。

そういう私も、訳の解らない術で聖剣を奪われてしましましたし……、あの少年、次に会つた時に借りを返さないと行けませんね。

「リース様、少しよろしいでしょうか？」

と、警備の男性の一人が話しかけてきました。何でしょうか？

「少々侵入者に関してお聞きしたい事があります。魔術師殿に  
ご同行を願いたいのですが?」

「フィーと?」

「……あたしは別に構わないけど」

ぶつきらぼうに頃垂れたまま答えるフィー。なんだか心配です。  
一人にさせると余計落ち込んでじやいそう。

「えっと、今でなければならないのですか?」

「はい。少々時間がかかるかもしませんので、リース様はアオイ  
様の搜索をお願いしたいのですが」

「わかりました。フィー、大丈夫?」

「平気。別に何の攻撃も受けてないし……」

だるそうに手を振るフィーと私は別れ、そしてアオイの搜索を開  
始しました。



四方を囲む壁をゆうゆうと飛び越え、周囲に人がいないかを伺つ  
た後、僕はレイの姿になる。これで怪しい者を見ました、と言われ  
ても、少年の僕とおっさんのレイで明らかに違いが生まれる。他で  
も無い、リース嬢とフィーが僕の弁護人だ。

小屋に向かいながら、僕はこの依頼を思い返す。

依頼内容は、誰一人殺す事無く、アオイを無傷で誘拐する事。

依頼人は、皇居にいる一人の女性だった。

小屋に入る前にも人の気配を伺う。気配は感じないので、今度は元の姿に戻った。アオイと会うのならば、こちらの姿の方が良いだろつ。

偽りの騎士なんかよりも、魔王の方が良いだろつ。  
扉を開け、小屋に入ると——。

『この手紙をあなたが読んでいると言つ事は、ニルベリア皇国まで来てくださったのですね。あのような連絡手段を取つたのは、まだあなたとの絆を取つておきたかったから、といつ私のわがまま、どうか許してください。

あなたが疑問に思つてゐる点をいくつか説明します。

まず、この国には凶悪な魔物が存在します。それを暴れさせないため、十年に一度、若く魔力の高い女性を生け贋として捧げてきました。それにより、この国の平和は保たれています。

けれどそれは隠蔽されている事で、まず一般人は気付いていません。また、この国の貴族と呼ばれる者達も知りはしないでしょう。知つているのは、皇居、もしくは神社と深く関わりのある者のみです。

ですから、あなたが何かこの国にまづい事が起つてゐるのではと考えられたのは、当たつています。

今年で前回の生け贋から十年が経ちます。

聰明なあなたなら、もつお気つきでしょう。

生け贋は、その年で最も魔力の高い者を選びます。

生け贋に選ばれた者で生きて帰つて来た者はいません。皆、魔物

に食われたのだと思います。国を思つて死んで行つた彼女達の遺志を継ぎ、今年の生け贅も一切の私情を挟まず、一番魔力の高い者が選ばれました。

最低な事だとは解つています。

これまで死んで行つた生け贅の少女達の願いを踏みにじる事だと。何も知らずのうのうと生きている一般市民の皆さんとの命を危ぶめる事だと。

苦渋の決断をしたーー、父をより一層苦しめる事だと。

だけどーー、私は死にたくありません。

あなたに助けてもらつた命を、こんな下らないことで使い捨てたくありません。

だから、お願いします。

『生け贅の御子をーー攫つてください』

小屋に入った瞬間、どんと衝撃を受けた。一人の命の重さを僕は受け止める。

重いじゃないかよ。人の命は、随分と。

受け止めたその人物は、手紙の差出人にして依頼人、巫女にして御子？？。

アオイが僕に抱きついて来た。

整つた顔立ちで日本人形のように可憐だ。肩まで伸びた黒髪と紅

白の巫女服がよく似合つ。

上田遣いの彼女に、僕は笑顔で語りかける。

「久し振り、アオイ。大きくなつたし、可愛くなつたね」

「どこがとは言わないよ。

「お久しぶりです。女性の扱い方を少しは心得たんですね。そして、ありがとうございます」

「」「りと笑うアオイ。

「国を捨てようとする私を助けてくれて、本当にありがとうございます」

「だから僕が助けるんだけどね」

「？」

彼女の自嘲の入った台詞に、僕はニッとも笑みを浮かべる。何を言つているのか解らず首を傾げるアオイの黒髪を梳きながら、僕は言葉を紡いだ。

「国を捨てるなんて、統治者の娘として最悪な事じゃないか」「はい」

「？」

「それに何だ？　國のために犠牲になることがくだらない事だつて？」

「……はい」

「まるで悪女だな、アオイは」

「……はい」

何を素直に頷いているんだか。一つくらい否定してほしかった。

だが、それが良い。

僕はアオイの頬に手を添えて、真っ直ぐに見つめ合ひ。だつてそれは。

「魔王の僕に相応しいじゃないか、アオイ」

「はい！」

国のために犠牲になる？ 本当にくだらないな、それ。魔王の僕からすれば、国なんて個人を守るための道具でしかないよ。

一人は皆のために、皆は一人のために。

一人だけが頑張るようになつたら、そいつはおしまいさ。

よし！ アオイを見つけたら、おっさんにお願いしてみー。

「フィオナ殿、どうかされましたか？」

「ふえ？ あつ、何でもないわよ」

危ない危ない、思わず握りこぶしを見られてしまつ所だった。

「陛下、フィオナ殿をお連れしました」

「入ってくれ」

「つて、あれ？ 何でアオイの部屋じゃないの？  
部屋にもなんかたくさん人がいるし。

「フィオナ殿、急に済まなかつたな」

「……いえ、あたしは別に」

「唐突で済まないが、フィオナ殿の魔力はどの程度のものだ？」

「えつと、普通の魔術師三十人分ですけど……」

そういうと、おおつと部屋の人達がざわめく。

「え？ 何？」

「……なんか、嫌な予感がーー。」

「なつ……」

どすっ、と首元に衝撃が走ったのはその瞬間だった。頭からふつと力が抜けて、考える事も出来なくなる。

あたしの耳に最後に聞こえたのは、

「すまない」

といひ、この国の主の声だった。

「口と花が咲いたような満面の笑顔を見せ、僕に身を寄せア  
オイ。……ジト田でアイリが僕を見ていた。ほつといてくれ。

「私は、魔王にお似合いの悪女ですか？」

「うん。僕にぴったりの悪女だな」

けども、まだ少し足りないんだ。  
せめて何かを貢いでくれよ。

「じゃあ、僕のためにもう少しこの国にいてくれよ。次に会う時こ  
は、魔王と政略結婚しないか？」

「政略結婚ですか？ いいですね、それでこそ私は『悪女』です」

じゃあ、ちょっと魔物を倒しに行つてくる。

生け贋なんて惡習、ここで潰えやしてやるよ。  
家族を引き裂きたくないからね。

魔法使いに取つて、戦闘なんて茶番に過ぎない。

先に見せた『強欲』の交換魔法を使えば、目に見えている物と適当な物を交換出来る。

例えば、『相手の頭』と『そこの筋』を交換。頭でなくとも、目玉、手、足……部位を強制的に交換する事が出来る。そこにいくつかの制約は付くが、ほとんど気にしなくて良いような物だ。それ故にこの魔法で最凶と呼ばれた殺し屋が生まれた。

正直、魔物なんて怖くない。

まして、そいつが潜んでいるのが山の奥、人目につかない場所だと言うのだから尚更だ。

思つ存分、魔王として力を振るえるじゃないか。

鞄に入れっぱなしだった魔法剣を使う良い機会かな。でも怪我するのは嫌だし、手っ取り早く頭を適當な物に上げ替えても良いな。

僕はそんな軽い気持ちで鞄を置いてある宿屋へと向かつて行った。アオイはアイリと一緒にいる。クロガネさんが用意してくれたあの小屋には、人目を避ける結界が張られており、その存在を知る者しか知覚できないらしい。

念のために僕の最高傑作である魔宝石を一人に渡してあるし、後は僕が魔物を倒して、レイとしてアオイを皇居に届ければおしまいだ。

レイの格好は戦わない時向け。スペックは高いが、戦闘には向いていないのだ。眼鏡がないと先が見えないし、激しい運動をすると三日後に筋肉痛になる。

今はレイの姿で宿屋に向かっている。一応だ。僕の背格好が指名手配されていると厄介だからな。

「レイさん！」

と、背後から声がかけられた。この声はリース嬢だ。が、凄く焦つているようだ。何か茶化そうかと思ったが、それは止めておこう。

「どうしました、リース嬢？」

「レイさん！ フィーが！」

生け贋は、若くて魔力の高い女性。

「——っ！！」

フィーは、偏屈魔術師の二つ名を持つ優秀な魔術師。

フィーは、昨日は皇居にいた。

アオイは御子で巫女、そして——生け贋。

そして、昨日誘拐された。

誘拐が何故バレていた？

どうして生け贋を攫われて、必死に探そうとしない？

何故クロガネさんはアオイを誘拐する事を良しとした？

国が滅ぶのと一人の少女の存命を、本当に天秤にかけて選んだのか？

「——冗談じゃないぞ！！」

「レイさん！？」

リース嬢の言葉を最後まで聞かず、僕は走り出した。

装備なんて何も持っていない。鞄すらも取りに戻っている時間はなかつた。

あの中に入っている魔法剣も、巨大な、それこそ龍の頭部と同じくらいの鉱石、すなわち当初の討伐道具を所持していない。居ても立つても居られず、僕は聞かされていた場所、『邪龍の渓谷』へと向かつた。

「……ん」

目が覚めた時、あたしは地面にうつ伏せで倒れていた。寝起きのためか変に身体が麻痺していて、だんだんと冷たい地面の感覚が解つてくる。

あれ？ 何であたし地面の上で寝ているの？

そう考えて起き上がるが、身体に力が入らず、ペたりと座り込んでしまった。変だな、何で身体が……。

思い出した！ あたしは、隣に立っていた男に手刀を叩き込まれて氣を失つて……。ぺたぺたと身体をまさぐり、何もおかしな事をされていないのを確認する。大丈夫、服も身体も持ち物も何もされてない。杖も傍らに落ちてるし。  
きょろきょろと辺りを見渡せば、どうやら谷にいるようだった。山が近く、その頂きに雪が残っているのを確認出来る。見れば、シミヤの街も確認出来る。身体が動くようになれば、歩いて戻れなり距離じゃない。

とりあえず、身体が動くようになるまで座つてよう。

少し気になるのが、あたしを挟むように立っている一本の燭台だ。崖の上に祭壇と思われる台があるのも気になる。何かの儀式

に使うのかな？

そこまで這つて、崖の下を覗いてみる。

「ひつ！」

下を覗けば、底が見えない谷が広がっていた。落ちたら間違いなく死ぬ。

と、不意に谷から地響きに似た唸り声が聞こえた。

「なつ、何……？」

次の瞬間、突風が吹き荒れ、燭台の火を消し、あたしを吹き飛ばした。

そして、巨大な影が姿を現した。

「りゅ……龍」

緑色の鱗に覆われた巨大な体躯に、獰猛な目つき。鋭い牙が口から覗き、今にもあたしを喰らってしまおうかと半開きになっている。

「あつ……あ」

身体が……動かない。口も麻痺したように震えてる。

薬や手刀の後遺症が原因じゃない……これは恐怖。本能が理解している。

こいつには絶対に敵わない——と。

あたしが何をしようとも、絶対にこいつには敵わない。最高の威力の魔術を使つたって、リースが立ち向かつたって、傷一つ付ける事は出来ないって。

それと同時に、あたしが何故ここにいるのか理解した。

生け贋だ。

あたしは、この化け物の生け贋に捧げられたのだ。  
決して誰も敵わない存在。だから、こうして生け贋を差し出す事  
で、この国人達は生きながらえているんだ。

これはきっと、アオイを守りきれなかつたあたしへの罰なんだ。  
……リース、ごめん。きっと悲しい想いさせちゃうよね。

あたしなんかが友達になつて、ごめん。あたしはずつと研究室に  
引き籠つてれば良かつたんだ。そうすれば——。

ううん、そんなの考へられない。リースと出会わなければって考  
えたけど、それはきっと今よりも辛い。

偏屈魔術師と呼ばれ、他人から避けられて研究室に引き籠るしか  
なかつたあたし。それを外に連れ出してくれたのが、リースだ。  
あたしは、好きで一人になる事を選んでない。あたしは、誰かと  
一緒にいたかつた。自分しかいない部屋は静かで、凄く寂しかつた。

だから、『ごめんね。あたしのために、泣いてもらつて良いかな？

龍の雄叫びが、再度あたしの身体を震えさせた。そしてそれを発  
した巨大な龍の口があたしに迫る。

覚悟を決め——ううん、諦め切つて、あたしは目を閉じた。

そして——、あたしの身体がふわりと浮いた。  
痛みなんて感じない、一瞬で天国に旅立つた。

「間一髪でしたね」

「…………え？」

けど、そのお迎えは、天国には相応しくない胡散臭い声。恐る恐る目を開けると、優雅な表情のおっさんが、あたしをお姫様だっこしていた。

間一髪だ。

リース嬢を振り切つてからレイの姿から戻り、『邪龍の渓谷』まで全力疾走した。龍に食われそうなフリーの姿が見えてレイの姿には戻れず、抱えて龍から距離を取つて始めて、僕はレイの姿に戻つた。

色々、間一髪だった。

フリーが目を瞑つていなければ、僕の正体がまたバレる所だつた。レイの姿に戻つた瞬間、身体から力ががくりと抜け落ちる。やはり、僕は僕であつた方が身体能力は高いようだ。さすがはおっさん。

「フリー、動けますか？」

「…………え？…………な、なんで、あんたがここに？　ひやつー？　何するのよー？」

驚いているフリーのお尻を撫でて、身体の緊張はほぐしてあげる。口元を両手で押さえると言ひ、可憐らしい反応が返つて來た。殴られると思つたのに。

口は動くが、どうやら走つたりは出来なかつた。

「は、早く逃げるわよー！」

「フリー、まさかあなた、僕にこのままあなたを抱えてあの龍から

逃げろと？「冗談じゃありませんよ、そんな疲れる事出来ません」

その他にも、I.Iで生け贋を逃がしてしまった後、この龍が暴れるんじやないかと言う気がかりもある。シミヤの街と大分近いし、すぐにも大きな被害が出るだろう。

それが解らない——まあ、多分生け贋の必要性とかを知らないフィーは、もの凄く見当違いな事を言い出した。

「あ、あたしが重いから運べないって言つ的一？」

「誰もそんな事は言つていませんよ。……いや、重たいのは否定しませんが」

「かふつ！…」

声にならない変な悲鳴を上げるフィー。うむ、女性に重い発現はまづかつたかな？後でフオローリしておくか。

僕はフィーを一度地面に下ろして、田線をあわせるためにしゃがむ。

そして、

「田を開けていいださい」

「え？」

「フィー、良いですか？絶対に田を開けてはいけませんよ？」

僕はフィーにそう伝えて、龍と向き合つた。今まで茶番に付き合つてくれてありがとう。そして、これから劇の噺ませ犬役、お願ひします。

緑色の鱗に身を包んだ、全長五十メートルはあるつかといつ巨体。ワニの頭に蛇の身体、それにトカゲの手足でも付けたような、知性の欠片も芸術性もない化け物だ。

ようトカゲ野郎。

尻尾切つて逃げ出すなよ？

僕は『暴食』の魔法を発動させる。

本物のマモノって奴を見せてやるよ。

僕の頬骨が大きく歪んだ。

「田を瞑つていってください」

「え？」

「フィー、良いですか？ 絶対に目を開けてはいけませんよ？」

そう言つて、おっさんが離れて行つた。馬鹿じゃないの、こんな状況で目を開じてろつて、あたしに死ねつて言つてるの！？ けど、あたしは目を閉じた。きっと、見てはいけない何かがあるのだろう。見てしまえば、もう戻れないような何かが。

何となく、おっさんが微笑んだような気がした。

何が起こっているのか解らないが、不意に地面が揺れた。何か大きな気配を感じる。これはまるで——、  
大きな魔物が歩くような振動？？ つ――！

「レイつ――！」

レイがやられた、そんな気がして思わず、目を開けてしまつた。目を開ければ、そこには？？ レイはいなかつた。

「えつ……」

絶望感があたしの心を埋めて行つた。

何せ代わりに田の前いたのは、一匹の黒いドラゴンだった。

艶やかな黒い毛が全身を覆う、建物程の大きさのドラゴン。谷に

いる龍と比べれば小さいけど、それに勝るとも劣らない威圧感を持つている。

? ? つて、増えてる… [冗談じゃないわよ…

もしかして… レイ。

数が増えたから、あたしを生け贋にして逃げた？

それ酷いじゃない！ ちょっとカッコいいと思つたのに…。

「…………やつ！」

不意に、ドラゴンがこちらを睨んだ。黒い大きな瞳が、あたしをじっと見つめる。

その瞬間、あたしは飲み込まれた。

ドラゴンの口に一呼吸なくして、その雰囲気に。どことなく感じる不思議な心地よさ。きっとそれは？？安心感、だと思つ。どうしてかは分からぬけど、ここにはきっとあたしを助けてくれる。

何故か、そう思った。

ドラゴンが雄叫びを上げ、翼を広げる。一度、羽ばたいたように見えた。次の瞬間には、突風が舞い上がりドラゴンは視界から消えている。

空だ。いつの間にか夜が明けていて、青空が広がっている。そこにぽつんと小さな黒い点が見えた。黒い点——ドラゴンはそこに滞空し、次の瞬間、何か白い光が龍に向かつて放たれた。

バシュン！ と熱線でも浴びたような音が聞こえ、龍が呻き、その全身を露にした。

「うわっ……」

大きいと言つよりも、とてもなく長い。自分の身体で絡まりそうな位長い。あのドラゴンと比べるとすばく……気持ち悪い。

龍はするすると宙を登り、ドラゴンと対峙する。

「匹が雄叫びを上げ、そして——。

龍が爆発するように、たくさんの光を放つた。

否、あれはドラゴンの攻撃を一瞬のうちに大量に浴びたのだ。苦しそうに呻く龍の声があたしの耳まで届いてくる。ドラゴンは空を縦横無尽に飛び回り、一点に留まらず攻撃を続いている。

あたしのドラゴンは圧倒的じゃない！

へ？ あたしのじゃないって？ 何でも良いでしょ。

と、龍もただやられているだけじゃなかつた。胴体に比べれば短い手でドラゴンを鷲掴みにしようと身体をくねらせ——、掴めない。その大きな口でドラゴンに噛み付こうと——、噛み付けない。

ドラゴンは一度羽ばたくだけで、瞬間移動するように動く。軽い身体を強力な推進力で動かしているみたいに、かくかくとした動きだがもの凄く速い。龍の頭の方にいたかと思えば、尻尾の方にいるのだ。それに比べれば龍の動きはゆつたりとしたものだ。身体が長い分だけ、まだそこにいたのか、と感じてしまう。

不意に、龍が天を向いて口を開けた。激しくぶつかる攻撃を無視して、一心不乱に集中し——、驚く程の魔力がそこにを集められていった。

「な……何よあれ。あんな魔力……信じられない」

凄く離れているはずなのに、あたしの肌が震える。大量のマナが龍の口元に集められ、それを馬鹿みたいな魔力で巨大な炎としていた。

山を消し飛ばす威力、それが比喩じゃなくて実現しそうな程の魔

力の量。

間違いじゃなかつた。あたしなんかじや、あいつには絶対に敵わない。ううと、この世の人間と呼べる生き物であいつに対抗出来る者はいないとと思う。

だけどーー、人じやないのなら、あのドラゴンならーーあいつを倒せると思えた。だからあたしは、

「頑張つてえー！」

魔術の詠唱でもなく、単純な応援に声を張り上げた。

声が届いたかどうかは解らない。ただ、ドラゴンが攻撃をやめ、龍と対峙した。真っ向勝負を挑むように。

それと同時に、龍はマナを集めるのを止め、圧縮させていく。龍がドラゴンを睨んだ、ようと思えた。距離が離れていて見えやしないのだ。

そして、その圧縮された炎が一筋の光となつてーー。

ドラゴンに飲み込まれた。

光はドラゴンの口に飲み込まれーーそして、そのままだつた。何も起こらない。ただ、純粹にーー喰われた。

ぽかりと、あたしは口を開けていた。それは炎を放つた龍も同じだつた。

信じられなかつた。莫大な量のマナを、飲み込んだのだ。吸収量にも許容量があるでしょ、普通。

そして、間抜けのようにぽかりと開けた口に、今度はドラゴンが熱線を放つた。先ほど喰らつた攻撃を練り込んだような、今までに

ない強力な攻撃。

ドラゴンの放った熱線は飲み込まれる事無く、龍の口を貫通しーー龍の身体がぐらつく。そして、次の瞬間には龍の巨体は落下を始めた。

「やつた！ 勝ったんだ！ 激しい！」

けど、それもつかの間の喜びだった。龍があたしの真上に落ちて来ていた。

「きやあつー！」

慌てて避けよつとして、つまづく。まだ身体が万全じやない。これは、あの警備に薬でも盛られた？ 「冗談じやないわよ！ 視界は既に龍の巨体の影に入り、暗くなつていた。ぎゅっと目を瞑り、衝撃に身構え……。突風が吹いた。

「…………えつ」

あたしは、空を飛んでいた。ぐいぐいとロープが身体に食い込むが。

ドラゴンがロープをくわえて、あたしを助けてくれた。後ろを見れば、龍の身体が力なく谷に落ちて行く所だつた。所々で谷にぶつかるけど何の反応も示さない。本当に倒されたのだと解つた。

「ありがーーつて！」

ドラゴンに感謝、したかった。けど、それどうひじやない。

ちょ、ちょっと！ 脱げちゃう！ ローブが脱げちゃう！ 暑い  
から下は下着なの！

ばたばた暴れるあたしの意志を汲み取ったのか、ドーラゴンはローブを離した。

「……え？ それはないでしょ！？」

谷の真上で。

すぐさま落<sup>ハ</sup>するあたしの身体。風が心地<sup>ハ</sup>良くない！死ん  
じやう！この高<sup>タカ</sup>さから谷に落ちたら死んじやう！助けてく  
れた訳じやなかつたの！？

かつた。

**薄情者！助けるなら最後まで助けなさいよ！**

「？」

もの凄く理不尽な事を考え落としているあたしだったが、ぽふり、と柔かな触感を感じ、その落下が止まつた。

ドアの背が、あたしを受け止めていた。

アーヴィングの毛は思ったよりも柔らかく、やわらかさをもつていて、魔物のはずなのに、どこか神聖な生き物のようを感じてしまつ毛並みだ。

落ちないように首元にしがみついても暴れないし、黒い毛は綺麗でいい匂いもある。何だ、良い奴じゃない。よしよし。

……自分でも酷いと思ふ心変わりだつた。

「ドランの目を覗くと、何か言いたげにあたしを見ていた。が、何も言わない。言えないのかも知れないけど。

「ふああ……」

と、緊張が解けたからか、急に眠気が襲つて來た。  
……ああ、やつぱり薬……盛られてたかな。  
なんだか凄く……眠たいよ。

そつとジラ「ン」の目を見ると、やはり何か言いたげな目であたしを見ていた。……何故だか、その目はどこかで見た事があるような気がした。

「…………い。 フイー！」

「…………うん？…………リース？」

「フイー！ 気がついたんですか！」

目が覚めると、どこかの街道だった。また地面で寝てる。今度は木に寄り掛かつてたからまだマシだけど。けど、森の中じやない。魔物に襲われたらどうするつもりだつたんだ、あたし。……あたし? そして、リースに抱きつかれた。

「リース……、『じめん。心配かけさせちゃつた?』  
「心配しました! ……でも、無事で何よりです」

一「リと微笑むリースは、天使みたいだ。  
つと、そうだ。

「リース、レイを見なかつた?」

「レイさんですか？ そう言えば… レイさん、フイーの話を聞いて一皿散にこつちに向かつたんですよ。会いませんでしたか？」

「……会つたけど」

……ふつと、それは褒めてあげたいかな。  
で、奴はどこに行つた？ あたしは言いたい事がたくさんあるん  
だけど。

「おや？ お一人とも、『無事で何よりです』

と、ぬけぬけと森の中から出てくるレイ。

「レイさん… フイーを助けに行つたのではなかつたんですか？」

「そうよ… あのときはどこに行つてたのよ…」

「それより一人とも、黒いドラゴンを見ませんでしたか？」

あたし達の詰問をせらつと避けて、レイはそんな事を言った。

黒いドラゴン… あたしは知つてるわよ？

あんたと違つて、あたしを助けてくれたんだから。

「いやあ、フイーを助けに行つたのは良かつたんですが、数が増えてしまいました。一匹だけならなんとかなると思つたんですが、二匹はちょっと…」

「で？ アンタはあたしを置いて、とんずらした訳？」「失敬な。戦略的撤退と言つてほしい」

胸をはつてそんな事を言つてレイ… ふつと、おっさん。  
ダメだコイツ、早く何とかしないと。



次で第一章は終わりです。

## Hピローグ

僕はやつぱり魔王だ。

黒いドラゴンへの変身は、三つの属性の魔法で出来上がっている。『嫉妬』でドラゴンの肉体となり、『傲慢』で熱線を放ち、『暴食』で魔力を喰らう。『嫉妬』でドラゴンに変わっただけでは、普通のドラゴンに見合った力しか出せない。間違つても、あの龍よりは低スペックになる。そこで『傲慢』な力、高威力な熱線を使えるようにした。更に『暴食』で相手の攻撃を吸収である。

本来なら一つの属性しか使えない魔法を、七つ全て使える僕に死角はなかつた。

おまけに、複写魔法で大概の魔法はものにしているし。  
改めて、僕は化け物だな、と思つたよ。

夜、一人で宿屋に籠つている時、そんな事を思つた。

あの後の事だ。

「アイリと……そこにはアオイ！？」  
「アオイ！ 無事だつたの！？」

僕は一人を小屋に案内し、たまたま偶然見つけた小屋でアオイを見つけた事を話した。いや、嘘なんだけどさ。

そして、アイリに保護させて、僕は皇居に向かつている途中にリース嬢に会つたのだと。その後、フリーを助けに向かつて忘れてしまつていた申し訳ない、と。

おまけに助けに行つたフリーを置き去りにして逃げ出した事になつてゐるのだから、僕の評価は滝の如く落ちた。

アオイに説明されて、『立腹ながらもフイー達は納得した。そして、誘拐犯は誰だったのか？と首を傾げつつ、意味ありげに僕を見ていたような、見ていなかつたような。

ちなみに納得したと言つても、慰謝料を大量にせしめて、なんとか納得したと言つて良い。友達の親、引いては國からお金を奪う事に躊躇はなかつた。そこに僕は甚く感服した。けじめつて奴だ。

そして、もらつたお金で早速大量の買い物に。國の内部でお金を回すようにちやつかりと仕向けているアオイ。

僕？勿論、荷物持ちに連れ回されましたよ。

いやはや、どこの國の女性も買い物はお好きなようで、久々に『Gランクの天才』として活躍させてもらいました。鞄にしまつただけだが。

フイーとリース嬢から怪しむような視線を受けたのは……、恐らくあれば原因だ。『強欲』の交換魔法。まあ、これは僕が作った物じゃないの一点張りで押し通したが。あれ？ 墓穴掘りまくりじゃない？

そんな女性陣は今、アオイの部屋でパジャマパーティー（？）をしている。お泊まり会と言う奴だ。明日にはこの國を発つので、最後のおしゃべりなのだ。

僕と同じ部屋にアイリが泊まっていると何者がガリークしたようで、僕は虜げられ、アイリはパジャマパーティーに参加する事が決まった。

で、女性陣が恋バナとか、枕投げでもしているであらうこの時間、僕が何をしているのかと言つと……。

覗き……じゃなくて、裁縫だ。

いや、本当仮想人格には驚かされるよ。何年も使つて来たと言うのに、未だ僕の予想外の事をしでかそうとする。お前、彼女達の覗きをしてバれてみろよ。明日には海のもずくだぞ。藻くずじやなくて、見せられないよ！ で隠されて海に黒い纖維となつて浮かん

である。

いや、本当もう懲りたよ。アイリと同じ部屋というのがバレて。アイリが弁護しないのも悪いが、フィーとリース嬢は僕の事を悪魔だの女性の敵だの散々罵倒してくれたもの。

で、今やっているのは御機嫌取りの人形作りだ。

勿論、それだけじゃない。キー・ホルダー程度の大きさで、内部に最高傑作の魔石を入れてお守りにしてみた。

にゃんこの人形だ。僕はネコが好きである。

朝日が昇る頃、僕は散歩をしていた。徹夜だつた。

いや、この時間から寝ると起きるのは明日の朝になりそつだから。と、リース嬢が海を眺めているのを見つけた。

「お早いですね」

「……レイさんこそ、こんな朝早くどうしたんですか？」

僕がそう声をかけると、リース嬢は微笑を浮かべた。

「散歩です。人ごみが嫌いなんですよ。時たま喧騒が溢れる夜と違って、朝はいつも静かですからね。僕はよく早起きするんですよ」

今回は早起きじゃないんだけどね。

夜も好きだが、散歩をするなら早朝が一番良い。

夜に散歩していたら不審者扱いされたとか、そんな経験はないよ。

「……隣、来ませんか？」

不意にリース嬢はそう言った。リース嬢は防波堤に身体を預けて、

朝日が昇るのを眺めていた。綺麗な金髪が輝いていて、もの凄く絵になる。

「僕なんかで良ければ」

僕はそう言って、リース嬢の横に行く。  
これで、誰も絵にしたがらない構図の完成だ。  
近づき過ぎず、遠過ぎてもしない距離を取る。

「…………」「…………」

微妙な距離感を保ちながら、僕らは無言で朝日が昇るのを眺めた。  
気まずい、というよりも、朝日の美しさに感動している、と言つてくれ。

「……私、レイさんのこと誤解していました」「はい？」

唐突に、リース嬢は語り出した。  
恥ずかしいのか、僕の方を見ずに俯きながら。

「アオイから聞きました。レイさん、見かけに寄らずロマンチストなんですね？」  
「ちょっと待ってください。……何を聞きました？」  
「くすつ、教えてほしいですか？」

焦る僕をくすくすと笑うリース嬢。そして、小悪魔チックに微笑み、その薄桃色の唇に人差し指を添える。

「……反則だ。」

「……え、聞きますんよ。…………しかし、なんと言つか、恥ずかしいですね」

やばいよ。

僕がアオイに話した内容つて、結構赤裸々な内容なんだよ。特に、僕の前世での話が……。あの頃の話はあまりしたくないんだよな……。

……

「私は……見直しましたよ？ レイさんの事」

「見直した？ はははっ、冗談でしちゃう

焦る僕に調子に乗つて顔を近づけて来るリース嬢。

だが残念だな。僕は仮想人格 という逃げ道を持っているんだ。僕は近寄つてくるリース嬢の頬に手を添えて、微笑んだ。

「惚れ直した、の間違いじゃないですか？」

間違えた。

逃げ道じやなくて、茨の道だ。

顔を真つ赤にしていたのは、僕とリース嬢、一体どちらだったのか。

「リース嬢、顔が赤いですよ？」

「！」これは、朝日のせいです！

……夕日じゃないんだから、その言い訳は苦しいよ。

リース嬢と別れて宿屋に戻ると、宿屋の横にある狭い路地で、フイーが拳動不振な行為をしていた。宿屋の一室を見上げて、首をブンブン振ったかと思えば、ちらりとまたその部屋を見る。それを繰り返していた。

何やつてんだ、あの魔術師。新たな魔術の開発？  
その冗談はさておいて、しかし別の冗談を吹っかける。

「怪しい奴だ。何をしている！」

「ひやつ！ ち、違うの！ これは、その、ちょっと待ち合わせをしていて！ そ、その、べ、別に怪しくなんかーーって、おっさん！？」

珍しく渋い声を出したので、僕だとバレなかつたようだ。  
目をパチクリさせるフイーを、にやにやと眺める僕。  
正体が分かつて、からかわれたのも分かつたのか、プクリとまおを膨らませるフイー。

「……何よ、言つてくれれば良かつたのに」

「おや、待ち合わせとは、僕の事だつたんですか？ おかしいです  
ね……、僕にはそんな記憶はないのですが

「……あつ」

まるでロミオのようだつたよ、と言つても伝わらないよな。  
思い返すと恥ずかしくなつたのか、頬を赤らめ俯くフイー。  
さて、からかつのむけにこちらにしておいつ。

「……いえ、そう言えば最近、僕は物忘れが酷くなつていましたね。  
フイー、遅れてすいません

「??!! わ、分かれば良いのよ… 分かれば…」

僕が頭を下げるとい、途端に元気になるフイー。先ほどまで、借りて来たネコの様だったのに。首根っこを掴んで持ち歩けそうだった。

「それでフイー、どうした用件ですか？」

「あー、えっと、……そうね。長くなるから、食事と一緒にいっていい？」

また僕に料理を作れと言つのかね？ そいつはお断りだ。  
君、僕の田の下の隈が見えないのかい？」

「宿屋の食堂で良ければ」

「…………うう、まあ、仕方ないわ」

可哀想に、宿屋のおかみさん。仕方ない呼ばわりだよ。  
僕としては、おふくろの味つて感じで好きなんだけどな。  
それならばと宿屋に入ろうと踵を返し——、僕の袖を掴むフイー。  
またですか？ 何ですか？ 引き止められるのはちょっと嬉しいん  
だけど、転びそらうなんだけど。

「…………その前にさ、ちょっとしゃがんで」

「はい？ 何ですか、唐突に？」

「い・い・か・ら、しゃがんで」

言葉に合わせて指を上に振り、腰に手を当てて有無を言わぬ  
態度のフイー。

僕は首を傾げつつも、素直にしゃがんだ。

フイーが僕の頭を撫でた。

「…………フイー、さん？」

「…………なんか違うわね

しばらく撫でた後、ぱっと手を離すフイー。

……あー、もしかしてドラゴンになっていた時の僕と対比？  
いやいや、正体はバレてないはず。……多分。絶対とは言い切れ  
ないが。

フイーはしゃがんで惚ける僕を追い越して、ぐるりと一回転、含  
み笑いを浮かべた。

「ほひ、あなたの奢りでしょう。早くー！」

やれやれ、今日はとんだ厄日だよ。

よつこじょと、おつたとのよつて言ひて、僕は腰を上げた。

フイーとの食事と会談を（侵入者が見せた魔術の原理を説明して  
ほしいところ内容だったが、見てないから分かりません、で）済ま  
せた。その後、荷物を取りにフイーが皇居に行き、僕は宿を引き払  
つて港に向かいながら街をぶらついていた。

と、アイリが若い男達に絡まれているのを発見。相手は黒髪のせ  
いか、ちゃらいという印象は受けないが、やつてこる事は同じだつ  
た。

やれやれ、僕の可愛い秘書をナンパしないでほしいな。

「待たせてごめん。すいません、彼女は僕の連れなんです」

僕は胡散臭いおっさんの笑顔を見せて、アイリの肩に手を置く。  
おっと、嫌かな？ アイリ、僕がおっさんの姿をしている時は避  
けるから。

気付いてない振りをしていたけど、この国に来てからは顯著で、

さすがに僕も理解したよ。だから、嫌そうな顔でもするか。  
が。

「そうです。私にはこの人がいますから」

と、アイリが僕の腕にしがみついて來た。ぎゅっと。そして、胸  
をこすりつけるようにすり寄つてくる。

あれえー？ なんか……違う。

ちつとういう趣味かよ、と男達は侮蔑の表情を向けて僕らから離  
れて行つた。どういう趣味だよ。僕が聞きたいよ。

僕は抱きついて來たアイリをまじまじと見て、

「あ、アイリ？ 本当にアイリ？」

「……私はアイリですが、何か？」

疑いの眼差しを向けるしかなかつた。

えつとさ、君は僕がおっさんの姿の時はこうこうことしなかつた  
よね。多分、君が依存しているのは僕であつて、レイではないから。  
あれえ？ 女性陣に心変わりが訪れたのか？

女心と秋の空、つて奴か。いや、別に悪くはないんだけど。  
…………むしろ良いんだけど。

いや、やっぱり僕の平穏が侵されるから、良くないかな。  
ぎゅっと僕の腕を抱きしめるアイリ。

「あ、えつと……何？」

「……港に行くまでに、離れちゃうと困りますから」

その割にはさ、何で一人でここにいたんだか。絶対方向音痴では  
ないよな。アオイを誘拐したときも、ちゃんと小屋に戻れだし。

「……ダメですか

けど、そんな事実には目をつむって、仕方がないな、と僕の声で呟いた。

港に着くと、アオイが待っていた。護衛にクロガネさんが付いている。

そんな僕にも秘書、アイリが……今は控えている。港が見えるようになる曲がり角で、やっとアイリは僕の腕を放してくれた。

「もう……帰られてしまふんですね？」

「うん……じゃなくて、ええ」

丁度リース達もこちらに来てしまつたので、僕は慌てて声を変えた。

いや、もう正体をバラすにもバラせ無くなりつつある気がする。ちよつとやりすぎたよな……。薄々感づかれているかもしれないけど。

「そうですか……。もう少し、お話ししたかったです」

「僕も残念ですよ。今度会つ時は、じっくり話しましょ

う」と、アオイにキスされた。

唇を離し、妖艶な笑みを浮かべてアオイは笑つ。

「次に会つときは、素敵な言葉を私に下さいね

そう言つて、意味ありげにアイリを一瞥するアオイ。それを真剣な表情で受け止めるアイリ。

諸悪の根源はアオイだな。

しかし……氣恥ずかしいな。国一番の巫女様にキスされるとか。それをリース嬢やフイーに見られているとか。お返しと言わんばかりに、僕はアオイの耳元に口を近づけて、僕の声でこいつ言つた。

「今度は僕のハートを盗みにいで。それで相手だ」

ぱつと顔を赤くするアオイ。可愛いな。

そして、僕は最後になつてしまつたが、プレゼントを渡す。

「どうぞ。僕の代わりだと思つてください」

そう言つて、徹夜で作った、にゃんこの人形を渡す。アイリ達にはもう渡してあるので、最後になつてしまつたが、一番渡しておきたかったのはアオイだ。しばらく、会えそうにないからその保険に。

「僕が君を守れそうにないからさ」

「やっぱり、優しいんですね。マモルは

微笑みながら、アオイは僕の名前を呼んだ。

優しい、ねえ。どうかな？

でも僕は、『大事な人を守る』魔王になるつもりだから。父さん達にもらつた名前は、大切にして行くよ。

## Hプローグ（後書き）

ここから先はあとがきです。本編とは関係のない話や、裏話が長々と続きます。

興味のない方、そういう内容が嫌いな方は、どうぞ読み飛ばすなり、プラウザのバックボタンを押して下さい。

これにて、第一章、『純情な生け贋と黒のマモノ』は終了??ではなく、あと一話だけ付け足しがあります。  
区切りが良くなかったので、次話とさせていただきました。

さて、実はこの章、更新を始めたその日から、ストックがありませんでした。よくもまあ、毎日更新出来たなあと思っています。  
ひとえに、皆様の評価や感想があつたこと、それをランキングとしてみれた事が大きいと思います。

誤字脱字の多いこの作品を読んでください、ありがとうございます。

そんな裏話がありこの章の内容も、当初の予定から一転三転としていたりします。そのため、要所要所、変な部分があつたり、説明不足になつていてたりします。あまり突っ込みず、しかし疑問に思った時には感想を頂ければ、何か返事は返せると思いますので、お気軽

「どうぞ。

さて、次章の事ですが……決まってません。

こつしたい、といつ展開はあるのですが、それを一つの章に出来ていません。

そのため、少し時間が空くかもしません。ドライアイになりつつあるのもあって、執筆時間が削られますし……。

ただ、主人公とは別の所での物語は完全に執筆出来ますので、要望があればそちらを書いていこうかと考えております。

以下、その簡単な概要。

『魔王が世界征服に動き出し、魔物の活動が活発なった。

魔王のドラゴンに連れ去られる姫を見た事がある少年は、魔王を倒し、その少女を助け出そうと決意する。

そんな彼を支援した帝国。彼は力をもつて帝都から魔王討伐の旅に出で——最初の魔物、魔王に殺された』

という感じの話です。

話の内容じゃないですね……。

とりあえず、いつかは間章として書く予定ですので、その告知でした。

最後になりますが、感想・指摘など、ありがとうございました。  
そのために更新しているようなものなので、本当にありがたいです。

これからもよろしくお願いします。

「ねえ、アオイはあいつのビニが好きになつたの？」

フİYEーがアオイにそう尋ねたのが、始まりだつた。どうやら、以前もそんな話をしたらしい。

「一途な所……いえ、一途だつたところでしようか」

「だつた……って、今は一途じゃないってこと？」

「そうみたいですね。何でも、一人の女の子を愛し続けるのは馬鹿みたいだ、だそうで」

「……何それ。まるで昔、誰か一人を愛し続けたような台詞じやない。信じられない」

呆れたような、驚いたような表情をフİYEーが浮かべている。

……確かに、変化しているときの彼は、凄く胡散臭い。

「……」

だから私はいつも通り何も言わなかつた。

そう言えれば、私は結局あの人の事を何も知らない。依存しているけど、何も知らない。

……何故か分からぬが、彼と一緒に居ると心地良い。だから、離れたくない。

「昔、彼が付き合つていたときの話、聞きましたか？」

「付き合つてた！？　あいつ、誰かと付き合つてた事あるのー！？」

「本ですか！　聞かせてくださいー！」

「…………？」

信じられなかつた。

あの人ガ、昔誰かと付き合つていた？　なのに私があんなに誘惑しても何もしてくれないの？……私はそんなに魅力がないのかな。フイーはあつけらかんとしていて、リースが妙に食いついていた。

「あつ、幼なじみでしたっけ。でも、彼は恋してたみたいですね？」

「レイさんにもそういう事あつたんですね……。意外です」

意外。

私と一緒にいるとき、彼はそう言つた感情はあまり見せない。恋慕ではなく、ただ人の温もりが恋しいよつな、そんな感じだ。

……なんか、少し悔しい。

「彼は凄く好きだつたみたいで、その人のためなら死んでも良いと誓えたそなんです」

「……あのおつさんかねえ」

フイーはさつきから驚きっぱなしだ。

……羨ましい。私も、そこまで誰かに愛されてみたい。奴隸のように扱われて来たから、それは……凄く羨ましい。

「だから彼はその人がどんな事を頼んでも、文句も言わず笑顔でこなしてみせたそなんです」

「……凄いですね」

「ただ、あまりにも自分の意見を出さないから、その人に言われたらしいです。『あなたは自分の意見がないの？』と

……もしかして、私もそうなのかな？　いや、そうだったのか。

だから彼は、私に嫌な事は嫌と言えるようになつてと言つた。あと、好きな事を好きと言えるように、と。

私は……結構わがままな事を言つている。

彼があつさんの姿をしているときは、なんだか嫌で近づかない。その時間が長いから、彼が本当の姿のときは精一杯甘えている。

……私に依存してほしい。私から離れて行つてほしくない。

「ただ、彼はこう答えたらしいです。『いつか僕の凄い我が儘を聞いてほしいから、今は貸しを作つてるんだ』と

「凄い我が儘？……変な性癖でもあるんでしょうか？」

リースがそんな事を言つた。

……え。そつか。そうだつたのか。

それなら、確かに彼が私に興味を持たないのも分かる。……言ってくれれば応えるのに。

「いくら何でも、それはないでしょ……。それで、あつさんはなんて言つたの？」

「いえ、その我が儘は言えなかつたみたいなんですね。その人が別の人を好きになつたから、と。それと、最終的に死別したと

「…………」

きつと、あの人は最後までその人に恋をしていたのだろう。

本当に……羨ましい。

私も、彼にそこまで思われたい。私は彼に依存しているけど、彼はどうなんだろう？……離れて行つちゃわないかな？

「ただ、なんと言いたかったのかは、聞いています」

「……へえ、なんて？」

「教えてくれませんか？」

「…………ほしい」

私は、その言葉を言われたい。  
だから、どんな言葉か聞いておきたい。  
アオイは、興味津々の私達を一瞥して、謳つよう言つた。

『あなた一人を愛していいですか？』

それは、とてもロマンチックなお願い。

「私は、そこまで情熱的に愛せる心を持つたあの人に、愛されたい  
んです」

そう言つて、アオイは笑つた。リースやフİYEーが口元に手を当て  
て、頬を赤く染めている。

私は……少しだけ頬が赤かつた気がする。

そして、私を見てアオイは言つ。

「今は仮面を被つて本心を隠しますが、きっとこの想いは、その  
仮面を通して伝わると思つてます」

……そつか。

彼はどんな姿をしていても、彼なんだ。

なら、私の想いが伝わりやすいように、もっと側にこう。

やはり、あの人は優しい。

私があまりあの姿で近寄られるのが嫌いなのを知っていて、私に

触れようとしたとき、少しだけ躊躇した。

でも、私が困っているのも見過せないから、そつと私の肩に手を置いてくれた。

私は、この人に愛してほしい。

だから？？。

「そうです。私にはこの人がいますから」

そう言つて、私は彼に強く抱きついた。いつものように、この胸の熱さが伝わるように、ぎゅっと抱きしめる。けど、私が本当に言いたい言葉は、違うかな。多分、本当に私が言いたいのは？？。

私は、この人？？マモルがいいんです。

優しい、私の王様。

あなたは私を愛してくれますか？

## プロローグ1（前書き）

9／24日、内容を大きく変更致しました。

## プロローグ1

思えば、出会いから胡散臭いおっさんだった。

なにせ最初の言葉が、「愛と情熱の戦士です」なのだから、取り立ててその胡散臭さを語る必要はないだろう。

僕は彼のそんな物言いに、何言つてんだこのおっさん、と至極マトモで、面白味もない感想しか抱かなかつた。

けれど、レイが孤児を引き取つたり、虐げられる人達に救いの手を差し伸べたりと、旅をしながらそんな事をしているのを見て、少しずつ僕はレイを見直した。

というか、孤児で虐げられる……僕がまんまそれだつた。

記録上で僕が死んでから、僕はレイに引き取られてランベルグ帝国以外の国を色々と旅をしていた。

魔王だったので六歳の少年を殺しました、と大々的に発表出来るはずも無く、帝国は魔王を倒したとだけ発表した。その結果、僕は普通に顔を出して街を歩けていた。

旅の医者、といつ名の胡散臭いおっさん??レイ。彼はその日のお食事と寝る場所、という簡単な報酬で治療を行なつていた。たまに、金持ちの貴族からは馬鹿にならない金を奪い取つていたが。いや、それこそが正当な報酬なのだ。

レイの扱う魔法——それは『憤怒』。

最凶にして最悪の属性。最强でも最良でもない、扱いづらい魔法。それでもレイは、それを使いこなしている——よつに見えた。僕は知らなかつたのだ。

『憤怒』属性の魔法は、リスクを伴つ事を。

僕とレイは、四大大国には含まれない小国、ウインドル王国の王様に招待されていた。

一応、招待としておこづ。

「……貴殿が『不可能を可能にする』と言う旅人か？」

王、ギルバ・ウインドルは自分でそう言いながら、疑いの眼差しを僕らに向けていた。大丈夫、僕も仕方がないことだと解かっている。

『不可能を可能にする』というだけでも怪しいと言つて、王座に腰を据えたギルバの前にいるのは、小汚い黒のマンツに身を包んだ赤髪の男と、フードを深く被つた少年なのだ。

謁見の間に相応しい真っ赤な絨毯に、黒い汚れが付いているようだった。

そして……。

「滅相もございません。私はそんな小つ恥ずかしい名前、名乗つた覚えはありません。何ですか、それ？」

尋ねた相手、レイもきつぱりと否定しているのだから。

その物言いがどこか皮肉めいており、ギルバ王のこめかみに青筋が立つた。なんと言つか、その言葉に微塵も畏敬の念が無いのだ。形だけはやけに美しい片膝立ちが、妙に気に障るのではないだろうか。隣で同じようにしている僕には、頭下げてやるから機嫌良くしろよ、なんて顔に書いてあるのが見えていた。

顔を隠した少年に、不遜な態度の男。

それには脇に立っている王家に忠誠を誓つた騎士や、国に仕える大臣達が目つきを鋭くしたが、ギルバ王には見えていないのでレイは全く気にしていない。相手が怒りをあらわにしたら、更に嫌味っぽく反応するんだろううけど。

「王様、一つ申してもよろしいですか？」

「……なんだ？」

こめかみに指を押しあて怒りを抑えながら、ギルバ王は一応聞き入れた。

唯一の救いは、レイが敬語を使うと言う点だらう。それがなければ、騎士達は今にも切り掛けりそうだった。

「一体どうしてその、ふ、不可能を可能にするだか何だか知りませんが、そのような輩をお探しになつておられるのですか？ 王都到着と同時に、攫われるようここに連れてこられた私にも解るようにな説明していただきたい」

最後は一息、レイが怒つている事は明白だった。

それでも王に対する態度ではないだらう、というのが僕の思いだつたが、レイの考えも解らないでも無い。

だが、今のギルバ王には一刻も猶予がなかつたようだ。

ウインドル王国は農業が盛んな国だ。むしろ農業しかない。

その農業大国では最近日差しが強く、水は涸れ作物は萎れ、一種の飢饉じみた現象が起きていた。

だが、ギルバの悩みはそれでは無く、愛する娘の病気だった。

一国の王がそれではまずいだろうと思われるが、しかし彼の娘、ミリア・ウインドルは民に愛される良き姫だった。人当たりが良く、平民も貴族も分け隔てなく接し、その優しげな微笑みは人々を天にも昇らせると言われた程だ。

そんな彼女が病気になつた。皮膚に黒点が大量に現れ、ミリアは寝込んでしまつた。さらにそれに合わせたように国は飢饉となつたのだ。

国民（ギルバもその一人だが）の間では、ミリアが病気になつたから飢饉となつた、ミリアの病気が治れば飢饉も止まるという噂が囁かれているのだった。王であるギルバが娘のために国中、さらには諸外国の医者達に病気の治療を依頼したが、誰も治せる者はいなかつた。

最後の手段として、藁にも縋る思いでどこからか聞きつけた『不可能を可能にする』人物を探し出したのだ。

その人物は、燃え上がるような紅の髪をしているとだけ語られ、それ以外の容姿は語られていない。

ただし、その話は恐ろしい程ある。

アルテミウス山の頂に住むと言う、天空の支配者たる竜王と互角に渡り合つた、不死の魔族であるヴァンパイアを敗北させたなどの戦歴。毒素溢れる鉱山から生きて帰つた、蔓延る伝染病を治したという経歴。

それはどれも不可能と詠われた行為。

もしその人物が実在するのなら、それは間違いなく娘も救える、そうギルバは考えた。

そして國中から赤髪の人物を探し出した。

赤髪はそれほど珍しい訳でもなく、たくさん見つかったが、いずれも該当者はいなかつた。

そして、最後に見つかったのが、今日の前にいる男??レイだつたのだ。

「なるほど……、王様も大変ですね。ですが私は、不可能を可能にする??そんな者ではないので、帰つても良いですか?」

「…………やはりそうだったか。済まなかつたな」

「いえいえ。子を思う親の気持ちは解らないでも無いですから。頑張つてください」

そう言つてレイは踵を返す。ちょっと驚いたが、僕もそれに続く扉へと手をかけ、レイは振り返らずに言つた。

「無理矢理連れて来て、見送りも無しですか。……駄目な国ですね。一人の人間で国が一喜一憂してゐるなんて、ね」

何言つてんだアンタ!?

謁見の間に居た者達全ての額に青筋が浮かび、騎士の一人が慌てて僕らを追つて來た。

謁見の間を出る時、居心地の悪い空気が支配してゐたのは僕には関係ない。悪いのはレイだ。

レイは城内を勝手に歩き回つていた。正しく言えば、物色していた。そんなレイを僕は、少しばかり困惑した表情で見ていた。

そんなレイに怒鳴りつける騎士が一人。

金髪のポニー・テイルで、中性的な顔立ち。胸元に膨らみがあり、女性であることが伺える。

「旅人殿！ いくら何でもあのような振る舞いに物言い、無礼では

ありませんか！」

「はい？ 知りませんよそんな事。私は少々苛立つてているんです。私の都合も考えずに連行紛いに連れてこられれば、辛氣くさい爺との面接。美人の王妃が出迎えるのならばござ知らず、野郎と対談して何が面白いというのです？ まして、私はこの国の住人でもない。敬意を払う必要など皆無！」

レイは吐き捨てるようにそう言つて、あちらこちらと城内を物色する。

……あー、怒ってる。何が原因かは知らないが、怒つていい。対して騎士は律儀にそれに答える。

「……その通りではありますが、我々も必死なのです。飢饉で国内の作物はやられ、他国からの輸入に頼っています。物価が高まり生活が厳しくなり、国民も暗くなつております。ですが、姫様が戻らなければ國も活氣づくのです。だから、このよつな無礼を働いてしました」

「そうですか。随分と愛されているようですね、ここのお姫様は」

レイは実にどうでもよさそうに相槌を打ち、城の物色を続ける。城の中庭には澄んだ水をアーチ状に放射する噴水や、彩りの花が咲き乱れる花壇がある。城内は大理石の床、壁には絵画や壺、宝剣などが飾られ、隅々まで掃除がなされている。たゞがは一国の王が住む城といった風情であった。

一通り見て回り、レイは小さく呟いた。

「ここに割く人員を地方に派遣すれば良いでしょうに。王って人は、いつどこで見ても無駄好きなものですねえ」

「は？ 何を言つておられるの？ って、旅人殿！ そちらは駄目です！」

レイが階段を登ろうとした所を、騎士はその体を割り込ませる事でなんとか止めた。僕はそんな一人の様子をぼけーっと見ていた。

「なんですか。ここまで見させてくれたのなら、もう全部さらけ出してくれるも良いでしょう？ それとも、あなたがしますか？」

「意味が分かりません！ ここから先は、姫様の部屋です。何人足りとも通す事は出来ません！」

「なんですか、行きかけの駄賃に姫様の顔でも拝見しようと思つていたのに！ ここに来た意味があるでない」

「それならば、これで十分でしょう！」

そう言つて、騎士は壁にかかつた絵画を指差した。

それは、一人の少女の絵。

肩程までの輝く金髪に、宝石のような金色の瞳。見る者を虜にしそうな微笑を浮かべた少女、ミリア姫が描かれた絵だった。

「…………」

レイは少し放心したようにその絵を見つめ、素直に踵を返した。あ、これはなんかやるな、と僕は思ひながらその後を付いて行く。ほつと息を吐き、騎士はレイを押すようにして城門へと案内した。気付いていないかも知れないが、あんたはかなりの美人だ。ちょっと抵抗して密着してもらつて、レイは顔をにやけさせているんだよ。

「良いものを見させていただきました。その点は感謝します。ですが、一度目は私も素直に招待されませんよ」

そう言い捨て、レイは城を後にしたのだった。顔をニヤ付かせた

ま。

ちらりと僕が背後を見ると、見送りに来た騎士がブンスカ怒つて  
いるのがよく分かつた。

「……レイ、何を考へてるんだ？」

「うふふ、ちよつとしたサプライズですよ。サプライズ。勿論、  
助手の君にも手伝つてもらいますよ？」

ああ、あの姫様可哀想。きつとトラウマレベルのサプライズを喰  
らう。

けど、役得役得。あの美少女とお話し出来る訳か。レイが仕出か  
した後、僕がフォローする。下げる。うん、僕は助手として  
はかなり有能じやないか？

月夜が綺麗な晩だつた。

僕らは城壁を跨いで、城のある部屋へと向かつていた。

空中を歩いて、城壁を跨いだのだ。見張りが蟻のように小さい。  
足がすくむ高さだ。

「良いですか？ マナとは魔力がなければ存在しない物と囚われが  
ちですが、ちゃんとそこに存在します。目に見えない形ですが」

レイは得意そつと空中でそんな事を語つている。

僕らの足下には、一見何もないように見える。空中を歩いている  
ように見えるが、実際は風のマナが足下にあつて、それを足場に移  
動しているだけなのだ。

風のマナは真空の箱。それをたくさん集めて、足場とする。

風のマナを自分たちの足下にだけ展開する。踏み終えたら、次に踏み出す足下に展開する。こうする事で、それほど多くない風のマナで空中を歩く事が出来る。

マナを集めると感知されるのは、微量の魔力が体内から流れ出しているからだ。実際の所、魔術師に感知出来るのは、マナではなく魔術。風のマナを集めたら、集めたうちの少しと魔力が反応して微弱な魔術が出来上がる。それを感知し、マナが集められたと魔術師は知る訳だ。

この空中闊歩は魔力を一切放出せずに行なう。逆に、少しでも魔力が流れ出でてしまうと足下で風の魔術が完成し、足場を失つてノーロープバンジーだ。そのため、魔術師にこれは感知されない。

少ない魔力しか持たないレイらしい技術だ。

僕なら、有り余る魔力を運動エネルギーに変換して、一気に飛び越えるのだけど。そんな事をしたら、馬鹿みたいな魔力を感知されてしまうのでしないが。

お田端での部屋、ミリア姫の部屋のベランダにそつと降り立つ。僕らは覗きでもするように？？？実際覗きだが？？？気配を消して部屋を覗き込んだ。

少女？？ミリア姫は泣いていた。

天蓋付きのベッド、ふかふかの毛布に包まれて、ミリア姫は枕が濡れるくらい泣いていた。

「……行きますよ」

「…………」

レイに促され、僕は無言で頷いた。

こういう場面は、何度見ても慣れない物だ。

レイがそつと、まるで何度もこんな事をして来たように、慣れた手つきで音立てずに戸を開けた。ミリア姫は気付かない。

レイはそろそろと足音を立てずミコア姫に寄つて行く。その歩みは、熟練者の物だった。

「ミコア姫ですか？」

さめざめと泣いているミリア姫の脇に立ち、レイが優しげな声をかけた。

わお、なんだかとつても詐欺師っぽい。

顔を上げるミリア姫の顔を見て、レイが笑みを浮かべる。いつもの胡散臭い笑みで無く、優しげな笑み。

「ですね。あの絵と一緒にです。その綺麗な金色の髪に瞳。間違いない  
い  
「……誰？ ビジヤット！」

ミコア姫がそう思つのも当然だらう。

この部屋の左右上下の部屋にベランダは無く、この部屋は地上百メートルの高さにある。さらに魔術無効の結界が張られ、何人足りとも侵入する事ことは出来ないはずだった。  
マナを集めるだけでは、魔術ではないのだ。

「おや……、これはなかなかに酷いですね。御愁傷様」

レイはミコア姫の質問には答えず、ミリア姫の病に侵された顔見て口元を歪めた。

黒い点々が顔中、否、体中に溢れている。病気に詳しくない僕でも、これはあまり良くない類いの病気だと分かった。

そんなレイの態度に、けれどミリア姫は自虐の言葉を吐いた。

「そうよ。とても見られた顔で無いでしょう。何？ 哀れみにでも

来たの？」

「……治る見込みは無いのですか？」

「治るわけないわ。どんな治療魔術を用いても治らなかつたのよ。帰つて。私に構わないで」

不貞腐れるよつにミリア姫は枕に顔を埋めた。子供っぽい仕草が可愛いいな、とか僕は場違いにも思つていた。

侵入者を咎めるでも無く、自虐の言葉を吐く少女。もはや自分と言つ可能性を完全に見切つた様子。自分が犯される、などという被害妄想を出来ないくらいに。

対して、レイは嘲笑うよつと口元を歪めていた。

「いいですね！ 最高です！ 実に不愉快極まり無い！ もの凄く苛つきます！」

急に声を荒げるレイの様子を見よつと顔を上げるミリア姫。

部屋の内部を風のマナの膜で覆つてるので、外には音が漏れづらい。

「？？？…！」

と、レイは荒々しくベッドに乗り上げ、ミリア姫の頭を鷲掴みにした。驚くミリア姫の顔を枕へと強く押し付け、抵抗するミリア姫を強い力で押し付ける。

「これで声が漏れる心配はありませんね。安心して身体を預けてください」

妙に甘つたるい声。王族の彼女なら知つてゐるかもしれない。情欲に溺れた男の声だ。

今この状況で安心出来る奴はないだろうよ。  
まあ、見慣れた僕としては安心に近い何かを持つてているけど。

「レイつ！？ 何を？？」

けれど僕は、あえて慌てた振りをする。

まるで、これが予定外の出来事のようだ。

それがミリア姫の恐怖心を煽る。

「これは私のただのハツ当たりです。無理矢理城に招待されて、少々気が立っているんです。その憂さ晴らしを、原因であるあなたでわせてもらいますよ」

レイはミリア姫の頭を鷲掴みにした手とは反対の手を掲げる。

ミリア姫からは見えないだろうが、その手は赤々と燃える炎を灯している。

だが、ミリア姫には狂氣とも取れる笑みを浮かべたレイの顔が微かに見えていた。というか、レイはあえて顔を近づけている。病に掛かつて尚美しい顔が恐怖に飲み込まれている。

レイは笑みを顔に張り付け、その手をミリア姫へと近づけ、そして？？。

「？？ツー！」

ミリア姫の体を瞬く間に炎が包み込んだ。  
じわじわと、肉の焦げる匂いがした。

「……あ、れ？」

「気付いた？」

「ツ！？」

目が覚めて、聞き慣れない僕の声にピクリと反応し起き上がる//  
リア姫。知らない男がそばにいるところの//、元の//ピクリとしか反応しない。

レイのときもそつたが、どうにも反応がよろしくないお姫様だ。貞操観念が薄い気がする。

あれから一時間程度しか経つておらず、夜空を星と月の光が彩つており、それが部屋を照らしていた。

「私は……あの男に……っ」

「落ち着いて鏡を見て。それで全てが分かるから」

思い出しきみる顔を青くする//コア姫。どうやら、かなり怖かったようだ。僕だって怖いよ、三十代のおっさんに頭驚掴みにされてベッドに押し倒されるとか。おまけに変な笑みを浮かべてや。演技にしても、治療しに来たんだからもうひとつと穩便に出来なかつたのか？

鏡を見せようとすると、途端、嫌そうな顔をして顔を背ける//コア姫。

そもそもか。自分の顔が見るのが、顔が見られるのが嫌になるくらい、黒い点は気持ち悪く、彼女の顔を醜くしていたのだから。

「失礼します」

と、僕は鏡を起いて彼女の手を取った。

白い手袋に隠された小さな手。隠された肌。その手袋を外し、その手を??肌を露にする。

「綺麗な手だ。それに、綺麗な肌だ。何を恐れる必要がある？ 君はこんなにも綺麗なのに」「あっ……」

ミリシア姫の口から、驚嘆と困惑の声が漏れた。

黒い点など無く、そこにはまつたらな白い肌があった。

「えつ……あっ、え？」

「ごめんな。気が立っていたのは本当なんだ。だから、ちょっと荒っぽい治療になっちゃった」

何がって、やり方が。もっと穏便に済ませようつよ。

「先ほどの……神聖術、ですか？ 彼は、一体何者なんですか？」

首を振つて少し考えた後、僕は答えた。

「魔法だよ。僕らは……魔法使い。奇跡の押し売りをしている者さ

「言えなかつた。言えるはずもなかつた。

『愛と情熱の戦士』だとか。

足が付いてしまいそのままのウインドル王国を出国して、僕らは街道を歩いていた。その足取りは、まさに追つ手を撒くとする犯罪者の物だった。

「……相変わらず、アクトイ」

「何を言つてるんですか、マモル君。これは正当な報酬です

ミリア姫の病魔を焼き殺し、その正当な報酬だと抜かして部屋を漁つた男が一人。その顔を一応伝えるべく部屋に残つた僕。僕がそれを伝えるのにどれだけ苦労したと思つてるんだ！

「お姫様の服なんて、そつそつ手に入る物じやないですよ？ 不治の病を治した報酬にはピッタリじゃないですか！」

変態だ。変態がここにいる。

「大丈夫です。新品を頂きましたから。……<sup>きらきら</sup>光るたくさん  
の宝石もおまけで」

一瞬見直しかけたけど、やつぱり……アンタはビリシヨウもない  
ダメ人間だよ！！

## プロローグ2（前書き）

9／25日、大幅に変更。

## プロローグ2

私は許嫁がいる。

幼い頃に一度しか会つた事がないが、カツコいいと言ひよりは可愛らしいと言う顔立ちだったのを覚えている。

気さくで、すごく美味しそうに私の作ったお菓子を食べてくれた。その頃の私が作っていたのは、泥団子だと言うのに。

そればかりが強く印象に残っている、私の許嫁。

この人なら、恋は出来なくても一緒に生きるくらいは出来るかな？

そう、幼い頃に私は思った。

けど、あれから十年以上経ち、全てが変わった今なら言える。

「やあクロナ！ 僕のことを覚えてる？」

揺れている。

体中の脂肪が、歩くたびにふるふると震える。ふさりとした金髪に、柔和な笑顔を浮かべて、彼は私に話しかけて来た。雪だるまみたいな体躯で。

……うん、間違いない。ガイ・ノーランド。ノーランド王国の王子。

彼が……私の許嫁だ。

私は、

こんな太った方とは結婚したくありません！

とは言えず、

「お久しぶりです、王子。お元気でしたか？」

愛想笑いを浮かべて挨拶をした。

私は昔から表情を取り繕うのが得意だ。今、内心ではかなり引きつった笑みを浮かべているが、それを表には出していない。はずなのに。

「……うん、そうだよね。」めん

と、明らかに落胆する王子。もの凄く申し訳なさそうに俯いた。  
え……、嘘。私の表情は完璧な笑顔のはずなのに。  
どうして……そんな悲しそうな顔をするの？

「王子、どこか具合が悪いのですか？」

「大丈夫。……クロナは優しいね。……こんな僕にも

ショボン、とする王子。

ぎやー！ バレてる！ 絶対にバレてる！？

私がとんでもない失礼な事を考えたのが、バレちゃってる！

でも、だつて！

いくら何でも、私より一回りも太ってるんだものー。ちょっと無理です！

……でも、分かっているはずだ。

「何をおっしゃいますか。反乱軍に追われる私を受け入れてくれた王子の方が、十分に優しいですよ」

私は、もはや彼と対等な立場にない。

民主主義を掲げた軍部の一部が反乱を起こし、城は陥落し、父様と母様は殺された。なんとか私は逃げ延びたが、私を担ぎ上げて再び王政にしようとしている貴族達があり、反乱軍が私を殺そうと狙

つてゐる。

今は、古くから付き合いのある、信頼出来る貴族の元に身を寄せている状態。だが、いつ反乱軍に襲われても可笑しくない状況だ。そんな私を受け入れようとする彼を……、私が拒めるはずがないのだ。

勿論、断ろうと手紙を何度も送った。だが、彼は一切の躊躇も無く来てしまった。その頃の私は、まだ彼がこんなに太っているとは知らなかつたので、それこそ白馬の王子様が現れたような気分で、意氣揚々としていた。

そして現在、少し後悔している。もつと真摯に断れば良かった……と。こちらには、断る材料はいくらでもあつたのだから。

……はあ。私は最低な女だ。

助けてくれる王子を、見て呉れだけで否定しようとしているのだから。

だつて、

「『めんなさい』……助けに来たのがこんな僕で『めんなさい』」

彼は、地に頭を付けて、泣きながら私に謝罪していた。

……違う。

謝るのは……本当は私のはずだ。

厄介事をそちらの国に持ち込もうとしている、私のはずだ。あなたを見て呉だけで否定しようとした、私のはずだ。

……だから。

そんな真剣な表情で、謝らないで。

「謝らないでください。私は凄く感謝しています。こんな状態でも、私を迎えてくれたんですから」

他に嫁の当てが居ないのかしら?

危険を冒してまで、私と結婚しようだなんて。

「ですが、本当に大丈夫なのですか？ 私が行く事によって、ノーランド王国に多大な迷惑が……」

「大丈夫です！」

と、王子は胸を張る。それを聞いて、少し安心？？、

「絶縁致しましたので！」

出来ないわよ！

何が大丈夫なの！？

「『めんなさい』

僕が最初に思つた言葉。

ノーランド王国は、四大国にも数えられない、酪農と漁業しか取り柄のない国だ。そんな弱小国の王子である僕。

そんな僕が四大国の一国、マクシアのクロナ王女と許嫁。

前世で、一学生として生を終えた僕には、勿体無い話だった。

僕はお世辞にもかつこ良くないし、強くもない。國も貧乏だし、国土の大半が一年中雪に覆われている。

何か訳ありなんだろう、そう考えていたのだが、出会った瞬間、それは間違いだと僕は気付いた。

柔らかな緑色の髪に、じつと僕を見つめる翡翠のような双眸。ふわふわのドレスに身を包んだ、可愛い女の子。

僕は思った。

どんな理由があろうとも…… 彼女は僕よりも良い男に選ばれるべきだろ、と。

彼女は神様に選ばれたような子だ、絶対に幸せになるべきだ、僕何かと結婚すべきではないと僕は思った。

僕は身の程を弁えている。

僕では、彼女を幸せにする事は出来ない？？ そう思つた。幸せにします、だから娘さんを僕に下さい、なんて言える訳がない。

僕には彼女を守るだけの力がない。略奪や暗殺しながら珍しくもない世の中、力が全ての世界。それなのに、このじ時世で彼女を幸せになど出来るものか。

彼女も、僕よりも素敵な人を見つけるに違いない。いつか僕はこの婚約を破棄されるだろう。僕は変な虫を寄せ付けないための口実に過ぎないだろう。

よし、ならば僕は、精一杯その役を演じようではないか。

この子を守る？？ それが僕の役目だ。

僕に出来る事なんて限られているが、それでも本気を出せばどうにかなるだろう。いつか彼女が恋をして幸せになるまで、僕は彼女を守りう。

そして僕は、ぶくぶくに太った。

「はあ……はあ……」

「クロナ、頑張つて。もつ少しで森に着く。そうしたら、少し休もう」

「は、はい……」

夜の帳が下りようとしていた。私達は反乱軍に追われ、道無き道を走つている。

王子が来てすぐだ。反乱軍が私の居場所を突き止めたのは、王子が付けられたのかと私は思つたが、どうやら屋敷の内部に情報漏らした人物が居たようだ。王子は馬車ではなく、船と徒步でここまで来たと言う。目立つのはその体格くらいだが、彼がここまで肥えた事は一族の秘密らしく、知つている者はいないと言つ。事実、私も会うまで知らなかつた。

知つていれば、私は否が応でも彼を拒んだのに……。歩くたびに揺れ動く、そのぽっちゃりとしたその体格は、私の好みではない。……はあ、私はやつぱり最低だ。

彼を拒むのは、自分が彼と結婚したくないから。彼がこの事件に巻き込まれない事を望んで、拒もうとは思わないのだ。

「クロナ、大丈夫？ 僕がおぶろうか？」

「えっ！？ いえ、大丈夫。あと少しなんでしょ？」

溜息が漏れた？ おかしいな、私は体面を取り繕つのは得意なはずなのに。

その暑苦しい身体に触れたくない、という一心で私は疲れ切つた足を動かす。

そういうえば、彼は随分と体力がある。

彼は私が何人も入りそうな大きな背嚢を背負つていて、私の荷物もそれに入れさせてもらつてしているのだ。  
無駄に太つてゐる訳じやないのね……。

なんとか森の中まで無事に逃げられ、私達は休憩する事にした。あまりのんびりとはしていられないが、休憩無しでこの森を抜けるのは難しいようだ。

「はい、これ食べなよ」

「ありがとう……あつ」

王子が背負っていた大きな背嚢から、水筒と紙に包まれた小石程度の物をくれる。包みの中身は……バター餡だ。

ノーランド産の乳製品は世界で一番良質。王子と許嫁になつて良かった事は、ノーランドから格安でそれと取引出来た事だ。バターケーキも本来なら金貨程度の価値があるので、毎月送られて来ていた。バター餡を口に含むと、口の中に広がる甘みに思わず頬が緩んだ。そんな私を見て、王子が頬を緩ませていた。

「……な、なんですか？」

「あつ、ごめん。何でもないよ」

そう言つて皿をそらす王子は、少し嬉しそうだつた。

「……あの、どうして来てくれたんですか？」

「来ちゃダメだった？」

「そうじゃないけど……」

来なければ私は死んでいた。けれど、どうにも素直に喜べなかつた。

と、茂みが揺れ動くような音が聞こえた。

「行こう」

「……はい」

私達はすぐにその場を離れた。  
差し出された彼の手を？？私は掴まなかつた。

だんだんと足音が接近して来ていた。  
それに伴つて、私達の歩みも速くなる。  
けど、私の足は限界に近かつた。

「きやつ！？」

「クロナ！」

足がもつれて、転びそうになる。  
と、それを支えてくれる彼の手。  
その手は、温かかつた。

「居たぞ！」

「！」

はつと声のした方向に顔を向けると、反乱軍のマークがある鎧を  
着た男が居た。

王女は一瞬で背嚢を男にぶつけ、私の手を取つて走り出した。

「ごめんなさい。私が声を上げたから……」  
「良いから！ 走つて！」

私達は森の中をがむしゃらに走る。

彼の巨体とは思えぬ俊敏な動きに、私は着いて行くのがやつとだ  
つた。

「きやつー。」

と、不意に彼の動きが止まって、必死で追っていた私は彼の背にぶつかった。

柔らかい……。

「どうし??」

「ここまでです、姫様」

私が彼の背中から前を覗くと、十数人の追っ手が、私達を囲んでいた。

男達は皆そろってにやついた笑みを浮かべ、一いつ瞬を見ていた。王子が私を庇うように立ってくれているけど、その背は震えている。

「手間かけさせやがって、この野郎」

荒々しい歩みで一人の男がこちらに寄つて来て、突如王子を蹴り飛ばした。

「ぐあつー。」

蹴り飛ばされ、地面を転がる王子。

私は、恐怖で動けなかつた。鞘から剣を引き抜く男。

ぎりりと、鋭い刃が光つっていた。

「さあ姫様、ご家族の元へ旅立つてください」  
振り下ろされる剣。間近に迫る刃が、どうしようもなく怖かつた。視界の隅で、王子が起き上がりこちらに来ようとするのが見える。

けど、間に合いそうもない。

だけど。私は駆け込んでくる王子に向かつて手を伸ばす。最後の希望を掴むよ！」

そして私は、再会して初めて彼の名を口に出して叫んだ。

「ガイイイイイイー！」

ふつと、彼が笑みを浮かべたような気がした。

瞬間、ガイの身体が消えた。

気付けば、私の身体が宙に浮いていた。暖かなぬくもりと柔らかな感触に包まれて。

それは、まるで魔法のようだ。  
私を抱えるのは……。

「クロナに手を出すな。……殺すぞ」

ガイがキッと男達を睨みつけていた。

その気迫に一瞬氣圧される男達。私も、少しだけ震えてしまった。

「ごめんねクロナ、怖い思いさせちゃって」

そんな私に気付いて、ガイは優しく微笑み、私を下ろした。  
だから……怖い思いをさせちゃったのは私でしょ？

私に関わらなきや、ガイはこんな怖い目に遭わなかつたのよ？  
手が震えてるし、すごい汗。強がっているのはバレバレ。

「餓鬼が調子に乗つてんじゃねーぞ！ 怪しい術使いやがつて！」

と、先ほどの男が剣を振り上げこちらに向かつて来る。  
素早い動作で剣を振り上げ、そして??。

男は横に派手に吹っ飛ばされ、激しく木に激突した。

男が先ほどまで立っていた位置には、ガイが蹴りをしたような姿で立っていた。

それはまるで、瞬間移動でもしたかのよう。

ガイは足を下ろし、静かな声で残りの男達を睨む。

「クロナに手を出すな。容赦はしないぞ？」

どうしてか、私には彼が本当の王子様に思えてしました。  
今は王子様じゃないのに。

-----

「大丈夫。君ならやれる」

師匠は、僕にそう言つて旅立つて行つた。

僕には、クロナを守れるような力はなかつた。  
クロナが亡命して来て、匿つて幸せに出来るだけの国力はない。  
クロナが悪漢に襲われて、助け出せる強さもない。  
だから僕は、クロナとの結婚を最初からダメだと思つていた。  
それでも、僕は力が欲しかつた。彼女を守るための。  
でも、父親は剣を教えてくれない。格闘技ならなんとか習つたが、  
それも齧つた程度だ。こんなんじやとてもクロナを守れはしない。  
だから僕は、魔術を習つた。

魔術師だが魔術師じゃない？？魔法使いの弟子になつた。

「……こいつ！ 魔法使いか！？」

男が僕の魔術を見て、そう叫んだ。

僕の身体は一瞬で何十メートルと移動する。男達の剣が貫くのは、僕の残像だ。  
確かに、ここまで圧倒的な力だ。魔法に見えるかもしれないな。  
だけど。

「魔法使い？ ……だったら良かつたのにな」

魔法使い。皆は彼らを嫌うが、僕は彼らに憧れている。

魔法は、奇跡そのものだ。どんな逆境いようと、それを一瞬で覆せる力。僕は……そんな力が欲しかった。

手に入らなかつたから、僕は太つたのだ。

魔法は条件さえ満たせば、それ以外に支払う物は何もない。  
だが、魔術は違う。

「構う事はない！ 姫様さえ死ねば問題は？？ぐはっ！！」

クロナを殺す、そんな意味の言葉を叫ぼうとした男を、僕は軽々と蹴り飛ばした。身体の節々に痛みが生じるが、そんな副作用は些細なもの。

「……なんだアイツ。気持ち悪い

と、男の一人が呟いた。  
僕は苦笑いせざるを得ない。

「はあ……はあ……」

身体から溢れ出す異常な湯気。だらだらと滴り落ちる大量の汗。醜態だ。例え一国の王子で無くとも、こんな醜態は衆目に曝したくはない。

だからこそ、僕以外にこんな魔術を使う奴はないはずだ。

魔術は、エネルギーを効率よく使用する技術だと、僕は教わった。魔力は、魂が生み出すエネルギーと言われている。それはマナと反応して、元のエネルギー量を超えるのだと。少ないエネルギーを莫大なエネルギーに変える、それが一般的な魔術だ。

僕は魔力を少ししか持っていない。いや、ほとんどないと言つても良い。だから、僕は魔術師になることも無理だと言われた。マナと反応させるだけの魔力を放出出来ないのだと。

だが、僕は諦めなかつた。

魂が生み出していくないエネルギーの元でも、魔術の考え方を使えるのではないか？ マナと反応しない、ただのエネルギーを効率よく使用する事も、魔術の考え方を使えば出来るのではないか？

脂肪をたくさん付けておいて、そのエネルギーを効率よく使用すれば、僕でも人間離れした力を使えるのではないか？

それが、僕の魔術。

脂肪をそのままエネルギーに変換する魔術。

太らなければならぬ、しかし肉体が強靭でもなければ耐えられない魔術。使用時には、夥しい量の汗をかき、匂いも尋常じやない。世界で最も醜い魔術だと、僕は自負している。

だが、僕は構わない。僕が嫌われようと、彼女が幸せになるのならば問題ない。関係ないと言つても良い。事実、関係ないだろう。僕には、これしかなかつた。彼女を守るための絶対的な力が、これしか思いつかなかつたのだ。

「はあああああっ！！」

脂肪を運動エネルギーに、その速度と体重を拳に乗せ、重たい一撃を男達に喰らわせる。

僕の脂肪がどの程度持つか分からぬが、長期戦は不利だ。爆発的な移動で、足腰にがたが来ている。既に風船みたいな体格から、若干しほんでしまつた。

大半の男達は僕の醜悪な姿に恐れ戦き、距離を取つてゐる。だが、僕らを囲むと言うそれだけは忘れていない。

と、一人の甲冑を着た男が前に出てくる。

「狼狽えるな！ 奴は丸腰、しょせん素手だ。恐るるにたら？？ぎやつー？」

僕は一瞬で男に近づくと、脂肪を運動エネルギーではなく電気エネルギーに変換して、甲冑に触れた。びかりと甲冑が青い火花を発し、じゅつと臓物が焦げる匂いが鼻についた。

素手？ そんなの関係ない。

今、僕の身体は生きる魔術だ。熱も電気も音も、エネルギーが起こす事象であれば、この身体で具現化出来る。

だが、僕がやるべきなのは、クロナを逃がす事だ。あいつ等を倒す事じやない。

思わず伏兵に狼狽する男達。

と、自分から攻撃に移らない僕を見て、リーダー格の男が命令した。

「落ち着け。盾持ちで包囲しろ。奴の弱点が分かつた」

ますい。

盾を貫こうと、肉を切れなければ相手を無力化出来ない。

残った脂肪を運動エネルギーにして、クロナを抱えて逃げるか？  
僕の移動速度ならば、すぐにでもこの場を離脱出来る。

僕はコイツ等を皆殺しにしたいわけじゃない。

……そうしよう。

僕が足に力を込め、移動しようとした瞬間。

不意に、身体の動きが止まった。

「が、ガイ……」

クロナの驚いたような声に、僕は自分の異変に気付いた。

副作用の湯気が消え、身体が痩せてしまっていた。雪だるまみたいな身体から、一般的な体躯にだ。

早い。予想以上に脂肪の消費が早過ぎる。

筋肉が残つており、ガリガリとまでは行かないが、明らかに変異した僕の身体を見て、リーダー格の男が感嘆の声を漏らした。

「貴殿は素晴らしい男だ。彼女を守るため、そのような醜悪な肉体であったのか……、ガイ殿」

「えつ……」

クロナが、驚いたような顔で僕を見つめた。

おかしいな、一体なんでバレたかな。

つて、そうか。今の僕は絶縁されたとはいえ、ノーランド王国の王子様の身体に戻ったんだもんな。太る前の僕は、ちゃんと人前に

出ていたから知っているのだろう。

「そうだよ。だれが好き好んでこんな体形を維持すると思つてる？ 分かつてるなら、助けてよ。僕は太ることでしか、力を得られない かったんだ。クロナを守るには……」

「それは無理な相談であろう」

諦めるな。考える。

僕は、何としてもクロナを助けるんだ。

僕は残つた少ない脂肪を運動エネルギーに変換し、

「？？ぎやつ！？」

盾に激突した。ぐわんと、鉄が響く。  
まずい、バレたか。

「その動き、かなり速いが直線的にしか出来ないな？」

そうなのだ。

僕に出来るのは、速さの爆発的増加。移動中に方向性は変えられ  
ない。移動中にもう一度魔術を発動させる事が出来れば話は別だが、  
僕はそんな思考の加速なんか出来やしないのだ。

ぐらぐらする頭でも、リーダー格の男がクロナに近寄つて行くのが分かつた。

クロナは足がすくんでいいよつで、動けないのも見えた。  
でも僕は、動けない。

既に痛みで体中の感覚は無くなっている。体脂肪率二十七パーセ  
ントの身体に、大した筋肉なんて付いていない。身体を動かすのも  
魔術を使っていたガタが来た。

「が、ガイ……」

僕の耳に確かに届く、クロナの震えた声。  
その恐怖に染まった声を、僕は聞きたくなかった。  
クロナには、幸せになつてほしかつた。  
頭が痛い、体中が痛い。脂肪もない。

希望も無いんですか？

「クロナアアアアア！…！」  
「ガイイイイイイイイ！…！」

足りなかつた。

あれだけ太つたのに、まだ足りなかつた。

やつぱり、僕では無理だつたのか？ 身の程知らずだつたのか？

伸ばした手は、クロナには届かなかつた。

「安心しろ。君もすぐ姫様の元へ連れて行つてやる」

男が剣を振り下ろした。  
ぞぶり、と。

深々と肉に突き刺さる音が僕の耳に届く。

けど、血は一滴も落ちなかつた。

「さすがは私の弟子、上出来ですよ。後は私に任せなさい」

凛とした声が、その場に響いた。  
それは、聞き覚えのある声だった。

「えつ……？」

彼は、少しの間だけ僕の師匠だった人。  
銀縁眼鏡に、詐欺師のような人の良さそうな笑顔。  
一人のおっさんが、クロナを庇つて剣で刺されていた。

「貴様……何者だ！」

リーダー格の男の問いに答えは無く、代わりにゆらりと、どこまでも赤い炎が視界を埋め尽くした。

男は慌てて一步引くが、それに意味はない。

「ぐうつ！？　が、あ、ああ？？」

剣が発火し、その形状を一瞬にして失った。その炎が男をも飲み込み、炎の塊が生じる。

そして、消し炭も残さず、文字通り跡形も無く消滅した。

「酷いですね……、彼女が何か殺されるような事をしましたか？理不尽ですね……、ああ、憎たらしい」

おっさんの独り言が、酷く不気味に辺りに響いた。

「う、うわああああああーー！」

追っ手の中の一人が、そう声を上げて走り出した。それが引き金となつて、追っ手は蜘蛛の子を散らすよつに逃げ出す。  
だが、

「逃がしませんよ？　まさかあなた達、自分たちが今までやつて來た事が、許されるると思ひなんですか？　民主主義が何ですか？　人を殺せる大義名分だと思つてるんですか？」

逃げる男達が、おっさんの睨みを受けた瞬間炎上して行く。  
圧倒的。  
全てをぶち壊すような力。

？？魔法。

「何者？　そんなの決まつてゐじやないですか？」

人が炎の塊へ、炎の塊が無へと変わつて行く、地獄とも形容し難い光景が広がつていた。だが、それは僕らを助けるため。だって、おっさん、レイは？？。

「ガイツー！」

「ぐ、クロナ！？」

クロナが僕に抱きついて來た。

宝石のような瞳に目一杯涙を溜め、ふるふると震える腕で僕をしつかりと抱きしめてくる。

「ぐ、クロ、ナ……？　どう、したの？　……あ、僕ちょっと臭いから、離れた方が？？んっ」

身体中のエネルギーをフル動員していた僕は、満足に口も動かせなかつた。そんな僕の頑張りを、クロナは最後まで言わせてくれなかつた。

僕の唇に、クロナの唇が押し当てられた。

名残惜しむように静かに離れて行く、クロナの柔らかな唇が動いた。

「…………ありがとう」

そして、彼女は僕に？？十何年かぶりに、心からの笑顔を見せてくれた。

僕は、急に身体から力が抜けて？？ぶつ倒れた。

「…………君には、もつと、相応しい男がいるよ。だから……、僕なんかと、キスしちゃ、ダメ……だ」

そんな僕の讐言という名の本音に、クロナは言葉を返した。  
その声は、震えていた。

「私じゃなきゃ嫌なんです。……あなたと一緒に居るのが

そつか……、と僕は笑みを浮かべたかったけど、もう体中の細胞が悲鳴を上げていて、それどころじゃなかつた。

そんな僕らを見て、レイは笑みを浮かべて言つた。

「私は？？愛と情熱の戦士ですよ」

### プロローグ3

「君のその魔法は、人の存在理由を奪うんです」

おっさん、レイが？？死んだ。

その死に様は、すぐ呆気ない物だった。

ノーランドの王子とマクシアの王女を助け。  
ウインドルのお姫様の病気を治し。

魔王を助けた一人の男の死としては、あまりにも似つかわしくない物だった。

「兄の敵！ 死ね！」

不意に、ナイフを持って突っ込んで来る少女。

どうしようかと僕がレイの顔を伺うと、彼は不気味なくらい優しげな笑みを浮かべていた。

そして。

「あのドレス、僕の弟子の結婚祝いに上げてください」

そう言って、僕に笑顔を見せて。

レイの心臓に、深々とナイフが突き刺さった。

「『」ふつ……

口から、胸から……彼がいつもこんな時に出していいた炎のよう、勢いよく血が零れ出した。ふらふらと、レイを刺した少女は後ずさりし、そして逃げ出した。レイも膝をつき、そして地に伏せる。じわじわと赤い血が、大地に染み渡つて行く。

僕は、呆気にとられて何も出来なかつた。

……何でだよ？

アンタ、いつも『理不尽だ』って、何でも消滅させてただろ？  
痛みも、傷も。……なんで、消さないんだよ。

アンタの魔法は、『憤怒』。

『理不尽をそれ以上の理不尽で消す』……そんな魔法じゃないかよ。

僕がどんな顔をしていたのかは、分からぬ。  
ただ、レイが僕に笑つて言った。

「……敵討ちは……理不尽じゃないでしょ？　愛の成せる業です  
よ」

事切れたレイは何も語らない。  
だから僕は、仮想人格に問うた。

何故、死にたかったのか。

死んでから初めて、僕はレイの事を何も解つていなかつたんだと  
知つた。



「本当ですか！？」

復讐の下準備は、いよいよ大詰めと言つた所だつた。

復讐する事で戦争が起ころるかもしれない。それを危惧して長々と策を練つて、色々と作つて来た訳だが、その完成報告が僕の元に届いた。

「嘘を言つても仕方がないだろう。本当さ。彼女の方も大丈夫みたいだ」

「ああ、一人に任せて良かつた。あれは僕の奇策の中の奇策だから「奇策と言つか、あれは一種の口マンだろ？」

くすりと笑みを浮かべるのは、切れ長の目を持つ一人の青年。紺色の髪は、まるで深い海の様。地球で言うスーツのような服に身を包んでおり、レイが詐欺師なら、彼は新入社員だろうか。

精悍な顔立ちで、所謂イケメンだ。だが残念な事に、少々危険思考の持ち主である。バトルジャンキー、強者を見れば戦いたくてウズウズするタイプの人間なのだ。強いのだから達が悪い。魔術師にして魔法使い、さらに達人クラスの格闘家。

そして、僕やレイと同じ前世？？地球の記憶持ち。青年、ヒビキという男は、そういう人間だ。

「……それより、彼女は一体誰だ？」

「ああ……、やっぱり気になるよな」

と、ヒビキが指差す彼女に、僕は苦笑いを浮かべる。

レイの姿ではなく、元の僕に戻ったのが悪かったのかな。

「…………」

無言で僕にしがみついているアイリが居た。  
少し氣になるのが、ヒビキから隠れるように、僕の後ろに隠れて  
いる事だ。

「アイリって言つんだ。えつと……、秘書みたいな役割かな  
「…………」

僕が喋つて、アイリは無言だった。  
更に、ヒビキは酷く訝しげに言つ。

「アイリ……ね。ふうん。『氷霜のアイリ』を秘書扱いとは、さす  
がは魔王だ」  
「？？？」

びくり、と背後でアイリが震えるのが分かった。  
それよりも、『氷霜のアイリ』などという二つ名に僕はフリーズ  
していた。

「あ～、何それ？」  
「やつぱり知らなかつたか。『Gランクの天才』様は、二つ名に興  
味がないからな」

その通りである。

実際、『Gランクの天才』などといつ一つ名は、彼に教えてもら  
つて初めて知つたのだから。あのときの恥ずかしさは語るつにも語  
れない。アイリも、今きっともの凄く恥ずかしいんだろう。恥ずか  
しい二つ名がバレてしまつて。

……そんな訳ないが。

「若干十一歳にしてBランクに上り詰めた天才さ。現在はAランクだつたかな。まるで君と真逆の存在だ。もっとも、一年前から消息を断つていたけどね。何をしていたんだ？」

「……あなたには関係のない話です」

「関係ない……ね。良いけどさ」

むつとした表情でアイリが一步前に出て、ヒビキと視線を交わす。一人がどこか険悪なムードを醸し出している中、僕はぼんやりと考えをまとめていた。

要するに……、僕は途方もない勘違いをしていたようだ。

アイリの強さは、隸属の首輪で強制的に作り上げられた物ではなく、元々の力だったと言う話で。あの事件の黒幕が、アイリとラングを雇うのに精一杯だったというのは、Aランクの冒険者を暗殺者に仕立て上げたのだから当然であつた訳だ。

依存しなきや生きれないってのはよく分からないが、とにかく暗殺者として育てられたのが僕の勝手な妄想であつて良かつた。

十一歳でBランクにまで上り詰めた理由は、もっと暗いのかもしれないが。

というか、そんな有名人を迷惑と思つた僕は……。

「まあいい。それはそうと、一つ情報を上げよつ

しばしアイリと睨み合つていたヒビキは、意味深に小さく笑みを浮かべた。

「ランベルグ帝国に、コレクターと呼ばれる魔法使いがいる。国の辺境に済んでいる魔法使いなんだが、彼の噂はそれは酷い物でね」

「コレクター、その単語に『アイリ』が再び震える。

ヒビキはちらりと一度アイリを見やり、話を続ける。

「骨董品や魔法具、武器や防具など多岐にわたって収集しているんだが、その一つに——」

「？？人間の採集」

と、ヒビキが全てを語る前に、アイリが口を開いた。  
アイリの身体が小刻みに震えていた。  
全てを語らずも、全てが伝わって来る。  
言葉にしなくちゃ伝わらないと言つても、言葉にしなくても伝わる物もあるのだ。

恐怖。

今のアイリの中で渦巻いている感情は、それ一つだらつ。身体がぶるぶると震え、顔が青い。  
そんなアイリを、僕は見ていた。

「アイリは下がつて。この話は僕とヒビキだけで？？」

「いえ。私も無関係ではないので、『』一緒に緒します

「へえ、本当に秘書みたいだね。？？それじゃあ、話を続けるよ？」

僕とアイリのそんな様子に茶々を入れ、ヒビキが話を進める。

「コレクターはランベルグ帝国の上層部と繋がりを持つているようで、その収集品を売っている。その中で、たまたま手元に来た物があるんだが、これを見てほしい」

そう言って、自分の着ているスーツを指差すヒビキ。

え？

「これなんだが、どう思つ?」

「…………」「

ヒビキヒーん。

そういう証拠品、着ちゃダメでしょ。

いや、彼が言いたいのはそういう事ではないのだろうけど。

「…………」「

「…………。手の込んだ作りの服です。縫い目が統一されていて、とても人間業には思えません」

何も言わない僕に変わつて、アイリがコメントしてくれた。さすがは僕の秘書。

というよりも、この空氣に耐えられなかつたのではないだろうか。  
「だろうね。君ならそういう表現だらう  
「まさか……」

ヒビキの言い方で、僕はピンと來た。

「地球のスースツそのもの?」「

「正解」

「……チキュウ?」

僕ら二人は事態を飲み込めたが、アイリは事の重大さに気が付いていない。

気付いた僕は、鞄から以前アイリから没収した拳銃を取り出す。

それはまぎれも無く、あまりにも完成された実銃。

ヒビキはその銃を見て、確信を持つて答えを導き出した。

「コレクターは、地球の物をこじらの世界に呑食する——そんな魔法を使える」

**非情の収集家と壇りの？ 2（前書き）**

9／25日、一章を変更致しましたので、プロローグからお読み下さい。

また、序章のプロローグも同日、変更をしております。

ランベルグ帝国。

世界で唯一、魔法を行使する国。その使用は暗部のみだが、いつ魔法が表に出て来ても可笑しくはない。だが、今の所そういう話はないようだ。

ランベルグ帝国は善くも悪くも、実力主義。こと実力という観点においては、魔法はあまり役に立たないと囚われているようで、今はまだ魔術の発展に力を注いでいる。そのためだろう。

「ふえ？ な、何でレイがここにいるの？」

「……たまたま寄つただけなんですが、何で顔を輝かせてるんですか？」

「つー？ そ、そんな訳ないでしょ！…」

僕は「レクターの情報収集のために訪れた首都で、フイーと再会した。

といつよりも、僕が用事があつてフイーの元を訪れたのだが……。

「ちよつと良かつた！ ちよつと手伝いなさい！」

何故か、フイーに用事があつた。

首都の外れにある、白い半球の建物。それがフイーの家兼研究所だ。天井がガラス張りで、夜に星空が眺める代わりに暴風雨の時は怖い造り。

僕としては、戦争が起きるかもしれないからランベルグ帝国以外に、リースの居るアイカシア国にでも移住してくれないかなー、と遠回しに言つつもりだったのだが……。

「成果発表？」

「そう。魔術師は税金を免除される代わりに、年に一度研究成果を発表しないとダメなの。それで——」

「わかりました、留守番ですね」

「そうそう——って、そうじゃないわよ——……それも頼めるなら頼みたいけど」

留守番を断り、出かけている間に泥棒にでも入つて、治安悪いしこれを機にアイカシア国にでも移り住んだらどう? と提案しても良いが……。

止めた。僕の用件は放置しよう。

スペイ、というよりは監視者が欲しい所だから丁度良い。ここはフリーに自由にしていてもらおう。

「留守番の件は、掃除を条件に受け付けますよ

「うっ……、やつぱりちょっと汚い?」

外見はペンキ塗り立てと言う訳ではないのだが、真っ白で綺麗な建物だが、この建物、内部はフリーの言い方をすればちょっと汚い。丁寧に言えば少々、悪く言えばもの凄く散らかっている。

足の踏み場が無い?? というのを許容範囲としても、これは許容範囲外。

どうみても壊れた魔術具?? 魔術の理論を用いた機械?? が山のように積み上げられている。うかつに足を踏み入れよう物なら、その部品が足に刺さつたりしそうだ。山に手をつければ崩れそう、ならまだしも、魔術具が勝手に動き出しそうで恐ろしい。

『屋敷ならぬ、危険物廃棄屋敷のようだ。』

「『れがちょっと……ですか。フイーはお嫁さんをもひつて苦労しそうですね』

「私がもひつのはお嬢さんじゃー。」

顔を真っ赤にして火でも吐きそうな勢いで怒鳴るフイーだが、ひょつとするとひょつとするかもしないと本人も思っているようで、あつうひつなどと呻いている。

「だつて……その、もつたいたいじやない」

その精神は評価しよつ。

ただな？ こうやって放置しておく方がもつたいたいだろ。使うなら使う、使えないなら分解して廃棄しよつ。フイーの作り掛けか、廃棄されていた物かは知らないが、このままじや僕が戦争を吹っかける前にここは危ない。

「何、悪いよつにはしませんよ。解体して使える部品は取つておきますから。それとも、僕が直しておきましょつか？」

「直すつて……そんな事も出来るの？」

僕はへこへーと頭を下げた。

なんとなく……つかつにフイーの前で胸を張りたくないのだ。

「すいません~、こんなおっさんでも優秀な物ですか~」「そ、そうね。凄いわね！ 『Gランクの天才』は何でも出来るのね！」

やばい、なんか怒つている。

話を逸らそつ。

「まあ、魔術具の不調を訴える方は結構多いですから。魔術師の数も少ないのでし、結構やるんですよ。魔術師は基本的に引き籠つてますし」

魔術具とは、魔術機関（刻印とか魔術陣）を内部に搭載した機械。そこら辺のマナを取り込んで魔術を発動し、日常生活を快適にする——地球で言う所の電化製品に似た物だ。ただし、魔力は自分で供給しなければならないので、魔術師専用の魔術簡略化アイテムといった感じだろう。魔術師が優遇される訳である。

ちなみに、魔術具は魔力が無くても使用可能である。更に言うなら、魔石があれば魔術具も誰にでも使える。ただし、開発する魔術師が自らの地位を落としたくないので、そんなものは作られていない。独占だね。

「で、本題は何ですか？ 聞くだけ聞きますよ  
「じ、実はね？ 成果報告のアイディアが欲しいな～って  
「お断りします」

踵を返す僕の袖を引っ張るフイー。相変わらず、君は僕の袖が大好きだね。もう慣れたよ。つんのめるのに。

「ちょっと薄情じゃない！？ 『フイーの頼みなら仕方ありませんね、一肌脱ぎましょ』……とはいかない訳？」  
「むしろフイーが一肌と言わず、全部脱いでくださいよ。それでしたら僕は満足です。お願ひ通りー帰ります  
「帰るの！？ 手伝ってくれないの？」

何故か顔を赤らめながら服に手をかけたフイーを見て、急遽言葉

を変える。何だろ、僕は後少しでとんでもない過ちを犯す所だつたような気がする。

「フィーの成果でしょう？　僕が提供すれば、僕の成果じゃないですか」

「それはそうだけど……」「

うう、と微かに目に涙を溜めるフィー。  
切羽詰まってるな、などと他人事の僕。  
事実、フィーは暴挙に出た。

「……泣くわよ？」

「泣いたって教えませんよ」

内心、泣かれたらどうしようかと焦っているが、それを表情に出さない。

プライドがあるから、泣かないと思つけど。

「……じゃあ泣く」

「どうぞ！」自由に。僕には関係ありませんから

そういう切つた僕をフィーは上目遣いで睨んで、少し俯いて考えるようにする。

そして、羞恥心でふるふると肩を振るわせ、それに伴つて顔を真っ赤にして、涙目で僕を一目見て。  
上目遣いでフィーは、

「……、いや、やばい！」

鳴いた。

「ふふ。

「フイー……。それは反則つてものだよ……。

いつもは警戒心びんびんなのに、自分の興味の対象には全てを曝け出す所とか、凄く子猫っぽいと思ってたよ！ 小柄で丸い顔とか、子猫みたいで可愛いとか思つてたさ！ だからって、それは反則だ！

……やばい、なんかフイーの頭にぼんやりとネコ耳が見えて来た。やばい、やばすぎる。もの凄く似合つてる！ 超可愛い！

？？？！ いや、何言つてるんだ。やばいのは僕の頭じゃないかよ。

といつも思つたが、瞬きの間になされたのはここだけの話である。

僕は完全敗北した。悔しいので、フイーの頭を撫で回す。髪をくしゃくしゃにしてやつた。

「？？？んっ」

なのに……、なんで照れくさそうに頬を染めてるんだよ！ 何で嬉しそうなんだよ！ 嫌がれよ！ 僕の精神が死ぬからこれ以上はやめて！

ネコの耳が見えた時点で、僕の精神は死んでいたんじゃないだろうか？

非情の収集家と壇りの？ 2（後書き）

この28話を見直せりたいがために、ちょっとだけ更新日時を  
調整してたりして。

## 非情の収集家と憤りの？ 3

「成果……ですか」

「何でも良いの！ 何かない？」

なんとか部屋の中にスペースを作り、講義と洒落込んでみる。尻尾でもパタパタ振り出しそうな勢いで、身を乗り出して尋ねてくるフイー。

実際、僕がやっている魔術は、一般的な魔術とは大きく異なる。その内一つでも見せれば、高評価は得られるのではないだろうか。問題は……あまり影響力のないやつが良いと言つ事だ。そうなると、簡単な別次元の魔術が良いだろう。

考え方を根本的に変えなければならない、という新たな問題も生まれるが、何を教えるにしても閑門と言うのはある。そこでダメなら、また別のを考えれば良い。

最悪、フイーが解雇されても僕は何も困らない。

「……ちょっと、何か変な事考えなかつた？」

「いえいえ、僕に任せてくれば、万事上手く行きますよ」

「……なんでだろう。あなたの言葉、その後ろに『僕に取つて』つて付きそう」

「ザツシライト」

「ふえ？」

「……こういう時、英語は便利だ。単語の意味がわからないから、相手に伝わらない。

ただ、僕の態度で伝わってしまう事もあるが。

「では、早速講義に入りましょうか」

「お願い！　あたしが頼むなんてそういうないんだから、光栄に思  
いなさい！」

「そうですね。『いつかあなたを仰天させるような魔術を見せてあ  
げるんだから！』なんて言つてましたもんね」

ギヤーと羞恥心と怒りが入り交じった叫びを上げて、僕の記憶消  
去しかねぬ勢いで殴り掛かってくるフイー。その細く白い腕を受け  
止め、くるりと身体をターン、フイーのロープの襟口を掴み持ち上  
げる。

ああ、背が高いって良いな。首根っこを捕まれてぶらぶらしてい  
るフイーを見ながら、いつかは我が身、などと思つてしまふ僕の本  
当の本音は、そこまで低くない——はず。

「ううう……」

「はははっ、まあ、楽しみにしてますから、その内にでも見せて  
ください。時間がないのでしょう？」

僕はへこたれるフイーを床に下ろし、早速講義を始める。

「まず、フイーはマナをどうこうする物だと考えてこますか？」  
「魔力にだけ反応する魔術の元、でしょ？」  
「はい、まずはその考え方から変えてください」

ほえ？　とぽかりと口を開けるフイー。

無視して、僕は続ける。この後何度も似たような展開になりそつ  
なので、いちいち反応をしたりはしない。

「マナとは、確かに魔力にしか反応しません。ですが、確かに存在  
しています。例えば、水のマナ」

そう言って僕は水のマナを集める。水は酸素と水素から成る、これはこの世界でも変わりない事だ。従つて、水のマナとは酸素と水素の集合体、と僕は踏んでいる。

が、それは実は間違いでもあつたりする。意識を集中し、水のマナを集める。ただし、空中闘歩の要領で魔力は放出しない。

「今、僕が水のマナを集めたのを、フリーは分かりますか？」

「ううん。……え？ 集めてるの？」

魔術師が感知出来るのは、魔術だけ。

マナが存在するものであれば、それを感知出来ないのはおかしい、というのが世間一般の魔術師の考え方。

だが、

「マナと言つのは、実は感知出来ません。フリーが水のマナを集めていると感知出来るのは、微弱な水の魔術が発動しているからです」  
そう言つて、僕は少しだけ魔力を放出する。  
途端、フリーの顔色が変わった。

そもそもそつだろう。僕が集めた水のマナの量は、おおよそ以前に作った水球を作れるくらいだ。

「えつ！？ こんなにマナを集めてたの！？」

「僕はさつきまで、完全に魔力を抑えていました。そのため、微弱な魔術は発動せず、集めたマナをフリーは感知出来なかつたんですね」

そう言つて、水のマナを散らす僕。水場でもないから、集めるのは結構大変だと思ったが、どうして簡単に集まるんだろう。怖いよ、この研究所。

「といつようじ、他者が操るマナを感知する事は出来ません。それは置いておいて、水は何で出来ているか、フイーは知っていますか？」

「へ？ 水は水でしょ？ 水蒸気が集まって、水に成るんぢやないの？」

「むう、間違いではないんだよな。むしろ、そつちの方が効率はいいかもしない。既に水として存在している分だけ。

「では、その水蒸気は何で出来ているか知っていますか？」

「…………えっと。…………知らない」

まあそうだね。最小が水蒸氣だと思つていれば、それより小さい物があるとは思わないよな。

「では、フイー。僕と同じように水球を作れますか？」  
「そんなの朝飯前よ！」

そう言つて、フイーは僕よりも早く水球を作り出した。  
まあ、そつだらうな。偏屈魔術師つて一つ名は、他の魔術師の嫉妬から来ているらしいから。

「フイーは水蒸氣を水のマナとして集めていますよね？ 僕はその水蒸氣を構成する物をマナとして集めます。どうも共に、ちゃんと水球が出来ます」  
「…………要するに、マナは術者によつてその形を変えるつてこと？」

僕はニツと笑みを浮かべ頷いた。

マナは術者のイメージによってその形を変える。最終的に水にな

る、魔力にしか反応しない要素が、水のマナと呼ばれるのだ。

物質や現象をより深い層まで理解しておく事が、魔術の幅を広げると言つても過言じやない。

確かに呼び寄せているものは同じなのに、使用者によって異なる物質となる存在。

それって、その存在自体が意志をもつているようじやないか？

「そのため、マナは精霊ではないかと僕は考えています」

「せ、精霊つて……」

「だつて、実際そつじゃないか？ 自分の意思に基づいて集まつたり散つたりするエネルギーの元だ。生物かなんかだと思つた方が早い。

そつちの方が融通が利くし。

「まあ、マナに意思があろうが無からうが関係ありませんけどね。余談ですよ」

「え？ ……十分これで成果になるわよ？」

「なりませんよ。証明の仕様が無いでしょ？ まさか、フィーは僕が何ヶ月も掛かつて出来るようになった魔力の制御を、数日でマスターするつもりですか？」

魔力を一切出さずにマナを集めることが出来れば、色々と便利な点が多い。

魔術師同士の対決において、その勝敗を決めるのは魔術の発動までの時間、そして属性だ。炎に風の魔術がタブーとされるように、魔術の戦いは読みが勝敗を分ける。

相手と自分の力量を正確に把握し、いかなる魔術でも自分が先に攻撃できると踏んだ方から魔術を構築。相手は集められたマナを感じて、それを打ち消す、もしくは飲み込む属性の魔術を構築する。

そこからは時間との勝負。いかに相手より早く魔術を構築するかだ。魔力を抑えると言つのは、この戦い方においては禁じ手に近い技術だ。自分が魔術の発動速度が速ければ、相手に対抗策を練られる前に攻撃が可能になる。というより、受身の相手の不意を付ける。魔術師同士の戦いが代わるような技術だ。

だから、あまり公には出来ない技術なのだ。  
だが、

「あたしを誰だと思つてんのよ！」

フリーは無い胸を張つて宣言した。

やばい、フラグが立つた。

これはどうにかしないと、確実にフリーはこれを成果発表する気だ。

「そうですか？ 僕としては、もつといいのがあるんですが、それでも別に構いませんよ。けどまあ……地味ですよね」

「あうつ……」

成果発表は、貴族様に見せるらしい。

それは、どれだけ内容が凄くても地味なら評価は低い。

「……続きをお願ひします」

「はい、解かりました。ではマナについて、僕なりの解釈を説明していきますか？」

頃垂れるフリーを視界の片隅において、僕は講義を続ける。

「まず、水のマナは水蒸氣ではなく、氣体を想像しています。水を蒸発ではなく、分解した時に生み出される氣体ですね。それは解かりますか？」

「……し、知らない

僕は微量の水のマナーー酸素と水素を集めて、さらに火のマナも集める。

「さて、今右手に少しばかり水のマナを集めています。ただ、一切魔力を放出していないので、感知できないでしょう。しかし、左手に集めた火のマナは感知できますよね？」

「え、ええ……。右手と左手で二つのマナを扱うなんて……。あんたつてかなり器用なのね」

生憎と技しか取り得が無いもので、と僕は揶揄して火の魔術を発動。

「さて、フィー。右手に少しの水のマナ、左手に火の魔術を発動できますか？ 魔力制御は要りませんが、出来るだけ水のマナは集めるだけにしてください」

「……わかんないけど、やつてみるわ」

フィーはキツと目を開き、両手を見つめる。

一瞬で左手に炎が出来上がり……対して右手には、微かに水のマナがあることが感知できた。やはり、魔力制御は無理だつたようだ。というか、魔力制御されるとマナが集まっているか他人には確かめ様がないから困る。

「では、右手と左手、火の魔術と水のマナを合わせてください」

「へつ！？ そんなことしたら、火が弱くなっちゃうわよ？」

「まあ、やつてみてください」

「……水と火の相性が悪いのは常識よ」

訝しむ表情を浮かべるフィーだが、素直に左手に右手を近づけ、ジユツと音を立て火が微かに弱まった。

「水蒸気をイメージしていると、そうなるでしょうね。では、僕のを見ていてください」

右手には微かな、それこそ雀の涙にも満たない量の水のマナ—酸素と水素、左手には火。水のマナが大量だと、凄く危険だ。

小学校の理科の実験でやつたことがあるのではないだろうか？

「水を構成する気体には、物を燃焼させるものと、燃焼することで炎を上げるものです」

電気分解した水素と酸素の混合物に、マッチを近づける実験。左手に右手を近づけた瞬間、ボンッと淡青色の炎が燃え上がり、ひやりと手が湿った。

一瞬の爆発で、火の魔術は消滅。

これが僕の秘策。

もし、例の水球レベルで水のマナを集め、それを火の魔術と反応させると、爆発系の魔術の完成だ。魔術に指向性が付けられるため、自分を中心に行十メートルものクレータを生み出すような爆発を生み出しても、中心から外に向かつての爆発であれば無傷でいられるのだ。爆発で吹っ飛んだ瓦礫とかに指向性は付けられないでの注意。

「と言う感じで、同じマナでも想像力を働かせれば、魔術の幅が広がるわけです。はつきり言つて、魔術の可能性は無限大。フリーの成果を発表してください」

果然としているフリー。その反応なら何か思いつけば貴族相手でも高評価を得られるかな。

危ないから、水のマナについては教えない。

その後、寝泊りする空間すらない研究所の掃除を僕が開始。掃除手伝いとして、宿で休んでいた（ヒビキといざこざがあり負傷した）アイリを呼び、掃除の合間を縫つてフィーに野次を飛ばしたり、おちよくなつたりして時間を過ごした。

「アイリ、良いですか？ 風のマナというのは——」

「……なるほど。理に叶っていますね」

「ううう……、それをあたしに教えてくれても良いじゃない？」

歩ける場所が無い研究所内で、しかたなく、そりやもう面倒だけどしかたなく、あまり人前で見せるべき技術じやないんだけじょうがなく、風のマナを集めて宙を歩く僕　　を恨めしそうに睨むフィー。それを眺めながら、黙々と掃除を続けるアイリ。  
うん、優秀な部下だ。

火のマナ。

魔力にのみ反応する可燃性の気体。これを燃焼させることで、火の魔術が発動する。燃料みたいなもの。

風のマナ

結合する真空の箱。これをたくさん集めて大きな真空の箱を作り、その箱を魔力で破壊して風を生み出す。集めると、真空の箱により若干空気が押されて風が起こってしまう。

### 地のマナ

意思に基づいて変わる未知の元素。炭素でもナトリウム、なんなら金でもいい。常温で気化しない元素。物質とするのに馬鹿みたいに魔力を消費する。また、魔力がなくなると存在を維持できず、消滅する。

この世界は素晴らしい。

魔術、獣人、エルフ？？そして、魔法。

どれもこれも、地球にはなかつたものだ。

皆、その価値に気付いていない。この世界がどれほど素晴らしいのか、その価値に気付いていない。

だが、あえて私はそれを語るまい。

すべて、私のものだ。誰にも渡さない。独り占めだ。

地球の技術も捨てがたいが、魔術や魔法に比べればあんなもの必要ない。どうにもこの世界の人間には珍しく映るよつだがな。

私の魔法は、『強欲』属性の召喚魔法。

『一、紙に書かれている名称のものを目前に召喚することが出来る。

二、生物は不可能である。

三、名称が総称であつた場合、召喚されるものはランダムとなる。

四、所有権のある物は不可能である』

この法則さえ守れば、何でも召喚、もとい手に入れることができる。

生物を召喚できないため、どーぞの召喚士よろしく、魔獸を使って戦うことは出来ない。例え可能であつたとしても、召喚した魔物に喰われてしまう氣がするので、それは別にいい。

ただ、所有権。これが厄介だ。これさえなければ、名のある宝具をすべて手に入れることができると言つのに。

まあ、それでも故人の物であり、誰の手にも渡つていないのである。

れば、私は手に入れることが出来るが。おかげで、国宝として飾られている類の宝具は色々と手に入つたし、昔話に出てくるような忘れられた伝説級の武器も私の手の内にある。わざわざ隠された洞窟まで取りに行く必要などなく、紙に書けばそれで手に入るのだ。

世の探索者諸君には申し訳ないことをしたと思っている。何せ、私は自宅で紙とペン一本でその成果を奪っているのだから。

私は全てが欲しい。私には、それを手に入れるだけの力もある。私は魔術が使えない。私はこの魔法しか使えない。私は化物じみたステータスもない。

だから、私は欲する。

私の代わりに、それらを受け持つ人間が。

さて、今日は魔術師の研究発表。何か良い人材は要るかな？

「よし、準備万端。行つて来るから、留守番宜しく」

「……心配ですね。僕もついて行きましょうか？ あつ、別に保護者としてではないですよ？」

「うつむき馬鹿！」

かあつと顔を怒りで真っ赤に染め、フリーは地響きでも立てるような勢いで出て行つた。

ちなみに研究成果は、風のマナで火の魔術が消せるという発見だつた。……まあ、許容範囲。それは以前僕が見せなかつたか？ まあ、証明できるのだから良いか。

「……やつるのはまずいですよ」

デリカシーが無い僕をジト目でたしなめるアイリ。したくてしている訳じゃないんだけどわ。

「うん、さすがに僕もまずいと思った。……けど、最悪の予防線くらいは張つておきたいんだ」

「何があるんですか？」

「……何となく、嫌な予感がしてるんだよ。ヒビキから話を聞いたときから」「……」「……」

まあ、大丈夫なはずだ。フイーは優秀だし、お守りも渡してあるし。

そして、フイーは帰つてこなかつた。

やはり、この世界は素晴らしい。

けれど、どうにもこの世界の住人はそれに気付けていないようだ。私は今、ランベルグ帝国首都にある、ギリア城で魔術師達の研究成果を見させてもらつていて。だが、平凡だ。

平凡な魔術、それこそ科学の延長線上にも満たないものばかりだ。プラズマに驚きの声をあげる他の貴族にうんざりしながら、その成果発表を見ていた。その程度のものなら、私が召喚した現代の機器で代用できる。マナという未知の元素を用いておきながら、その特

性をまるで生かせていない。

魔法具、『スカウトモノクル靈視の片眼鏡』を通して見ているが、あまり優秀な人材もない。魔力を数値化し、魔術や魔法使い、魔法具の詳細を見てくれる魔法具。名称どおり、スカウトの役にしか立たない物だが、そこそこ便利だ。

今回も収穫なしか、と視線を泳がせた時だった。  
不意に、異様なものが視界を過ぎつた。

「これは……」

モノクルの視界を埋め尽くさんばかりの文字の羅列。魔法の詳細だろうが、なんだこの量は！？ 詳細の量が多くて、魔法具本体が見えない。この量、一つの魔術じやない。複数の魔法が掛けられた魔法具かっ！？

複数の魔法……魔法使いの合作！？

私はモノクルを外し、肉眼でその魔法具と、それを持つ人物を見た。

研究成果は高評価を得られた。

何せ、相手が火の魔術を使っているときに、風の魔術を使用するのはタブーとされていたのだ。それを覆す、魔術師の戦いを搖るがす大きな成果。高評価は確信していた。

前に会ったあの黒尼ニギくめには感謝せねばなるまい。何せ、最初にこれをやってのけたのは奴なのだから。あたしはそれを真似ただけ。  
……あと、あの失礼なおっさんにも。

研究資金も貰えだし、さっさと帰ろうかな。そんであのおっさん

を殴り倒さう。どうにも、

貴族って言うのは好きになれないのよね。一緒にいてストレスが溜まる。

よし、じゃあ帰つておっさんを殴つてストレス発散しよう。

「フイオナ君と言つたね。素晴らしい発表だったよ  
「えつと、ありがと……」」

と、何故かおっさんを髪髪させる笑みを浮かべた男が話し掛けてきた。年齢はずっと若いのに、どうしてだろ？

「ああ、別に私は貴族じゃないからね。碎けた話し方で良いよ  
「あつそう。なら、そうさせてもらうわ」

一瞬で砕けるあたしの物言いに苦笑を浮かべる男。あれ？ もしかしてさつきのは[冗談で、貴族？ まあ、本人がああ言つてるから別にいいか。

「風の魔術ではなく、風のマナか。素晴らしい発見だよ  
「ええ。風が吹くことで火は大きくなるのが当たり前だけど、風のマナは風じやないって気付けたから」

男はうんうんと、まるでそれを既に知つていたかのように頷く。  
何こいつ、なんか……嫌だ。

「ところで、君の腰についてるその人形はどうしたんだ？」  
「ふえ？」 「これ？」

と、唐突に男はローブの腰の辺りに付けている人形を指差した。  
これは、おっさん——レイにもらつた猫の人形。お守りつて言つ

てたつけ。

「知り合いにもらつた物よ。手作りって言つてた  
て、手作りですか？」

手作りと言われ、目を丸くする男。驚くのも無理は無い。何せこの人形、縫い目が恐ろしいほど綺麗なのだ。伊達に『Gランクの天才』とは呼ばれてないな、と思つたものだ。

「そ、そうですか。ちなみに、それを作つた人の名前は？」  
「名前？『Gランクの天才』って呼ばれてる、レイつておっさん  
よ？」

レイの名前を出した瞬間、急に男の表情が変わつた。  
それは、驚愕と震えよりも、恐怖に近いもの。

「レ、レイ！？ や、奴か！？ いや、ありえない、そんな馬鹿な  
……」

「何？ あんた、あのおっさんと知り合いなの？」

「知り合い？ ええ、知つていますよ。知つていますとも。君も彼  
を知つているようですが、私もですよ。あの糞むかつく野郎のこと  
なら何でもね」

その時だ。

男の笑みに、ぞわぞわと背筋を虫が張つよつた感覚を覚えたのは。  
その笑みは、一言で言えば、邪悪。

逃げ出したい衝動に駆られたあたしに、男は言つた。

「フィオナ君、少しお時間よろしいですか？ つと、そう言えれば名乗つていませんでしたね。私の名前は、ルミナス・レイフォード。ランベルグ帝国、十貴族の一人です」

「ツ？？！」

あたしは貴族が嫌いだ。と言つよりも、強制せられるのが嫌いだ。

だけど、あたしは貴族に逆らえない。だって、養つて貰つてる側だから。

コレクター、ルミナス・レイフォード。ランベルグ帝国十貴族の一人。

レイフォード家は十貴族の中で最も権力が低く、財産も少ない家柄だ。能ある鷹は爪を隠す、とも言つ。峠にある屋敷もそれほど広くなく、両親は病氣で療養中。今、レイフォード家には彼とその召使いしか居ないと言つ。

ただ、周辺住民によると彼の屋敷で働いているであろう、多くの人を見かけるとの情報。まるで一国の王であるかのような、召使いの数だとか。

そして、行つたきり帰つてこない人がいる。

そんなアイリの調査情報を聞きながら、僕は考えた。

人間収集、ね。

舐めやがつて。

フイーからの手紙に書かれていた、『ちょっとと行つてくる。あんた知り合い？ なんかネコの人形にご執心』。

どう考へても、フイーの意志で行つたんじゃないだろう。

そして、僕を挑発しているような話じゃないか。

あのお守りは僕の最高傑作、はつきり言つて魔術は愚か、『憤怒』属性の魔法でなければ突破出来ない代物だ。お守りと言う効果を最大限生かす、鉄壁に近い魔法具。コレクターの魔法は、どう考へても『強欲』、もしくは人間操作の『傲慢』か『色欲』だろう。一応、フイーの安全は保証出来る。

どういう訳か、あれがそういう魔法具だとバレて、コレクターに目をつけられたようだが。いやはや、それはどうじよつもない。

「私も行きまーす」

身支度もとい襲撃準備をしていると、そつとアイリが寄り添つて来た。

いつぞや見た黒のローブを身に纏い、その辺にはひつひつと怒りと憎しみに似た感情が見えた。

そう言えば、アイリね……。

「彼は、私がどうにかしたいんです」

歯を強く噛み締める音が聞こえた。

アイリがここまで露骨に感情を表す事は珍しい。それほどまでに、ルミナスに対して怒りを抱いていると云う事が。何をされたのかは聞かない。聞きたくもない。

だけど。

僕はアイリに睡眠薬をもつていた。

ルミナスの屋敷に向かう最中、ふらふらとしたアイリを抱きかかえ、掃除して住めるようになつた研究所に寝かせた。

「あつ……、薬、……盛りましたね？」  
「……」「めぐ。巻き込みたくないんだ」

本音を言えば、迷惑なんだよ。いや、見せたくないってのか。

「約束……です。ちやんと、戻つて来て……くださらによへ」  
「ああ、約束する」

じてんと寝てしまつたアイリをしばらく見やり、寝顔可愛いな、と思わず撫でてしまつてから僕は研究所を出た。

その時、僕の顔に張り付いていた表情は？？笑み。

僕はさ、こいつは愚かしい行為に対しては、死にたくなる程後悔させるのが、礼儀だと思ってるんだ。

コレクター、お前の話はアイリの情報以外にもたっぷりと聞かせてもらつていい。

例えば、アイカシア国のは前身であるマクシアの宝剣を我が物にしようと、内乱を起こさせたとか。結果、それが原因でマクシアは滅び、アイカシア国には帝国との負の部分の関係と言つしこりが残つた。

例えば、緑豊かな国、ウインドル王国の地下に埋まる巨大な魔石を奪つたとか。魔石が強力な紫外線から守つていたことで豊かであつた国土は、草木は生氣を失い泉は涸れた。ウインドル王国はあやうく滅亡する所だった。そして、ミリア姫は皮膚ガンになつた。僕が新たな同様な魔石を置かなければ、ウインドル王国は人が住めぬ地域なつただろう。

魔法は、そういう使い方をするための物じゃない。

お前の魔法は、ただの『罪』だ。

丁度良い。

これで切つて落とそづじやないか。

僕の復讐の火蓋を。



「ちつ、さすがは奴が作ったと言うだけはあるな。だが……」

ネコの人形？ あれはそんな物じやない。  
とんでもない化け物だった。

まさか、魔法は愚か魔術、更には物理現象に對してまで効力を及ぼす魔法具とは、恐れ入ったよ。正直、私もコレがなければ、藪をつづいて蛇を出すどころか、八岐大蛇でもだすところだった。いや、実際少しばかり出してしまつたが。

しかし……コレは確かに複数の魔法が掛かつた魔法具だが、どうなつてている？

あまりにも、使用者に都合が良すぎる魔法だ。一切のデメリットが記述されていない。欠点がまるで存在しない魔法が、いくつも積み重なつて出来ているようだ。

持ち主に対するありとあらゆる攻撃を代替わりにし、その攻撃を動力として動く魔法人形。ネコの形は飾りで、攻撃を受けた瞬間にはもうその形は残つていなかつた。

魔法具とは、魔法使いが自分の魔法を道具に込めた物だ。そのため、魔法具は大抵若干の劣化、もとい弱点を付けるのが常識だ。誰でも使える道具にしてしまう、そうすると魔法使いとしての存在価値が下がる訳だ。

だが、この人形にはそれが見られない。

奴らしい。實に奴らしい魔法具だ。  
だが、奴じやない。  
やつた。本当にやつて良かつた。

不意に、地響きと何かが崩れる音がした。

「ルミナス様、門が……その……」

「どうした？ 怒らないし、嘘だとも言わない。言ってみろ」「壊されました」

奴が来たか。

ああ、笑みが消せない。これから、これを作った奴を私の手駒に出来るのだ。他の人材などもはや要らない。

最高のおもてなしをさせてもらおうじやないか。  
私がこれまでに集めた魔法具と、優秀な人材で。

雷鳴が響き、殴りつけるような雨が降る夜だった。  
ランベルグ帝国首都、その端も端、切り立つ崖の上にレイフォードの屋敷はある。

四方を高い壁に囲われた屋敷で、正面以外のその壁の向こうには落下空間しかなく、その下の海は天気も相俟つて常闇のようだ。  
僕は正々堂々真っ正面から、厚さ五十センチの門を蹴破つて屋敷に入った。もの凄い地響きが起こり、良い呼び鈴代わりになつただろう。

別に僕の馬鹿力ではない。『傲慢』の魔法だ。

召使いと思われる、悪趣味なずたずたのエプロンドレスを着た少女が僕の前に現れた。その目に生氣は無く、ただ身体が勝手に動いているようだった。

胸くそ悪い。

少女が人間とは思えない動きで、一瞬で僕の目の前に移動する。それを僕は見て、何もしなかった。少女の手には、あまりにも似合わない巨大な斧。

少女はそれを振り上げ 何もしなかった。

否、何も出来なかつたのだが。

見れば少女の身体は、身体を動かそうとする見えない力と、身体を動かすまいとする見えない一つの力の狭間にあるのか、ふるふると震えている。

身体を強制的に動かす『傲慢』属性の魔法具、隸属の首輪が少女の細い首に付けられていた。

コレクター。どうやら、こういう魔法具も取り揃えているようだ。となると、その無骨な斧も魔法具か魔術具か。まあ、当たらなければどうという事はない。

対して、少女を動かすまいとする力も、僕の『傲慢』属性の魔法。

『一つ、視認出来る物に質量と力を働かせる事が出来る。

一つ、形を自在に変える事が出来る。

一つ、影が接触しなければこの魔法は使えない。

一つ、対象が生物であった場合、その影が表現しうる範囲内でのみ形を変える事が出来る』

端的に言えば、影を一つの生物として扱える魔法だろうか。

そのため、『影の呪縛』とかレイは呼んでいた。

一度でも影が接触すれば、対象が物であれば完全に僕の思い通りになる。対象が生物であった場合、僕の思い通りに動くマリオネットとなる。影が表現しうる範囲内というのは、背骨が皮膚を突き破つたり、腕の形を変異させる事は出来ないという事だ。

この条件の考え方としては、一回転した時に影として映る範囲。日の射し方によって、操れる範囲が変わってしまう訳だ。曇りの日はほぼ無意味。日中でも基本的に表情、足の指の動き、内蔵器官の

動きなんかは操れない。逆に夜中は、星の巨大な影に入るため、表面向的な部分は全て操る事が出来る。

これが魔王だ。

伊達に『傲慢』の象徴である、王を名乗ってはいんだよ。

といつても、同じ『傲慢』の魔法が打ち消し合って、少女は何も動かせないが。

その首輪をとっても良いのだが、そうしている時間が惜しい。

少々、雨の中で寒いと思うがそこで待っていてほしい。

見れば、ぞろぞろとたくさん似たような格好の召使いが出てくるじゃないか。

いくら夜中でも、ちゃんと自分の影と相手の影を接触させなければ魔法は発動しない。影と影がくっついているから、夜中は全てを手中に置ける という風には行かないのだ。

この数を相手にするのは面倒だなど、そんなどうでも良い事を考えていた僕に、先頭にいた男が何かを投げた。

「……ツ」

僕はそれを拾い上げ、笑みを引きつらせる。

オーケー。どうやらお前は僕を本気にさせたみたいだな。やつてくれるじゃないか、ルミナス・レイフォード。

拾い上げたそれは、ズタズタに裂けた にゃんこの人形だった。

浮かべた笑みが消えないから、頬に手をやつてその笑みを隠す。そういうしている間に近寄つてくる増援をちらりと見据え、僕は誰に言うわけでも無く咳く。

「ここからは、『魔王』じゃない」

姿を隠していた黒衣のマント 影に質量と力を与えて作り出した『傲慢』のマントを取り扱う。

マントは消し炭のように黒の粒子となつて宙に消え 代わりに炎が舞い上がった。

それは狂氣の炎。愛憎の?。激情の業火。

一人のおっさんが 留付けたその魔法の名は、

『憤炎』

身体が炎にでもなつたように、存在が希薄になつたように揺らめいた。

灯台の光のように、夜の闇の中でたつた一点だけ光る僕の身体。眼鏡の位置を直す手から炎が溢れ、手が炎であるかのように火の粉が飛ぶ。

暴風によつて僕の形が揺らぐが、叩き付けるような雨は蒸気となる事も無く消滅して行く。

この炎はーー全てを打ち消し焼き尽くす。

理不尽を極めた、最悪の魔法。

驚愕を表しながら、恐怖を感じながら引けない召使い。そこには死への恐怖がありありと見て取れた。

ざつと見た限り、若い人間が多い。眉目秀麗、八方美人。コレク

ターの我が儘に寄つて奪われた人生が、あまりにも多すぎる。

彼らには愛した人が居ただろうし、愛してくれた人も多かつただろづ。

だが今の彼らに見えるのは、疲労と恐怖に歪んだ悲しげな表情だ。

幸せを語った魔王には 憤怒の情しか湧かない情景。

魔王では、彼らを救う事は出来ないよつた気がした。

だから、僕は名乗る。

おっさんが貰いた生き様を。

「『愛と情熱の戦士』だ」

憎悪の炎が、屋敷の庭を埋め尽くした。

炎に反応できたのは何十人といった召使いの内たったの三人、されど三人いた。

他の召使いがその魔法具、もしくは魔術具、名のある武器もろとも炎に飲まれる中、超人的な反応で跳躍し、そのまま僕へと襲い掛かってくる。双子の剣士、弓使いだ。

やはり、と無感情に襲い掛かってくる彼らを見る僕。僕はアイリとヒビキの情報で彼らを知っていた。

バトルジャンキー、ヒビキの情報によると、『限りなく魔法に近い魔術』と勝手に呼んでいた冒険者、もしくは魔法具が行方不明となつてていると言つ。

そして、今僕に襲い掛かってきている人物達がそつだつた。

全く見分けがつかない、金髪ボニー・テイルの双子の剣士。ただ睨んでいるように見えて、物言いたげな視線で僕を見据えている。そこにあるのは、一種の希望か。はたまた憎悪か。

『暴風のリン』、『雷電のラン』。

魔力量に限界が見えない、思つが忽に風と雷を操る双子の姉妹。その実力は折り紙付き、ランベルグ帝国が攻め滅ぼそうとした小国を、たつた一人で防いだという伝説の持ち主。

その手に握られているのは、『疾風のレイピア』と『雷剣ジゴディル』。共に、風や雷そのものが武器となつたような魔法具。

刺突が渦を巻き暴風となり、斬撃がジグザグの軌跡を描く雷撃となつて僕を襲う。

避けることは可能、だつた。

だつたのだ。

だが、動かそつとした体にずしりと重みが増し、耐え切れず膝を着く。

「やつてくれるね……」

見上げれば、男が僕を無感動に見下ろしていた。

グレーの髪に、鋭い目つき。四十代であろう。堅いイメージが湧くカッコいいおじさんだ。レイのようであつたとは呼べない風格の漂う人物。

### 『重圧のグライス』。

こちらも、重力を思うがままに扱う『使い』。重力で相手を押さえつけ、ピンポイントにその頭を射抜く？ 暗殺者。動かない的ならば絶対に外さない、命中率百パーセントの凄腕。

彼の手にあるのは、『白銀の靈弓』。ホーミング機能付きのレーザー光線と勘違いするような矢を放つ、こちらも魔法具。

グライスが何の予備動作も無しに僕に重力をかけ、そしてその『から矢を放つた。一瞬で矢は光線となり、僕を消し飛ばさんばかりに飛来する。

全く、コミットマジックとは、よく言つたものだと僕は感心した。これは確かに『限りなく魔法に近い魔術』だ。

逆らうのが馬鹿らしくなるほどの力、属性で言えば『傲慢』だろ

う。

すごいや、すごいな、すごいって。

三つの攻撃が僕を直撃し、轟音が響き渡った。

地面が爆発したかのように吹き飛ぶ。その衝撃で大きく地面が揺れるが、それが収まるのと同時に三人は地に降り立つた。雨風が強いので、すぐに土煙は收まり??で?

「こんなモノで本物の魔法を??」の『憤炎』を止めようとした。

「「？」がつ！」

ゆらりと。

警戒しながら僕に止めを刺しに来た双子の頭を驚掴みにする。僕は無事だった。

「違うんですよ。決定的に違う

僕の呟きに、二人の顔に明確な愕然とした表情になり、恐怖が浮かんだのと。

僕の体を一本の魔剣が貫いたのは、同時。

僕は笑つて、二人は笑えなかつた。

二つの剣は、確かに僕の心臓と内臓器官を貫いてい。だが残念ながら、僕には痛覚つてもんが無い。正確に言えれば、『怠惰』の魔法で痛覚の体感時間をゼロにしている。

そして、『憤炎』は事象、概念などありとあらゆるものと消滅させることが出来る。

僕が刺された？？その事実すらも消滅していく。

「二人仲良くおいきなさい」

轟！　と炎が一人を飲み込み、僕は一人から手を離した。

悲鳴は上がらなかつた。

どさりと力なく地に落ちた二人に一警もくれず、残ったグライスに視線を向ける。

グライスが弓使いらしく、距離おいて狙撃しようつと後ずさり？？、

「つー？」

？？炎上した。

残念。『憤炎』の発動範囲は僕の視界だ。

僕に見える範囲にある全て、その消失権が僕にあるんだよ。

炎に飲まれて倒れていぐグライスには目をやらず、悪の根城に見える屋敷へと視線をやる。

「はははははっ！－」

凄く気分がいい。こんなに笑えたのは久しぶりだ。

ああ……、この高揚感が消えぬうちに、さつさと君を消しに行くとしよ!。

ふと見上げた空は、荒れた天気の夜らしく、どこまでも暗く黒いものだった。

ただそれだけのことなのに、何故か笑えてしまう。仕方なくそのまま手で隠して、僕は屋敷へと向かった。

-----

「ああ……間違いない。あの炎、あのやり方??まさしくあの男だ」

魔法使い。

奴こそが、最強の魔法使いだろう。魔法の中の魔法を使う男。

『風塵のリン』、『雷電のラン』の双子は、彼女達の両親に呪いの宝具を渡して、それを解呪する約束をしてなんとか手駒にした。

涙ながらに私に縋りついて来た時には、顔がにやけるのを抑えるのに苦労したものだ。

『重圧のグライス』は、私が暗殺を依頼すると言つ形で手に入れた男だ。隸属の首輪を付けようにも隙が無く、仕方なく、一度しか効果を發揮しない代わりに時間を十秒だけ止める魔法具、『砂の消える砂時計』を使った。

どちらも手間隙がかかつた優秀な人材だが、所詮は魔術師か。魔法使いには勝てなかつた。

だが。

「はははははっ！…」

笑える。笑えるぞ。

奴はどうしようも無かつた。弱みを握るにも、奴には過去の情報がまるで見つからなかつた。弱みを作りうても、決まって奴は最高のタイミングで現れて見せた。

だから仕方なく、殺すことに決めた。

それが、どうした?

奴よりずっと扱いやすそうな、奴の継承者がいたじゃないか。

人質に釣られて出てきた時点で、もはや笑いが止まらない。  
「こちらには、コレもあるしな。

人は、なんとなくが多い。

その一つに、なんとなく汚れた物があれば綺麗にしたくなる。それと反対に、なんとな真っ白な物を汚したくなる。

それを成し遂げた時、人は爽快感、達成感を得る。そして同時に、虚無感も。

この『憤炎』は、それを煮詰めて濃くしたような魔法だ。

今僕は、もの凄く死にたかった。

成し遂げた事に対して、虚無感を感じている。

なにやってんだろう、馬鹿みたいじゃないか、と。

完全に熱が冷めていた。

それでも、下火となるつとも、コレクターに対する復讐の炎は燃えていたが。

屋敷の内部は電気の照明で照らされており、きめの細かい絨毯や濁りのないガラスから、地球から持ち込んだ物で改築したのだと解かつた。だからと言って、靴を脱いで上がるつもりは無い。外の盛大な歓迎とは裏腹に、屋敷の内部は不気味なほど静まり返っていた。

「悪趣味な……」

屋敷の一番奥に、いかにもな巨大な扉があった。僕は咳きながら、

その扉を開ける。

そこはダンスホールに近い広間だった。半球状の部屋で一面が窓ガラス。照明が無く、外の荒れた天氣のせいでかなり暗いが、見えないほどではなかった。

「フイーっー！」

入つてすぐ、フリーが倒れているのが見えた。駆け寄つてその頬をぺちぺちと叩く。柔らかい。

「んっ……」

と、すぐにフリーの臉が動き、ゆっくりと開いた。  
そして、

「……眠い」

またすぐ閉じた。

……。いや、無事なら良いんだけど。なんていうか、拍子抜けだ。

薬でも盛られたのか？

「何、ここまで歩かせてしまいましてね。疲れているだけでしょう」と、僕の疑問に答える聞きなれぬ男の声がした。

どうしてだか、こいつの声は耳にこびり付く。粘り着くような、嫌な声だ。

僕はその男を知っている。振り向けば、モノクルを掛けた青年が冷笑を浮かべていた。丁度いいタイミングで稻光が部屋を照らす。

「ルミナス・レイフォード……」

「おや、私の事はご存知でしたか。『愛と情熱の戦士』さん。いいえ」

そこでルミナスは一拍空け、

「魔王、マモル君」

ハンドガンを僕に向け、勝ち誇った顔でルミナスは言った。  
バイオハザードなんか出てくるハンドガン。クリティカルは出やすいのだろうか。

閑話休題。

しかし、なんでバレたかな？ 一応、僕の正体は隠していたつもりなんだけど。

あつ、複数の魔法を使った時点でバレたか。魔法使いは、一つの魔法しか使えない。魔王を除いて。

「いかなる魔法使いといえど、頭を打ち抜かれては死にますよね？」

勿論、魔王でも

「そうですね……。魔法と言うのは、根本的に使用者の解釈ですが、例外無く思考して発動する物ですからね」

銃で頭を撃たれれば、考える暇も無く絶命する。

肉体的能力の低い僕ら魔法使いに取っては、銃つてのはかなり相性が悪い。それこそ、狙撃銃なんかは。けどさ。

「アンタが何と言おうと、お断りだ。僕は、アンタみたいな奴が大嫌いなんだよ」

人の事を駒としか見なせない、それじゃただの王様だろ。  
僕は魔王なんでね、その考え方少し違うんだ。

「例えばアンタ、魔法も魔術も使えぬただの人間は殺していい、なんて思つてるんだろう？ 更に言えば、魔法使いこそがこの世界を統べる者だ、なんてさ」

「……意外ですね。まさか、魔法使いは人間のために死くすべきだと？」

「まさか。それも一つの生きる道だとは思つけどさ。最終的には自分のためさ。後味が悪くならないように、この人生を楽しめるように、幸せになれるように使うだけ。偶々、それが他人のためになっているだけだ」

でも。

「他人じやなくて、仲間のためなら使うかもな！」

僕が声を荒げた瞬間、足下に銃弾が撃ち込まれた。  
けど、僕はひるまない。

「撃つてみろよ、コレクター。お前の大事な収集品なんだろ、僕は？」

「まさか、そう言えば私が撃たないとでも？ 死体のあなたでも十分活用出来るんですよ？」『操り人形の針』って魔法具は、死体を操れるんですよ？」

「死体？ おいおい、まさかその虚偽威しの銃で僕を殺せるとでも思つてるのか？」

僕はルミナスをせせら笑い、断言する。

「魔王を舐めるなよ？」

「？？？！－！」

瞬間、ルミナスは引き金を引いた。

僕の頭が吹っ飛ばされたように変形した。

それはまるで、炎が風に吹かれたようなもので。すぐに元の形へと戻る。

「？？？で？　頭を吹っ飛ばしたから僕は死んだか？」  
「ツ！？」

驚くルミナスに、僕は冷笑を浮かべた。  
馬鹿だな、確かにレイなら死んだろう。  
だが、僕は魔王だ。

僕の『怠惰』の魔法は、体感時間の操作。  
未来と現在？？その狭間に干渉する魔法。  
起ころる事象、起ころつている現象？？それらについて、僕は思考する時間が与えられる。

僕は便宜上、この魔法を『語り部』なんて呼んでいる。  
起ころつている現象に付いて解説し、時には起ころる事象を預言できる。身体が痛みを感じていようとも、それを冷静に分析出来る魔法。体感時間を増やせば、それだけ考える時間も増える。  
なんなら、銃弾がどのような軌道を描いて僕の頭を吹き飛ばしたか、語つてもいいんだ。

魔王はただの魔法使いじゃないんだよ。  
七つの属性全てを使えるから、魔王なんだ。

「魔法が『七つの大罪』でジャンル分けされているのは、この暴力的な魔法が罪に他ならないからだつて知ってるよな？」

僕は、『憤炎』を発動させる。

理不尽をこれ以上無く理不尽に叩き潰せる魔法。

「分かりました……。こ、交渉しましょう……」

と。

ルミナスは、策が効かないと知るや否や、土下座して見せた。その手のひら返しは、呆れる通り越して驚嘆に値するよ。

「わ、私の魔法は召喚魔法。紙に物の名前を書けば、それを手元に召喚できます。地球の記憶がある君なら、これがどれほど価値があるかわかるでしょう！？」

ルミナスは必死に、活路を見出そうと舌を動かす。

このままでは僕に殺されると、必死に生き残る道を探している。

「復讐でしょう！？ 知つてますよ、君が住んでいた村から追い出され、帝国に殺されそうになつたのは… それなら現代兵器を使えばいい！ 戦車でも潜水艦でも、戦闘機でもクラスター爆弾でも！ 私が紙に書けば召喚できる！ なんなら人工衛星だつて、その発射施設だつてそつだ！」

紙一枚でそれらが手に入る事が、どれほど貴重かなどと語る必要はない。  
ぜひとも欲しい魔法だ。

「どうです！ あなたなら解かるでしょう、私の魔法がどれほど便利か！ 逆らいません、尽くしますから！ どうか！ 命だけはっ！」

地にひれ伏すルミナスに対して、僕は曖昧な笑みを浮かべるしかなかつた。

「仕方が無いな……」

僕の復讐は、相手が死ぬほど後悔させるんだ。

こんな、生きたがっている人間を、僕はこの場で裁くことは出来ない。

僕の呟きに、ルミナスの顔に光が差した。

ああくそ、僕って奴はなんて？？、

「お前さ、凄く勘違いしている」

？？酷いんだろう。

がしうと、僕はルミナスの顔を齧掴みにした。

え？ と今にも言い出しそうな感じに、ぽかりとルミナスの口を開いている。

「お前はまるで、自分の魔法が唯一無二、お前でなければ使えないようなことを言つてるけど、それは大間違いなんだよ」

かつて、レイが僕に言ったことがある。

それは、一体どんなシーンだったか。

……そうだ、山賊の一人を捕まえていて、そのアジトの場所を吐かせたかったんだ。

山賊は中々口を割らなくて、人質に危険があるから僕らは早く知りたくて？？。

山賊は口を割つてしまえば、自分が生かされてる意味を失うことを探っていたから、死にたくないから何も喋らなくて。ただ口が悪くて。

それで僕は？？。

「アンタ要らないよ」

その山賊を殺したんだ。  
だって。

「召喚魔法、使えばお前は必要ないだろ？」

ドッペルゲンガーツて知ってる？

最大の嫌味を込めて。

僕はコレクター、ルミナス・レイフォードの顔でそう言った。

アジトの場所、知つていれば生かしておく必要無いだろ?  
そう言って、僕は山賊を殺した。

僕の複写魔法は、その記憶から能力、全てをコピーする。  
人格すらもコピーする。

その人でしか知り得ない情報を言つ事も、その人ならばこうする  
であろう行為も、全て僕がやってみせよ。

だからレイは、そんな僕に言った。

『君の魔法は、人の存在理由を奪うんですよ』

僕は言った。

「さよなら、コレクター。君の存在理由は??無い」  
「??つ!!」

そして、全てが動いた。

「なつ」

一瞬だった。

僕は、熱くなりすぎていたのだ。

だから、直前まで背後に誰かが忍び寄つて来たのに気付けなかつた。

何かが、僕の腰の辺りに接触したのを感じた。  
そう知覚するのと。

僕がルミナスを燃やしたのは同時。

「　　？？があつ！？」

全身を焼けるような痛みが走った。あまりの激痛に、ルミナスを握っていた手が離れる。ルミナスも燃える身体で暴れ回っているが、僕はそれどころじゃない。

体中で炎が踊り狂つているような感覚。足がまともに体を支えられず、ふるふると震えている。

「いっ…………！」

鋭い痛みが下腹部を襲ってきた。『怠惰』の魔法で痛覚の体感時間はゼロ、僕が痛みを感じる事などあるはずがないというのに。

だが確かに、腰の辺りに鋭い痛みが走っていた。

意識が？？霞んで行く。

あまりの痛みに、それこそ、この世界に生まれて初めての激痛に、僕の意識は飛んで行きそつだつた。だが、今ここで意識を失うのはまずい。

痛みで足取りが覚束無い。視界がぼけて見える。集中が続かない。そんな意識の中、なんとか僕が視界に捕えたのは？？。

「まじ、か……よ」

腹に突き刺さったナイフ。

そして。

突き刺された僕は、レイではなく？？愛と情熱の戦士でもなく？？魔王の僕だった。  
魔法が解けていた。

更に。

「え……あっ、……う、そ

手を血みどりこじしたフイーが、ナイフから手を離した。  
フイー。

助けに来た少女。

信じていた者に裏切られたような、自分のやつた行為が信じられないような、困惑と絶望に染まった顔。

そして、僕は見た。

そのフードの口から覗くのは、金色の首輪。

隸属の首輪を。

「あ……があ……」

あまりの痛みに足が支えを求めて勝手に動き出す。

ふらふらと後ずさり、僕は窓になんとか支えてもうつて立つていった。

僕がふらついて歩いた道には、目を背けたくなるような赤い道。そして終着点である窓にも大量の血痕が付着した。刺された場所、未だフリーが呆然と立っている場所には血溜まり。

そして、一人高笑いしている男が居た。

「はははははっ！！ やっぱり、君も『愛と情熱の戦士』らしいね！ 丁度良い死に方だろ！？」

コレクター、ルミナス・レイフォードだ。その身を取り巻く炎は消えていない。

炎に身を焼かれながら、ルミナスは声高々に言う。魔法の炎は、現実の炎と違いじわじわとその存在を奪つて行くのだ。

奴に与えられた猶予、と言つても良い。

「『模写のナイフ』、刺した相手の魔法をコピーするナイフだ。それは、あのレイを殺したナイフだ！」

焼けるような痛みは、複写魔法が解けたのは？？『憤炎』。レイの魔法か。

「そのナイフはお前に刺さつた！ ならそのナイフは今、お前の魔法を模写している！ それさえ手に入れば、私は？？『魔王』だ！」

はははははっ！！ とルミナスは笑う。

狂氣、としか言いようのない笑い声だ。

自分が死にかけていると言うのに、奴には目先の強大な力しか見えていないのだ。

痛みで朦朧とする意識の中、それでも僕にはやるべき」とがあつた。

大丈夫、僕が発動していた魔法は全て消滅したが、もう一度発動出来る。魔法自体が消滅させられた訳じゃない。

けど……足がふらついて満足に立つてもいられない。

魔法は思考して発動するもの、集中が続かない。

この出血量、痛みをゼロにしたところで状況は変わらないだろう。怪我を無くした所で、失った血は戻っては来ないだろう。  
??なら。

「つー！ タせるか！」

なんとか右手に灯した『憤炎』に反応し、ルミナスが駆け寄つてくる。

炎の塊が、僕へと突っ込んでくる。

結局、僕には人の存在を速攻で否定するような憎悪を抱けなかつたのか、ルミナスの炎は速度が遅い。レイのように、一瞬で人間を消滅させるような炎を、僕は使えなかつたのか。

だが、ルミナスが死ぬのは目に見えている。  
だから。

僕は最後の力を振り絞り、『憤炎』を発動した。

「????!?!?」

炎上したのは、フイーだった。

突如燃え上がった自分の身体に、驚く事も忘れてフイーは転げ回つた。

「どこを狙っている！」

突っ込んでくるルミナス見て、これで良いのだと、思いつきり後ろへ倒れ込んだ。

ガシャリ、と背後のガラスが砕け散る。

ガラスに支えられていた僕の身体は、その穴から落ちて行く。  
暗く闇のような海に、落ちて行く。

魔王には実に丁度良い場所じゃないかよ。闇の中なんてさ。  
と。

「ナイフを渡せええええーー！」

ルミナスが落っこちて来た。

いや、お前は？？どこまで『強欲』なんだよ。

背中に強い衝撃が走り、身体を突くように冷たい海水が包み込んだ。細かい泡が僕を包み、海水が傷口に染み渡り、痛みに悲鳴を上

げようとして、ゴボリと口から泡と共に血が溢れた。

暗い。上か下かも分からぬ夜の海中は、真っ暗で何も見えやしない。

後を追つて来たルミナスも、フイーやルミナスの召使い達がいる屋敷も見えない。

もう、何も見えない。

## ヒューローク

凄く眠くて、声もよく聞こえなかつた。

ほんの少しだけ、いつもと違つていつの声がした。

声の質が違うんじやなくて、口調とかそれに含まれる感情が違つ。

あたしが聞いた事のない声だつた。

聞いたやダメだ、そう本能的に思える声だつた。

多分、声はちゃんとあたしの耳に届いていたけれど、あたしの本能がそれを認識しまいとしていたんだと思つ。

なんか知らないけど迎えに来てくれた、それが嬉しくてすぐにでも駆け寄りたかった。

けど、今近づいたら、もう何も元には戻らないよつな、そんな予感がしていた。

だからあたしは、そのまま寝てこよつと黙つたのに。

身体が、勝手に動き出していた。

あたしが近づいて行くのに、レイは気付かない。

あたしが近づくのにも、ナイフを持っているのにも、レイは気付かない。

逃げてと叫びたいのに、口も動かない。

取り返しのつかない事になると、何でかあたしは思つていた。

呼吸も足取りも、あたしの身体でないように、暗殺者のように動く。全てを制御されたような感覚が、気持ち悪かつた。いつの間にか首に掛けられた金色の首輪が、どうしてか凄く氣味悪かつた。

唯一正常に機能している耳も、レイの声を拾えない。

代わりに、あたしが聞いたのは。

『こいつを刺せ!』

という、ルミナスと名乗つた男の命令だつた。

人を刺したのは、初めてだつた。

ナイフがレイの身体を貫いた瞬間、一瞬だけ炎が燃え広がり、レイの身体を飲み込んだ。

「え……あつ、……う、そ」

現れたのは、小柄な黒髪の少年だつた。

あたしと対して年も変わらない、妙に幼く見える少年。十人が十人、男らしいと言うよりは可愛らしいと言いつつ、細く整つた顔立ち。今はその顔に苦悶が刻まれていたが。

目が合つた。

飲み込まれそうなほど深く黒い瞳だ。見つめていれば、その暗闇に取り込まれてしまふと錯覚を覚えるほどに。けれど今は、少年の表情に目が行つた。

痛み。

確かに、少年の顔は苦痛で酷く歪んでいる。

だけど、そうじゃない。

それは肉体的な痛みじやなくて、心の部分での痛みを受けたような、そんな風に見えた。

少年はふらふらと支えを求めて歩き出して、窓に寄りかかる。

あたしはもう、少年を見ていなかつた。

あたしが今まで見ていたのは、一体なんだつたの？

あいつは、レイに化けていた？ 一体いつから？ あたしと最初に会つたときから、レイと言う人間は上辺でしかなかつた？ あたしを助けに来てくれたレイは、あいつの変装？

それに？？ あたしはあいつとどこかで会つたような気がする。解からなくなる。

視界で、炎の塊が動いた。

あたしはまだ呆然とそれを眺めていた。どうしようとも思えなかつた。

思考が停止していた。

「？？？！？」

不意に、炎があたしを包み込んだ。

じわじわと何かが消えていく感覚があたしを飲み込んでいる。

これは？？ 他人に迷惑を掛けづけたあたしへの天罰なのだろうか。

胸が苦しかつた。大切なものを失つたような、胸にぽかりと穴があいたような痛み。

何にしてもあたしは、どうしてだか解からないけど、あいつが？ レイが一体なんなのか解からないけど、助けに来た人を刺してしまつたのだ。

裏切つたのだ。

天罰なのだわ。だからこんなに苦しいのだ。

けど。

それにしてはなんだか、とっても心地いい温かさだった。

ペシペシと、頬を叩かれた。

「ん……あれ？」

「あっ、気が付いた？ リン！ この人も無事よー。」

「やつぱり。これで全員無事みたいね」

その感触に目を開けると、双子がいた。

金髪をポニーtailにした凛々しい顔の？？けど服が残念な？？そ  
つくりさん。

あれ？ あたしは……生きてるの？

気が付けば、金の首輪は消滅していた。

それどころか、身を清めたようなスッとした感覚がある。

ごめん。

「……んつ

あの人の声が聞こえた気がして、私は目を覚ました。

見慣れぬ天井に、温もりのない部屋。

そうだ、私は何故か寝てしまつて、マモルはルミナスの屋敷に：

：

「……マモル？」

起き上がつて、よく片付いた研究所を探すけど、マモルの姿はない。連れ戻しに行つた、フリーの姿もない。

ほんの少しだけ、不安になる。彼もまた、私のようにあの男に捕まつたのかと。

けど大丈夫。約束した。

戻つてくると、離さないと、彼は言つてくれた。

だから大丈夫、きっと戻つてくる。

それに、彼は私なんかよりもずっと凄い。

浄化と消滅を操る、『愛と情熱の戦士』だと苦笑いで語つていたのだ。

大丈夫、私は待つていればいい。それで、彼は帰つてくるはずだ。

けれど、いくら待つても、彼は帰つてこなかつた。

## ハルローゲ（後書き）

これで第一章が終了です。

次回は、勇者の物語。

このタイミングでやつた方が良いと思い、変更させていただきました。  
「」迷惑をおかけしました。

## プロローグ

「父様、誰ですかこの田つきの悪い男は！」

「うむ……、お前の世話役にだな。雇った」

「巫山戯ないでください！ 私に護衛など必要ありません！」

「…………」

俺は頭を抱えくなつていた。

一体、何がどうしてこつなつたのだろう。

俺の目の前では、親子ゲンカが繰り広げられている。

一人は、俺が尊敬の念すら感じる一人の偉大な男。

威厳に満ちた顔つきで、黒髪がシンボル。最近発覚したのは、娘に強く出られない事か。

もう一人は、その男が溺愛している娘。

プラチナブロンドをツインテールにした、十四歳くらいの美少女だ。今はその顔を怒りで真っ赤に染めている。

本当、なんでだ。

天才と呼ばれ、人類最強の名を手に入れた俺が。

『勇者』の俺が。

「嫌です！ それに何も、こんな無愛想な人じやなくとも良いじやないですか」

「む？ さては……エリス、お前……」

「な、何ですか父様」

なんだって。

「こやつが怖いのか？」

「そ、そんな訳ないじゃないですか！？ な、何をおっしゃってる  
んですかお父様！！ 怖い訳がないでしょー。私は」

『魔王の娘』の執事に雇われているんだろう。

人生は面白い。

『勇者』として、一匹の化け物として、『魔王』を倒すはずだつ  
たと言うのに。

どこをどう間違つたら、倒すべき相手の最愛の娘の世話役に抜擢  
されるんだか。

「あつ……」

「ユート！ 一体いくつの食器を壊せば気が済むのよー。」

「……済まない。何ぶん、慣れない事でな」

「その口の聞き方も！ あなたは私の従者なのよー。」

はあ、と思わず溜息をついてしまい、また説教された。  
仕方がないだろ、俺はこれまで家事と言つものをやつた事がない  
のだから。

ティーカップの破片を拾い集め、魔術で元の形へと戻す。  
さつさと紅茶を注ぎなさい、と急かす足を組んだエリス、『魔王  
の娘』。

はいはい、とティーカップに覚束無い手つきで紅茶を注ぐ俺、『  
勇者』。

「本当、世話の焼ける人ね」

「悪いな。どうにも慣れない」

「あなたが私の世話役なんだけどね……」

今度はエリスが、はあ……と溜息をつく番だった。

「おい、溜息を吐くと幸せが逃げるぞ」

「誰の所為よ！」

今にも火を噴きそうな勢いで怒るエリス。

俺は悪くない。悪いのは、不適材不適所をした魔王だ。

「そう怒つてないで笑え。笑つていれば、逃がした幸せも戻つてくれ

る

「……せつ言うあなたは、全然笑わないじゃない」

「お前な……。これが笑える状況かよ」

「？」

おつと、そう言えばエリスは知らないんだつたか。

俺が『勇者』である事と、『勇者』と『魔王』の契約を。

「良いんだよ。俺は幸せになる気はないからな」

「やめて。それじゃあ、あなたに四六時中付いて回られる私も、あ

なたの不幸に巻き込まれるじゃない」

「俺に幸せになれと？」

「いいえ。さつさとどつかに行けと」

そいつは無理な相談だな、と俺は茶菓子を摘みながら言った。

「少なくとも、お前が俺に勝てるようになるまではな

「……むつ」

「もつとも？ 人類最強の俺にお前が勝てる日が来るとは思えない  
がな」

紅茶をぶつかれた。

-----

俺は天才であり、人類最強の称号を得た勇者だが、私利私欲のために戦っていた。

俺は強くなりたかった。

幼い頃、一目惚れした少女をドラゴンに攫わされてから、俺はひたすら強くなるためだけに生きて来た。攫われた少女の事は、今でも鮮明に思い出せる。事実、俺は彼女のために戦つていた。

腰まであるプラチナブロンドが神秘的に輝き、真っ白い肌はまるで雪の様で、触れてしまえば溶けてしまいそうだった。深紅の瞳が宝石のように美しく、俺の幼い恋心を燃え上がらせたのも良く覚えている。

それよりも何よりも、彼女の声を聞くと癒されたのが一番だろう。当時、既に戦いに明け暮れていた俺に、彼女の鈴のような声は癒し以外の何ものでもなかつた。実際、彼女に会うためには、かなり強い魔物を倒さなければ辿り着けないような辺境の地だつたし、彼女の元に辿り着く時には虫の息に近かつた。

そんな俺に、彼女はいつも優しい言葉をかけてくれた。俺はただそれが嬉しかつた。彼女の声を聞けば、また明日も会いたいという気になつて、無事に村まで戻れだし、怪我だつて不思議とすぐ治つたと思う。

そんな彼女と出会いつて一ヶ月、彼女はドラゴンに連れ去られた。

他でも無い、俺の目の前で。

当時の俺はまだ十歳にも満たない子供。魔物の中で最凶と呼ばれるドラゴンに挑むのは無謀だつた。それでも彼女を守るために俺は剣を握つたのだが、あろう事か彼女に庇われて助かつたのだ。

その時、彼女の言った言葉を俺はまだ覚えている。

「待つていてます」

だから俺は答えた。

「また会いに行くから」

それが、俺達の約束だった。

俺は自分の無力が憎かつた。

守ろうと思っていた彼女に守られ、すごく悔しかつた。

俺に力があれば、明日も同じように会えたと言うのに。俺に力がないばかりに、今までみたいな日はもう戻つてこないのだ。

だが、俺は諦めなかつた。彼女を攫つたドラゴンが魔王の飼つているものだと知つた俺は、魔王を倒すべく、ランベルグ帝国が開発を進めている人類最強？？『勇者』になることを決意した。

そして十六歳の誕生日、俺は『勇者』になつた。

その時俺は、何も知らなかつた。

大々的に俺の存在はアピールされ、魔物に怯える時代は終わりだと皇帝は声高々に宣言した。

たくさんの期待と裏腹に、たつた一人の少女と再び会うためだけに勇者として旅立つた俺が最初に出会つた魔物は。

「貴様が勇者か？ なんだ、まだ若造ではないか」

漆黒の鎧に身を包み、巨大な禍禍しい長剣を担いだ一人の黒髪の男。

その身から溢れ出ている闇のようなオーラが、全てを語つていた。

「魔王つ！？」

終わりが？？始まりにいた。

「来い、勇者。貴様の虚言妄想、人間どものつざつたらしい希望、打ち碎いてくれるわ！」

「アンタを倒して、俺は？？」

そして？？俺の旅は、始まることがなく、終わりを告げた。

「人間にしては、なかなかだつたぞ小僧」

ひゅーひゅーと、声にならない音が口から漏れる。俺は空を仰ぎ見ていた。

体の半分が、消し飛んでいた。

魔王の頬に掠り傷、魔王の片腕はぶらぶらと力なく揺れていた。

……何が、なかなかだ。

魔術の一つも使わずに、何が！ 結局俺は、力不足かよ……。

「終いだ」

そして俺は？？魔王に殺された。

「死んでしまつたかユートよ。だが、ここまで全てが予定通りだ。これから、お前の旅が始まる」

俺は目覚めた。

目覚めてそうそう、俺は『勇者』の真相を知らされた。

魔王に対抗するために生み出された、最終兵器『勇者』。

皇帝に魂という手綱を握られた、一匹の化物。

その束縛は、魔王を倒すまで解き放たれることは無い。

クローンと呼ばれる全く同じ肉体に、死後も魂を定着させられる。死んだら生き返る、不死身の化物。

俺はその時、初めて後悔した。

こんな化け物に？？彼女はいつものように優しい声をかけてくれるのか？

『魔王』

この世の全ての魔物の頂点に君臨し、それを統べる者。そして？？世界征服を企む者。

現在、この世界は魔物によって人類滅亡の危機に絶たされている。その魔物を統べる魔王を倒せば、世界に平和が訪れる。そのためここ数年、世界各国で腕利きの者を勇者とし、魔王討伐の任を「」えてきた。

そして、このランベルグ帝国が何十年の歳月をかけて生み出した最高傑作が、俺だ。

百年に一度と呼ばれる天才。

そして？？不老不死。

ランベルグ帝国はこの世界で唯一、魔法の存在を認め、表沙汰にはしていないが使用している国だ。

この勇者システムも、ベースは魔法だ。  
くそ忌々しい、おぞましいシステム。

「小僧……、何故生きている？」

「……アンタは知らなくて良い事だ」

俺は剣を構え、濁り切った瞳で魔王を睨みつける。  
俺が化け物になつて、全ては変わつた。

失つてきた物は大きい。

始めての死後、俺には仲間がいた。

魔術師と戦士、それに弓使いの四人パーティを組んだ。  
そして一度目の死は、その仲間を守つてだった。

巨大な獣に噛み付かれそうだった弓使いを庇つて、俺は喰われた。  
気が狂いそうな異臭、奪われて行く四肢の感覚、溶けて行く皮膚、  
圧迫される頭。

数々の激痛を伴い、俺は一度目の死を迎えた。

三度目の死は、仲間に殺された。

「どうせあんた、死んでも生き返るんでしょ？ 一度死んで、新しい身体にした方が、完璧に治つて良いでしょ？」

「うつせえんだよ！ 正義の味方気取つてんじゃねえよ、この化け物が！」

そういうふた彼らは、俺を半殺しにした所で魔物に襲われて死んだ。

勇者は、一体なんなのだろう。

皇帝は、俺がもたらす武勇と報酬を求めているだけだ。  
じゃあ、他の奴らは？

助けた奴隸は、情欲に溺れていた。

助けた貴族は、俺が去ったその後、市民に圧制を強いた。

助けた市民は、俺がただ魔王を倒すのを待つてているだけだ。

助けた亞人は、美味そうに人を食っていた。

助けた魔術師は、俺の強さに嫉妬した。

助けた戦士は、悪行に手を染めて俺の邪魔をした。

俺が自分を化け物にしてまで守っている人間は、凄く醜い。

そういう俺は、人間に戻るために戦っているのだから、笑えない。

……人間って生き物は、勝手なもんだ。

何をどうして来たのかも曖昧のまま、いつの間にか俺は魔王の城へと辿り着いていた。そこに仲間の姿など無く、あるのはただ魔物の血に染まつた一人の化物の姿だけだ。

殺して殺されて、殺す事でしか何も守れやしない化け物が一匹。

俺は魔王の城の正門を通り、真正面から突き進む。  
静かな城だった。これから最終局面を迎える、その嵐の前の静けさ。

俺は自分の目的を思い出す。

攫われた、一人の少女の事を。

人間に戻りたいのは、魔王を倒したいのは、全てこのためだ。  
本当に攫われたのかも分からぬ。まだ生きているのかも分からぬ。助け出したとして、彼女が俺を今まで通りに接してくれるかも分からぬ。

けれど、それでも構わない。一目で良いから、会いたいのだ。

ガガガ、と大きな音を立てて謁見の間の扉が倒れた。俺の足蹴りで、扉が壊れた。

「何だ！？」

玉座と呼べる豪勢な椅子に腰掛けているおっさんが立ち上がるのが見えた。

聞き覚えのある声だ。見覚えのある姿だ。

俺を最初に殺してくれた奴だ。

やつと、見つけた。

俺は口元をゆがめ、肩に担いだ長剣をそいつに向ける。

「さあ魔王、俺のために死んでくれ」

いつになるか分からぬが、待つてくれ。

俺は、君に会いに行く。

例え、化け物と誹られようとも。

俺は、俺のために君に会いに行こう。

-----

という決意を抱いたはずだったのだが、

「…………あら？　コート、あなた随分と慣れて來たのね」

「まあな。俺は天才だから、一度した過ちは繰り返さない  
「その口調は変わらないのね……」

「俺はお前に敬意を払う気はないし、やつをれても困るだろ？」「ええ……まあ」

何で紅茶を入れるのに特化してんんだか。

と、美味しそうに俺を入れた紅茶を飲む魔王の娘、エリスを見な

がらそう思つていた。

俺が毒を入れるとか、人質に取るとか考へないのか？　あの親馬鹿魔王は。

「はあ……」

「ゴート！　あなたまた溜息をつきましたね！　その癖、いい加減に止めてください！」

「すまない。気をつけるよ」

「分かれば良いんですよ。それより、今日もこの後鍛錬に付き合つてくださいね？」

「はあ……」

なんでこの女は、こんなにも血氣盛んなんだらう。

「小僧。貴様は面白い奴だな。濁り淀んだ目の中に一筋の光が見える。何が貴様を狂わせない？」

「アンタに攫われた女の子を助けるためなんだよ！」

「攫つた？ 儂が？ それは何かの勘違いだな」

「そうかよ！ だからと言つて、俺がアンタを殺さなくていい理由にはならないんだがな！」

「…………分からず屋め」

殺されるアンタにしてみれば、そうだよな。

魔王を倒した所で、この世界に平和など訪れやしない。

魔王は、魔物の頂点に君臨こなすれ、それを統べる者ではなかつた。

魔物が人を襲うのは、生きるため。それを一体どうやって止めると言つ？ 儂なら、勝手に健康を維持して繁殖してくれる人間、その生活区を脅かすようなことはせず、出て来た人間を二つそり喰らう事を進めるぞ。

そう言つた魔王の言葉に、俺は言い返せなかつた。

それよりも、勇者なんてシステムが、よりおぞましく思えて來た。

これはもしかすると、皇帝だかなんだかの不老不死の実験なんじやないのか？

そう思えて、魔王を倒してこのシステムを潰さなければならぬと思えていた。

それに、魔王を倒す契約で魂を縛られている以上、俺が人間に戻るためには、魔王を倒さなければならないのは、変わりなかつた。

魔王が彼女の事を知らないと言つたが、俺にその真偽を確かめる術は無い。

俺はただ、魔王に取つて彼女が数えられもしない命だった、なんて結末を望まないだけだ。

そうであつたなら、尚更俺は魔王を倒すために尽力するだけだが。

死んだ。

これで何度も死だらうか。

俺は魔王に何度も無く殺されている。数えるのを諦めたくらいだ。だが、すべては無駄ではない。

戦うたびに、俺は魔王に手傷を負わせている。

最初の戦いで、俺は魔王の腕に傷を負わせた。それは完治には程遠く、そこに隙が生まれている。一度目の戦いでは、頬に鋭い切り傷をつけた。その後、魔術で木つ端微塵に吹つ飛ばされたが。三度目、俺は腹を剣で貫かれながらも、同士討ち覚悟の一突きで魔王の胸に浅い傷をつけた。

その頃からか、魔王に確実な焦りと困惑が見えたのは。

魔王に腹を剣で深々と刺された俺は、だが笑みを浮かべていた。

「何故、貴様は生きている！？」

「あんたが知る必要は？？無い！」

そう言つて、俺は体内の魔力を暴走させた。

魔力は、力だ。俺は、自分の体を構成する目に見えない力をすべて外向き、魔王に向けて使用した。

結果、俺の体は崩壊した。

代わりに、魔王と言えど無視することが出来ない、莫大な量の魔力が魔王に向けて放たれた。

「前回の貴様の攻撃の所為で、城が揺れたではないか！」

「まじか。揺れただけかよ」

「魔王の城を舐めるな！」

「俺を舐めてるからだ」

台詞的には俺の優勢に思えるだろうが、実のところ俺は両腕が無かつた。膝をつき息も絶え絶えだ。対して、魔王は全身から血を滴らせていた。

俺は腕の生えていたところからぼたぼたと溢れ出す血液に魔力を注ぎ、その形を自在に操る。

「????！」

「化物みたいなアンタには、俺みたいな化物とのダンスがお似合いなんだよ！」

溢れ出る血流は、腕の生え際へと循環する。馬鹿にならない魔力の緻密なコントロール、そして強靭な精神力を有さなければ、血流ブレードなど扱えはしない。

自在に動く血の刃を従え、俺は魔王と乱舞を繰り広げた。

死んだ。

目覚めたのは、もう見慣れた帝都にある教会だ。

転移の魔法具（市場ではかなり高価だが、帝国の魔法使いが作っているので無料で手に入る）を使うと、一度行ったことの在る場所には数秒で行けるので、魔王の城にはすぐに向かえる。だが、その前に前回の反省をしよう。

どうやらいくら循環させていたとはいえ、血を失いすぎていたようだ。前回の死因は出血多量だな。戦っていたときの記憶が大分無い。だが、あの血流ブレードはかなり使えた。が、あれは前回限りだろう。

俺は新しい体に慣れるために節々を動かしながら、次の戦略を考えていた。

二刀流。

魔王の攻撃を片手で受け止められるよつになつた俺は、一本の長剣を駆使して魔王を攻めていた。

発想は、前回の血流ブレード。あの時は、剣と腕の代わり生やした、二本の血流の刃で戦つた。そのときに、二刀流の動きはなんとなく把握した。

魔王の剣がぶつかるその狭間に、鬪氣で足腰と受け止める剣を持つた腕を強化する。俺は人間としては化物みたいな魔力を有しているが、それは魔王に比べれば微々たる物だ。こうやって節約して使っていかないと、長期戦になつたときに対応できない。動きの要所要所で身体強化を行なう。

今回は、魔王が劣勢だ。

前回の戦いから二日。まだ体調が万全ではないようだ。  
その顔には、苦悶が見える。

「どうした魔王？　いつもの切れが無いな！」

「うるさい！　貴様には関係ないことだ！　いや、すべて貴様のせいだ！」

「ん？　いやって言い返されるのも初めてだ。

戦うことで相手の心情を読めると言つたが、生憎俺には魔王の心は読みない。

だから、言葉にして尋ねる。

「何だ？　言つてみろよ。アンタが死んだ後、俺が責任もつてやるから

「ほざけ！　？？ツ！？」

不意に、魔王はその動きを止めた。そして、何事か考える様に顎を撫でる。

俺はその不可解な動作に一度距離を取り、様子を見？？。

「そうか！　その手があつたか！」

「ツ！？」

魔王が目に見えるほど魔力を集めだした。

しまつた。いつも俺は魔術を使わせぬように、接近戦を仕掛けていたのだつた。

俺に、魔術の耐性はあまり無い。

何せ、死んで復活すればいいだけの話だからだ。……なあ、魔術師。

「試させてもらひつわ！ 勇者…」

「何が？？」

「貴様が何をしようと甦るのかを…」

瞬間、俺の意識は飛んだ。

死んだ、ようだった。

「……くそ」

二刀流でいい感じに攻められていただけに、この敗北は痛い。魔王に何の手傷も負わせることが出来なかつた。  
まあ、二刀流は十分に使えるという収穫があつたし、良しとしよう。

俺は新しい体に不具合が無いのを確認すると、すぐさま装備を整え、魔王の城へと発つた。

前回の死から、一日だつた。

「来たな、勇者よ」

「……今回は、あまり驚かないんだな」

前回、殺されて三日で来た時は大慌てしていた。転移の魔法具を使用すれば、どこからでも魔王の謁見の間まで徒步五分だ。だが、今回の魔王は少し違つていた。

攻撃が面白いように決まる。

今回は一太刀しか持つてこなかつたが、その攻撃が次々と決まつ

ていく。魔王の動きに切れが無い。

「どうした魔王！ 昨日より酷いぞー。」

「……勇者よ、何故貴様は儂を殺そうとする？』

不意に、魔王がそう尋ねて來た。

唐突に。

だから俺は、何度も自分に言い聞かせて來ていた解答を、思わず口にしてしまった。

「アンタを殺さなきや、俺は人間に戻れないんだよー。」「何だと？」

驚く魔王を気に留めず、俺は剣を振るつ。  
化け物から？？人間に戻るため。

「…………」

魔王は、何かを考えるように俺を見つめていた。  
……何かがおかしい。前回の最後から、何かが変だ。

そう思っていたといふのに、俺は調子に乗った。

魔王が不意に剣を投げ出した。

それをチャンスと捕え、俺は剣を構え魔王に突撃する。魔王も、  
素手で俺に向かってきた。  
交錯、そして？？。

魔王の手を、俺の剣が貫いた。

「がつー？」

だが溢れたその声は、魔王に剣を突き立てた、俺のものだった。腕一本と武器を投げ捨てての特攻。

俺はそれを、魔王の最後の悪あがきだと思った。だが、違ったのだ。

それは、一発逆転の一撃。

「小僧！ これで、全て終わりだ！」

ぎしきしこと掴まれた頭が悲鳴をあげる。

その激しい痛みに、思考がままならない。だが、剣は掴んだままだつた。

がむしゃらに剣を振り回している俺は、もはやどうでも良かつた。

何を言つてんのだ、魔王。俺は何度でも甦るし、何度でも繰り返す。アンタが死ぬまで、何度でもだ。

……何度も、繰り返さなきゃならないんだ。

これからも、いつまでも……あんたが死ぬまで。

そして、俺は意識を失った。

ああ……、また繰り返すのか。

魔王を倒すまで永遠に続く魂の呪縛。

これは、あと何年続くのだろう。

俺以上に強く、こんな糞みたいなシステムを許容する奴は存在しない。

だから必然的に、俺は何度でも甦らせられる。

さあ、また始めるか。育てる必要ない体がそこにあるんだ。

そう思つて、俺は目を開けた。

だがそれは、俺の勘違いであった。

「！？」

目覚めたのは、見慣れた教会ではなかつた。

見慣れぬ場所、王族でも使つていそうな寝室。今までのふかふかが全て嘘に思えてくるほどに柔らかなベッドで、俺は寝ていた。豪勢というよりは風情があると言つべき、木目が綺麗なタンス。足元に広がるのは、暖かなクリーム色の絨毯。なんだ？ 俺は、王族に招待でもされたのか？ 意識を失つた後、無意識に魔王を、倒したのか？

起き上がり、かすかな頭痛を感じつゝも、俺は窓辺へと向かう。曇り一つ無く、外の世界を綺麗に透す窓ガラス。

そこから見えたのは？？、曇り一つ無い青空。眼下に広がるのはエメラルドグリーンに輝く海。

そこから広がる景色は、絶景だつた。

俺が何度も死んでも守りたかつた世界が？？そこには広がつていた。

「気付いたか、勇者」

何度も死んでも倒さなければならぬ男が、背後から現れたが。

「……何が目的なんだ、魔王」

「勇者よ、貴様は言つておつたな。儂が死んだ後の責任を持つ、と」

俺は今、魔王と並んで魔王の城の中を歩いている。  
なんだつて、こんなことになつてしまつたんだか。

「……ちつ。そんなこと言つたな」

「…………覚えてないと言わないのだな」

「当たり前だろ。俺は勇者だぞ？」

勇者だから嘘はつかない？？そんな訳が無い。

ただ単純に俺は、何度も戦つうちにアンタを、ただの敵とは思え  
なくなつていただけだ。

守りたかった人間よりも、アンタの方が気が合つただけだ。

「それより何だ、俺に殺される覚悟が出来たのか？」

「違うわ！…………貴様、少々図に乗つてはおらぬか？」

「まあな。アンタが俺を殺さずにこうして魔法を掛けたって事は、  
俺を殺す気は無いんだろう？なら、俺がどう振るう舞おうがアンタ  
は俺を殺せない。精々、いつも通りにさせてくれ」

「これでいつも通りとは…………つぐづぐ呆れた男だな、おぬしは」

魔王は、俺に魔法を掛けた。

魔術ではなく、魔法を。

俺は今??死ぬことが出来ない。

正確には、超回復とこう魔法を喰らひついて、死ぬような傷も一瞬で治つてしまつ。

これは、どんな切り傷も立ち所に治すという、恐ろしい魔法だ。副作用に、掛けた人物の言いなりになるといつ、恐ろしい魔法だ。いや、副作用がメインだる、絶対。

倒すべき相手の言いなりとか、屈辱だ。

……だが。

「……正直、俺は飼われるのに慣れてしまつてゐるのかもな」「何か言つたか？」

「いや、何も。で、なんだよ？　俺に頼みたい」とつてのは？

魔王は、俺に殺されても良いと言つた。

俺に掛けられた呪いとも言つべき魔法は、さしもの魔王でも解除できなかつた。

だから、解きたければ殺してよい。

そう、魔王は言つてくれた。

……頼みを聞いてくれたら、といつ条件付で。

俺は、世界のために戦つちゃいない。

自分のために、戦つているんだ。

だから、別にこれでもいいかな、と俺は思つた。

悪い、もう少し、待つてくれないか？

胸くそ悪いんだよ。ただ皇帝の言いなりになつて、何の意味も無く魔王を殺してしまつのは。

じゃあ教えてくれ、魔王。その頼みつて奴を？？。

魔王は、神妙な顔をしていつ言った。

「……引き籠つた娘を、部屋から出してくれぬか？」

「何で俺が！？ 親のアンタがやれよ！」

「断る！ 儂は死にとう無い！」

どんな気性の荒い娘だよ……。この親にして、この子ありつて奴か？

「貴様……、今、とんでもなく失礼なことを考えんかつたか？ 違うぞ！ 娘は儂とは似ておらぬからなー？」

「自分に似るのは嫌だつたのか……」

「当たり前だ！ 儂の妻は偉い美人でな……」

親バカの話は聞き流し、俺は娘が引き籠つている部屋へと向かつていた。魔王が娘の自慢話をしながら、先導している。

魔王の城は掃除が行き届いており、廊下の隅にも誇り一つ落ちていない。良い執事やメイドでもいるのだろうか。

「ここにだ。頼んだぞ、勇者よ」

魔王が指差した先には、ミスリルの扉が。

……この城は、思つた以上に金がかかつてゐる。

「案内はした。では、儂はこれで失礼する

「……良いのかよ？ 俺はアンタの娘を人質に取るかもしれないぞ？」

「何を言つ。貴様は勇者なのだろう？」

「……喰えない爺だ」

明らかに逃げ腰の魔王を手で追つ払い、俺は扉を見据えた。

……一体、娘とやらはどれほど強いのか。

「ンンン、とまずはノックしてみ？？。

「うつさい馬鹿！ ノックすんな！」

耳にキンキンと声が響いた。

扉と壁越しにしては、やけに大きな声だ。何らかの魔術で声を通しているらしい。

しかし……、年頃の女の子が部屋に入る時、ノックをするな、か。

魔王よ、一体どんな育て方をしたんだ。

話を聞く限り、美人らしいが？？。

実力行使と行きますか。

俺は剣？？ではなく、魔王からもらつたミスリル刀を構える。本当、金が惜しみなく使われている。魔王が統治する国が存在しないから、金は余つていいのかもしない。いや、そうなると収入はどこから？ 魔物を倒して金を稼ぐことも出来ないし、税収と言つのも無い。まさか、自給自足？ どうでもいいか。

この武器の性能は斬ることにある。じゃあ、邪魔な扉を取つりますか。

俺は刀を居合い抜き、扉を一閃。

「……は？」

瞬間、刀が粉々に碎けた。

手に握られた柄だけが虚しく残っている。刃が木つ端微塵だ。

「ばーか！ いくら父様が扉を攻撃しても、絶対に壊れないわよー！」

「どうやら、何らかの魔術か魔法で扉を硬くしているらしい。」

そして、俺を父親、魔王だと勘違いしているようだ。

-----

「……とこう訳だった。で、父親のアンタはこの後どうしていた?」

「…………やはり駄目だったか」

頃垂れる魔王に、最初に会った頃の威厳はまるで無い。  
まるで無いのに……、俺はこちらの方が好きだった。  
皮肉なことに、俺が守りたかったのは、こいついた家族の馴れ合  
いだから。

家族のいない俺が、望んだ物。

何故だろう。守りたかった人間には、こいついた家族の温か  
みが無く、倒すべき魔王にこういった面があるのは。

「…………」

「どうした、勇者よ? 浮かない顔をしてあるな

「…………どうもしない。で、アンタはこいつもこの後どうしていった?」

「脣に食事を届けた」

駄目だこいつ、完全に娘を甘やかしている。

……いや、別に引き籠もってても良いのなら構わないが。

俺としては、一刻も早くあの子に会いたい。

「…………魔王、一つ相談があるが、いいか?」

「なんだ? 儂を今この場で殺すことは不可能だと先に言つておくれ

ぞ

俺は狂戦士じゃないんだが……。



俺は今、魔王の城の屋根にいる。

そこから見下ろした景色は、あまりにも綺麗過ぎてなんともいえなかつた。

魔王の城なんて、赤紫の毒々しい海と生物の欠片も無い山々に囲まれ、どす黒い雲に覆われた場所にあると思っていたが、それは大きな間違いだつたようだ。

だが実際は、その逆だつた。綺麗に晴れ渡る空、輝く海、木々の生い茂つた山々。

この城の場所が、世界で一番美しいのではないだろうか。  
そんな場所だからこそ、魔王は城を建てたのではないだろうか。  
そう思う、今日この頃。

敵の城で何を覗いでいるんだか。

まして、敵の願いを叶えようとしているのだから。

俺は屋根から飛び降り、

「さやつー？」

魔王の娘の部屋のガラスを割つて侵入した。その際、何か悲鳴が聞こえたが気にしない。

そして、部屋の中を見渡して??。

「?・?・ツ」

腰を抜かしている少女を見つけた。

少女は、俺を一目見て。

「と、父様ああああ！」

扉からすごい勢いで逃げ出していった。  
ぽたぽたと血が滴り落ちた。

……おっと、頭を切っちゃった。

-----

「だいたいコート！ あなたは何であんな入り方をするのよ…」

「お前が引き籠つていたからだろ？」

「私は部屋から出たでしょ？ なんで世話役なんかになってるのよ

！」

「帝国には帰れないからな。人探しの宿屋にちょうど良かつただけ  
だ」

「魔王の城を宿屋代わりつて……あなたって何者？」

俺はしばしその解答を考え、そして苦笑を浮かべた。

「愚か者……だな」

## 悪の魔者と親愛の魔王 4（後書き）

今までのストーリーで気になら点がありましたら、この章で解決しようと思います。

何かあれば、感想をよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8607v/>

例えは仮の魔王様

2011年10月10日11時30分発行